

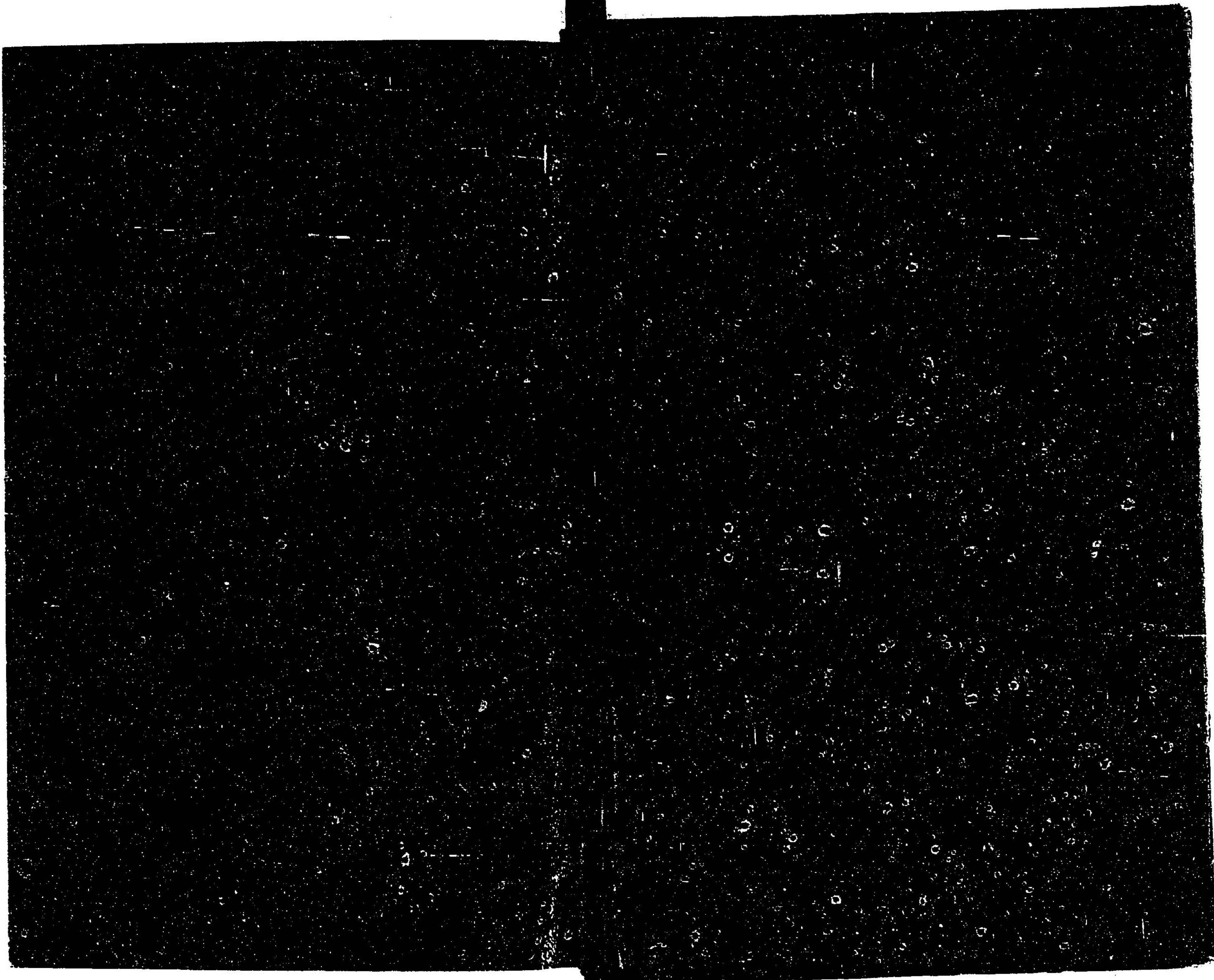
Illustrated
GUIDE BOOK

90
E
428

天加國

會圖所宿中





特62

531/2/12292

GUIDE BOOK

BY WYEDA AND TAKI
BY 中村 恒三郎 著

日本名所圖繪

中村恒三郎 校正
田維曉 著作

東海道之圖

嵩山堂梓



SHO SAN DO



伊賀國之部

此國東海道之西端又位置を以て其國境の東南は伊勢に境接し西北は大和及び山城
 近江の三國に連絡し山嶽は西南に峙ちて伊勢大和の間を跨り其山脈左右に延長し
 東は七尾長野並取の諸嶺を貫き西方は黒田峠に峯嶺續きて四境は土封の如なり
 沿河の地のみ平坦な木本四郡を分配す伊賀山田阿拜名張等にしてまた
 大河は九十九千二百餘里は新羅の鈴鹿郡加太より発源するを柘植川と云ひてまた
 伊賀川と云ふは其源は伊賀の鈴鹿郡加太より発源するを柘植川と云ひてまた
 近江甲賀郡信樂より流るるを河合川と云阿拜郡河合村に至り二水相會して西南に
 流れて服部川を容れ又長田川を合併して梅溪を経て山城に入木津川の流れと成る
 名張川一名深瀬と云此流れも二源にして東西に相分ち東川は水源を伊勢に発して
 西川一名宇陀川と云大和より來り東川と相會して本流と成り木津川に注ぐなり

赤目八十四瀑

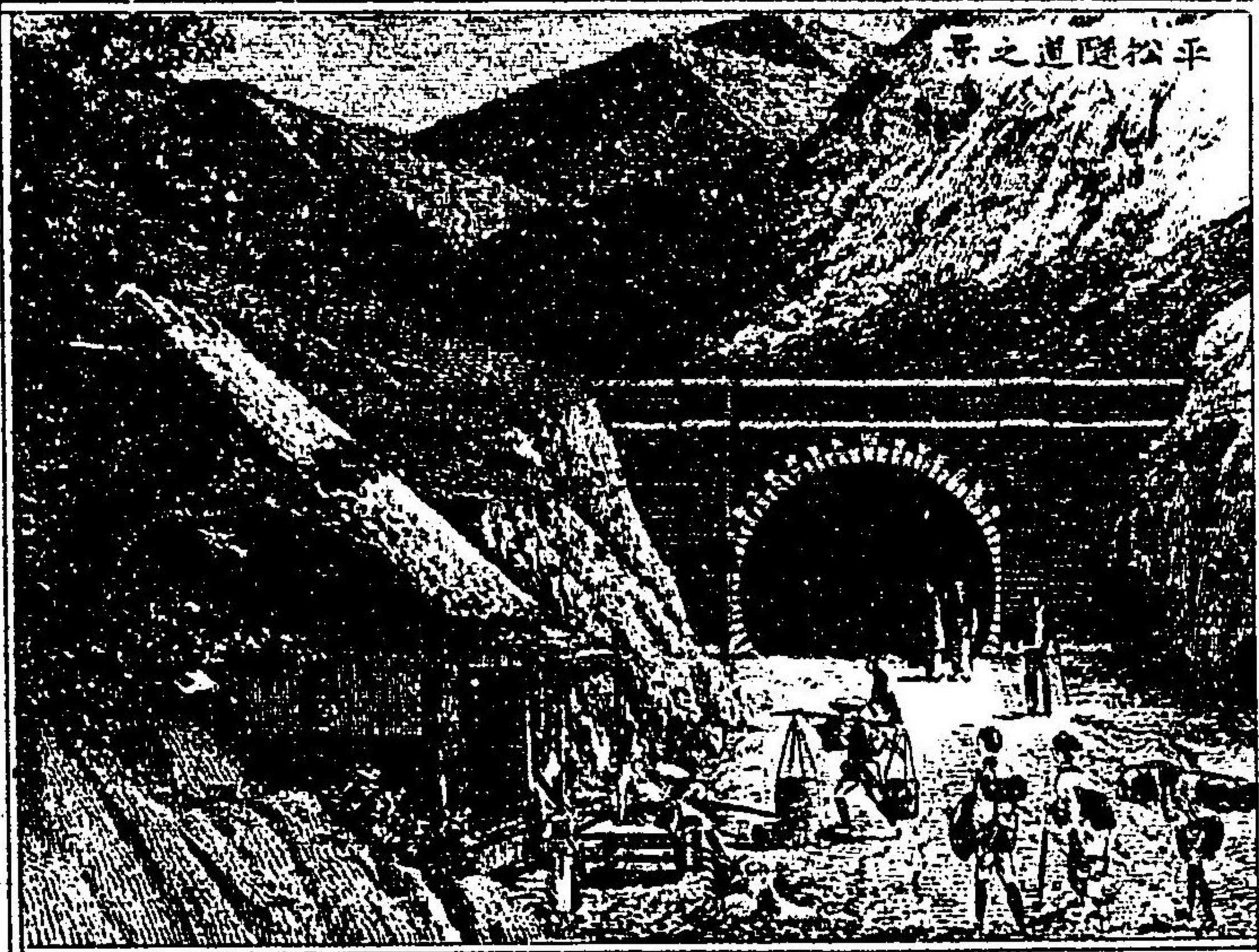


御殿内五國を廻覽し大本山を閣せしが
 這回は東海道を志し伊賀の國より始んと
 俵路や萩原を出立て鏡無を過れば長瀬村
 此地を越れば伊賀國の有名の赤目瀑
 先づ一覽せんと思立阿部田村
 是より道を南に岐れ往くと一里餘にして
 瀑布の地に到りつゝ、瀑地は長坂村と謂て
 安部田及名張の二水會する處より鬼坂と
 巨る幽邃の地にして山間の溪流狭けれど
 水勢岸崖に激流して瀑を成こと四十八所
 其大なる者は上欄に掲る圖の如く其高さ
 十八丈危巖を飛瀉し凜然として壯觀なり
 阿部田村より下流に赤目瀑 松下



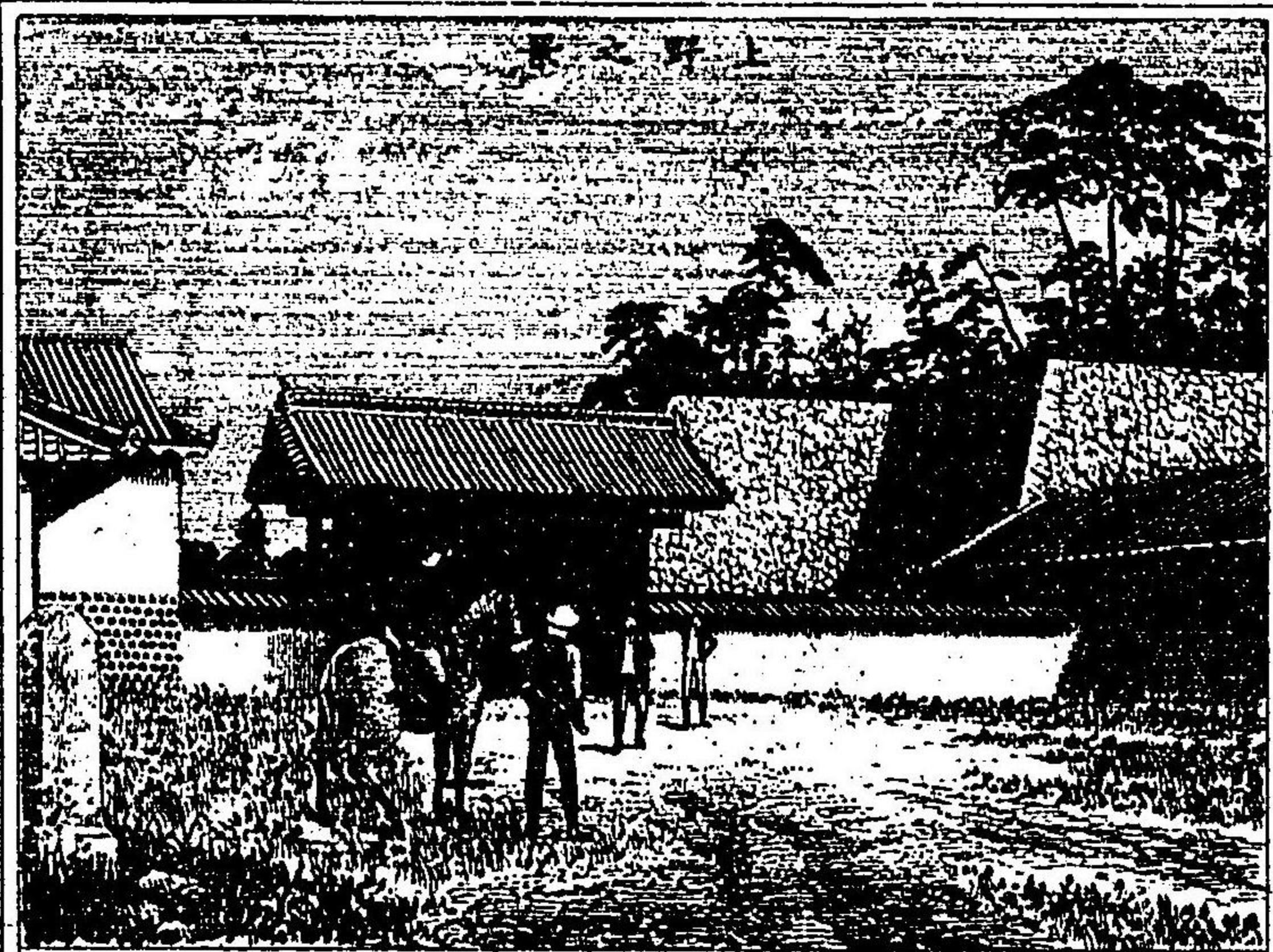
名張川は黒田峠の山麓を沿て大和入り
 月瀬尾山の除崖に流差月川是なり
 春も夜も景色酒ふ月と名張川
 名張深瀬は九町計の小地なれど大和より
 上野及び伊勢に通ふ要路なれば商家族舎
 軒を並べ毎日市を為旧藤堂公の支府たり
 方今郡役所や警察署郵便局学校の設あり
 山間繁昌の土地なり 名張駅 香魚
 名張川上夜漁回正値我漢猶把杯新鯉香魚
 味何美曾登月瀬咲花来 名張川 福井 通
 名張深瀬の町を出て古山村や諸村を過ぎ
 行程四里十町にして上野の町に着したり

THE TUNNEL OF HIRAMATSU, IGA.



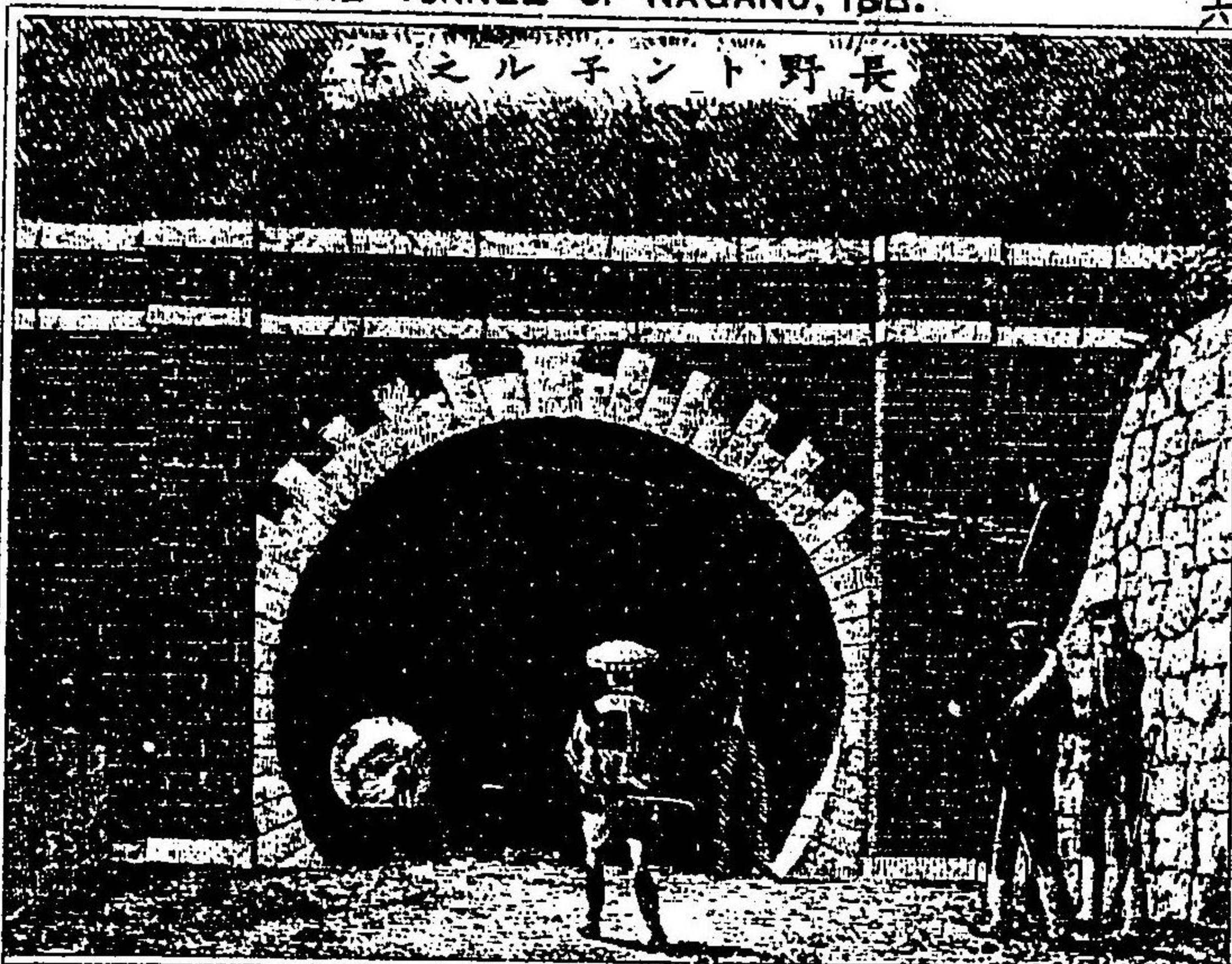
平松之隧道
 城山又雪の詠あり又上野より月瀬に到る
 一條白露遶山科吟策登々氣色加味到海濱
 先滿衣速香吹送別峯花 明治大業記 岡本實石
 木州は名勝之故又路を更らば東又向ひ
 服部川又沿て平田驛是を過ぎ平松に到る
 此峠は伊勢よかよふ要路なれば近頃爰又
 隧道を鑿登して専ら馬車往復の便を成し
 伊勢の津は遠す上野も旅行の都合又まかせ
 上野より路を北に岐佐那具王權村を經て
 近江に出で水口より土山を歴て往道程は
 九里三十餘町にして伊勢國鈴鹿山に到る
 紀行は東山道の部を譲りて爰に詳記せず
 伊勢國に次ぐなり

THE OLD CASTLE OF UENO, IGA.



上野町は木州第一の都會にて市中の曠
 東西は二十町南北は十四町計り此地旧と
 藤堂公の城下にして方今裁判所や警署署
 郵便電信局等もあり商業繁昌の金を製し
 他邦に輸出す居民は概ね皆撰みて京阪の
 風姿を効ひ学校生も文明開化に進歩して
 既又猶賢文鈔を著し往昔芭蕉翁も效産し
 各國を漫遊し誹諧の一家を為して古く嗚
 此地に墓碑有吊ひて
 冬枯や行却乃とをぬぬつゝ 逸史
 致又四季の詠めあり春は佛性寺の櫻花や
 公園の花是は呉羽川螢狩や夕納涼秋季は
 愛宕の観月や紅葉を久米山に賞し冬の朝

長野子ノル之景



伊賀國物産

雲母 磨砂 石灰 香魚 五倍子 菊糖
薯蕷 芍藥 川芎 木通 茶 藤 柳
白朮 松茸 葛粉 油傘 陶器

駅路

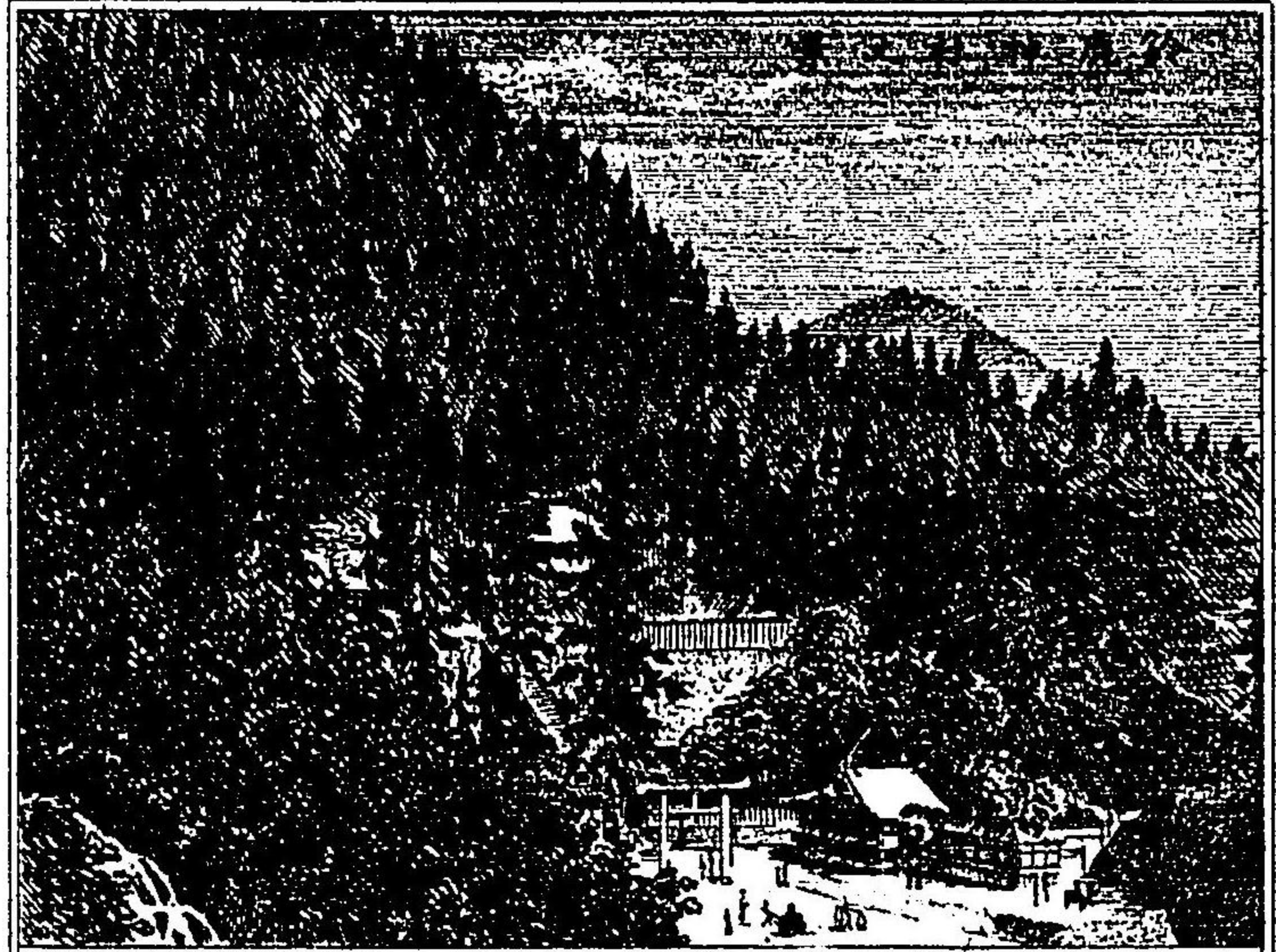
伊勢路 上野 平田 平松 伊勢 長野
同列路 上野 佐那具 上拓 植 伊勢 國

加太

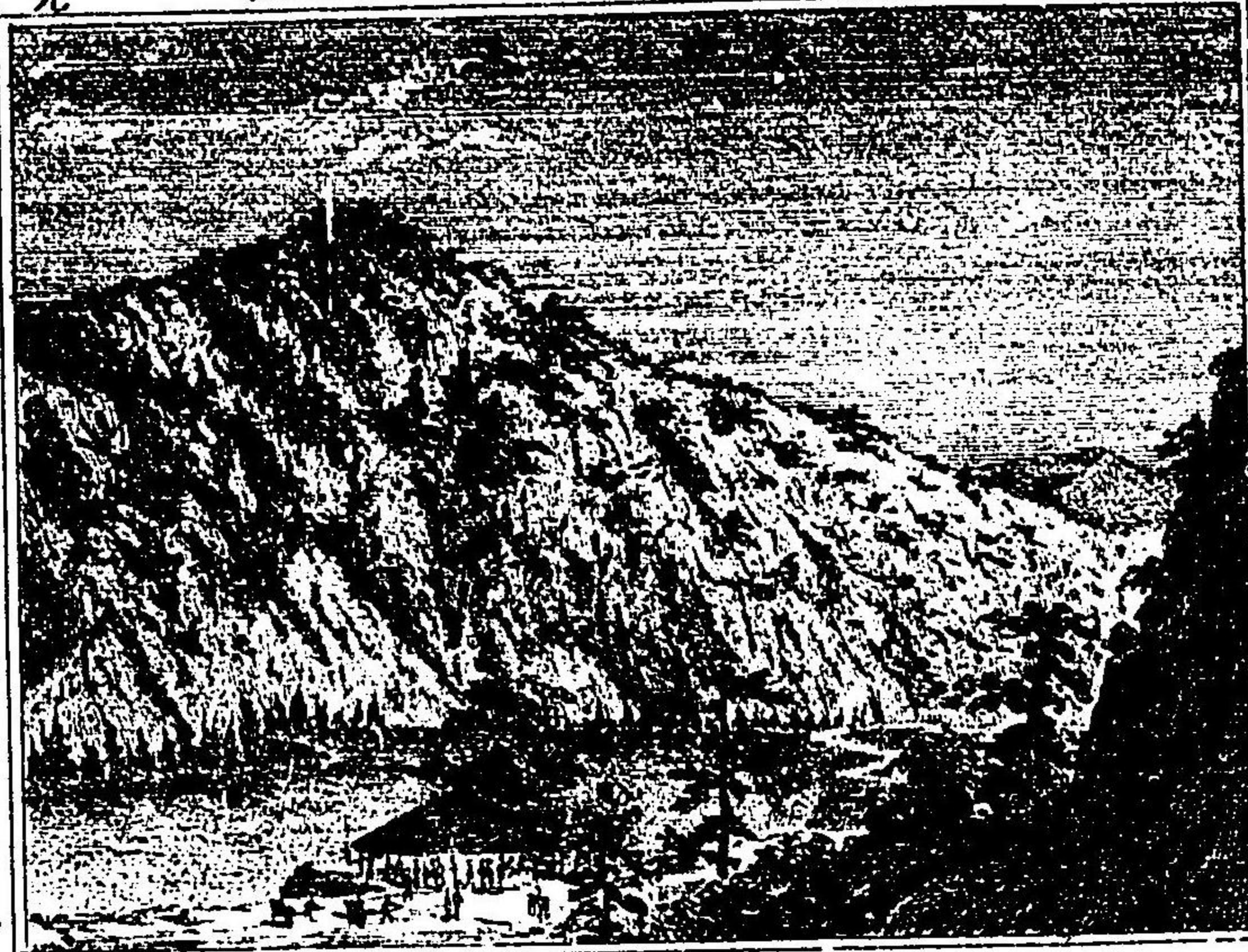
同列路 上野 阿保 伊勢 地村 伊勢 垣
内村 大和路 上野 古山 名張 大和
野無宿 山城路 上野 高原 山城北 大
河原 近江路内保越 上野 佐那具 五
滝村 近江深川村

伊勢國之部

此國の東及び南方は内海に瀕面して西は近江伊賀大和と接し東南は志摩と隣接し西南は紀伊と連絡し北は美濃尾張と列る其廣狹は東西およそ四里或十二里又出入南北は廿七里にして其地勢山岳は西南に連亘して東南内海に瀕面して土壤肥たり溪村尤も鱗次り富み水州十三郡に配す桑名 貞辨 朝明 三重 河曲 鈴鹿 菟野 安濃 一志 飯高 飯野 多氣 度會 等なり名色は桑名 富田 一色 東富田 神戸 白子 久居 松坂 等也港灣は四日市 賢崎 大口 大港 五箇所灣 樺港 神崎 等なり人口は五十七万九千六百二十餘其風俗山城人にして似て伶俐にして能職業を勉強め又山村の人は質素にして樸直なり山嶽近江に列る者は三國藤原岳や國見山八風岳は尤も高山也八道岳や鈴鹿山等伊賀又連なるその山は長野布引元取岳とす大和と接する其本を高見山と謂て南には堀坂山や白猪浅熊山多度本や鎌三山等は美濃路にむかひたり鈴鹿は東海道旅行の官道にして西に向は土山水口石部草津の五駅を經大津に至す



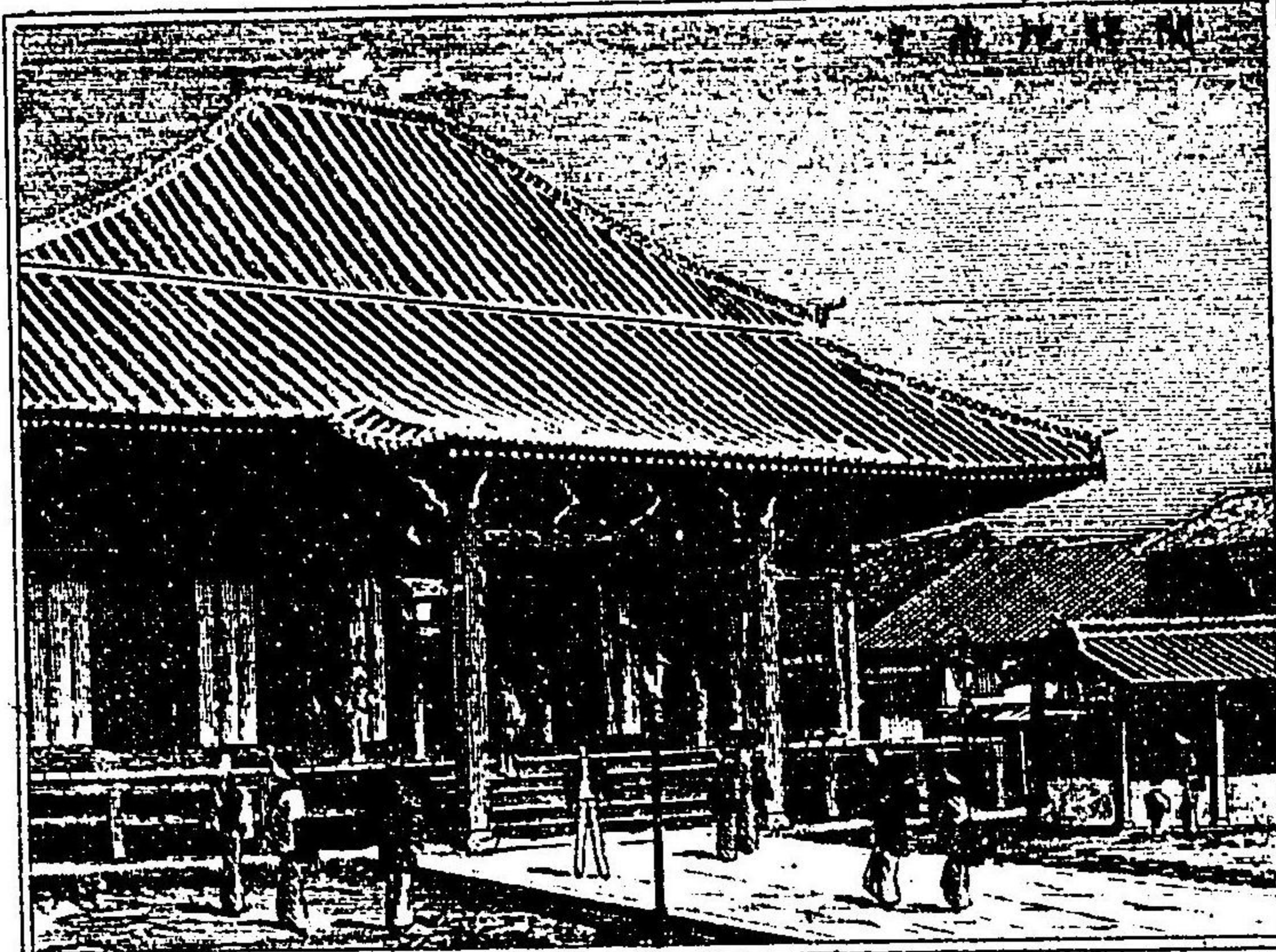
鈴鹿山昔は嶮峻にて道路狹隘なるも近頃
 大ひに修繕を加へて車馬の往來便利なり
 腕車を進めて澤井村程近き処は榜示あり
 伊勢近江國境を示す此を過りて峠に到る
 茶店あり伊勢屋と呼び腕車を駐めたり
 官道西通江勢間煙嵐十里翠屏環翠屏中
 秋秋難障紅樹霜寒鈴鹿山 福井遊
 旅の閑路をゆく鈴鹿山は秋風を吹く千葎
 是より下り段路急峻多津加美坂といひて
 八町の間廿七曲を成除歩して降る半途は
 鈴鹿神社の登道あり此傍側は孝子萬吉の
 記念碑建築の標あり予聞昔日冷泉為茶郷
 東行の際是より和歌を吟へ賜ふ其歌は左



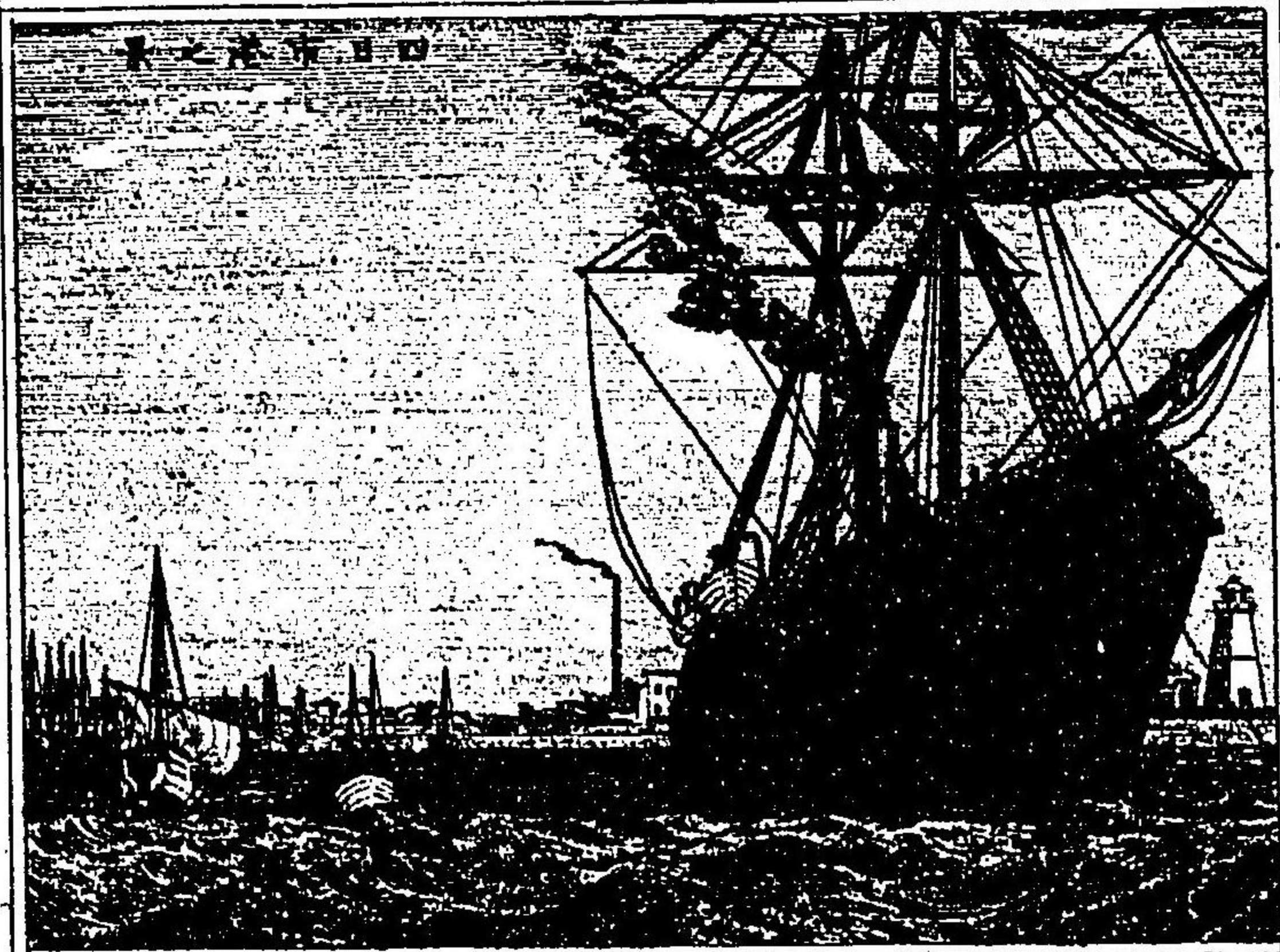
杖のあはれを渡りてあはれとあわれとを
 鈴鹿神社は天照大神荒魂瀬織姫尊を祀る
 社頭は老杉森として社を擁して神古なり
 八十瀬の流れ爰より出ること数歩ならず
 石橋を架し琴橋と云此川は浴ふて降れば
 坂下取致は大竹まゝ小竹と呼ぶ旅籠あり
 十町計りも過ぎ行は山水奇絶の勝地有り
 筆捨山旧岩振山と云山前は八十瀬川を帯
 満山奇巖種々あり其形状も亦奇異なり
 松樹之が為は幹枝を屈曲して蟠龍の如き
 景況を成して松嵐は琴瑟の風音奏したり
 此山脈は聯なりて蛙子或は大黒天等の
 奇巖を稱呼ありまた山背は錫杖岳嶺なり



鈴鹿郡役所を建築し商家旅舎軒を列たり
 余は伊勢屋に投宿す客室は関川に瀕面し
 鈴鹿の諸峯を對して眺望頗る絶佳なり
 庄野は尋ね可き名勝なければ晚車を進め
 高宮村に車を駐たり致し白鳥塚と謂あり
 此日本武尊の陵なり其高さ十八間として
 徑り廿五間南に面す此尊東征の後ち茲に
 崩御し給ふ御寶殿は三十歳なりと謂傳ふ
 此地を出教歩ならず石薬師駅に到る爰に
 薬師堂の本尊は石佛其丈七尺恭澄弘法の
 兩師感得の尊像なり此地を去り原頭に出
 大樹少して小松多く翠綠濃く東は伊勢浦
 海面遙々港々として白帆の浮める眺望に



啓之目録を修繕し津波は首雨のそと正啓
 関駅は大和及び伊賀通路を越え兼帯し
 小地なれども繁昌し商店旅舎考き其内は
 大津屋鶴屋の客室は美麗又賓客の給仕宜
 地蔵堂本尊は僧行基自作の座像安置して
 一休和尚閑眠の説話世人の能知る処なり
 此駅の東端に伊勢宮遙拜の石燈華表あり
 是れ賽客の岐道なり南に進めば榑原村や
 榑木を過行は豊久野銭掛松の宮の跡を止
 窪田を過れば一身田専修寺は真宗の本山
 此地を去れば津に到る関より行程五里三十三
 山里より未だ未だ記す
 旅行の都合にて余は関川に泊り行く程に
 龜山駅に到る城跡は石墨峙ちて西之丸なり



意外の愉快を感ぜし旅行の勞も殆ど忘れ
 ぬけし浦子とて名を傳ふる松原 維曉
 是より脱車を進めて宋女小古曾と打過て
 追分てふ處よりたる此地は東國入参宮の
 岐道にて華表を建つ是より南方に向へば
 神戸白子上野津町を登て山田又出るなり
 余は直行東に向かひ日永赤堀二村を登て
 四日市の駅到着す 参宮路次之詩
 昨過七里渡今發四日市 参詣由神戸亭干
 越白子上野取路蓋安濃津城通吟風起雲
 出戴屋宿松城感去竹都迹到着小幡渡艇
 郎管送迎洗心渡會水 山崎閣齋
 四日市驛坊間東西は十三町南北廿三町餘



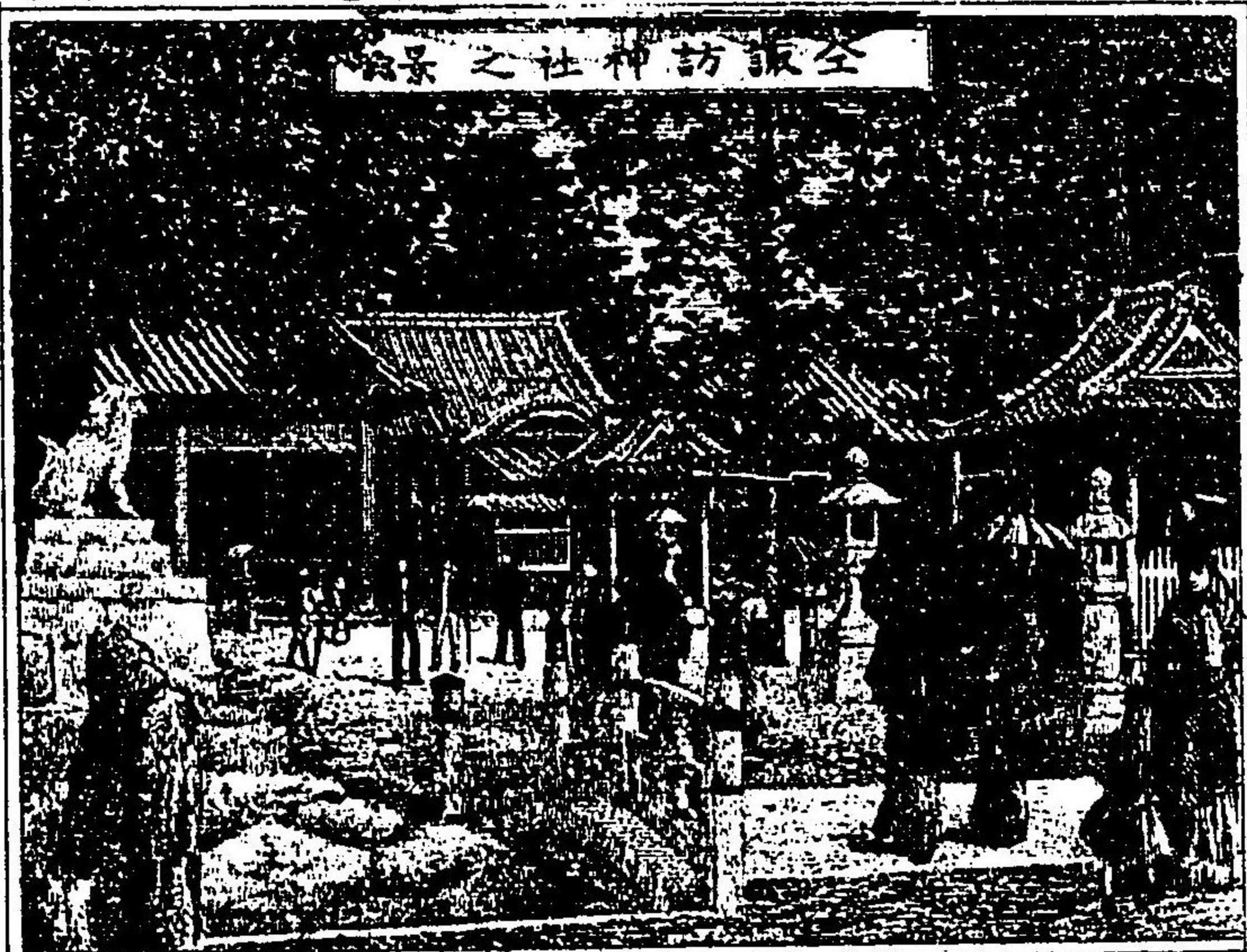
三重朝明の郡役所を北町に置き銀行及び
 郵便電信局等を備へ商賈發達檢勘比し
 官道又三龍橋を架し酒樓妓院も數多し
 海岸又燈臺を設け汽船常々多く碇泊し
 帆檣林立其繁昌なる海上に浮き帆影は
 官の港や津の聲も横濱港は毎日往復し
 流松回漕店又於ては濱田屋帶屋吉高屋等
 乗客の送迎寸隙なく實に繁昌の港なり
 上欄を圍むる紡績場濱町に建築し社長は
 老道成氏支配の人は伊藤傳七氏と謂ひて
 資本は金五十萬圓を募集して明治二十年
 八月開業し未だ日は淺しと云ども機械は
 晝夜止時なく運轉し此外私設又係りたる



會社工場等多くして、土地人開明又進歩を
 按て慶長年の其頃は高曾總か又集合して
 雜貨の互市場なりし幕府始て駅を設て置
 爾米戸教も繁殖して今日の栄地と成たり
 蓋本港今日の繁盛を来せし其源を按る
 稻葉三右衛門氏の方少きとあらず今氏は
 明治五年此地港灣の雍塞して航海船泊の
 不便を患ひ明治六年三月築港事業興起し
 海濱一万六千餘坪を開闢して埠頭を築き
 運漕の便を開きたり故又明治二十一年の
 十月内閣賞勲局より藍綬褒章下賜を幸す
 諏訪神社は縣社にて健御名方神及び八咫
 刀賣神を祀る建仁の二年創建して社殿の

卷之二

全諏訪神社之景



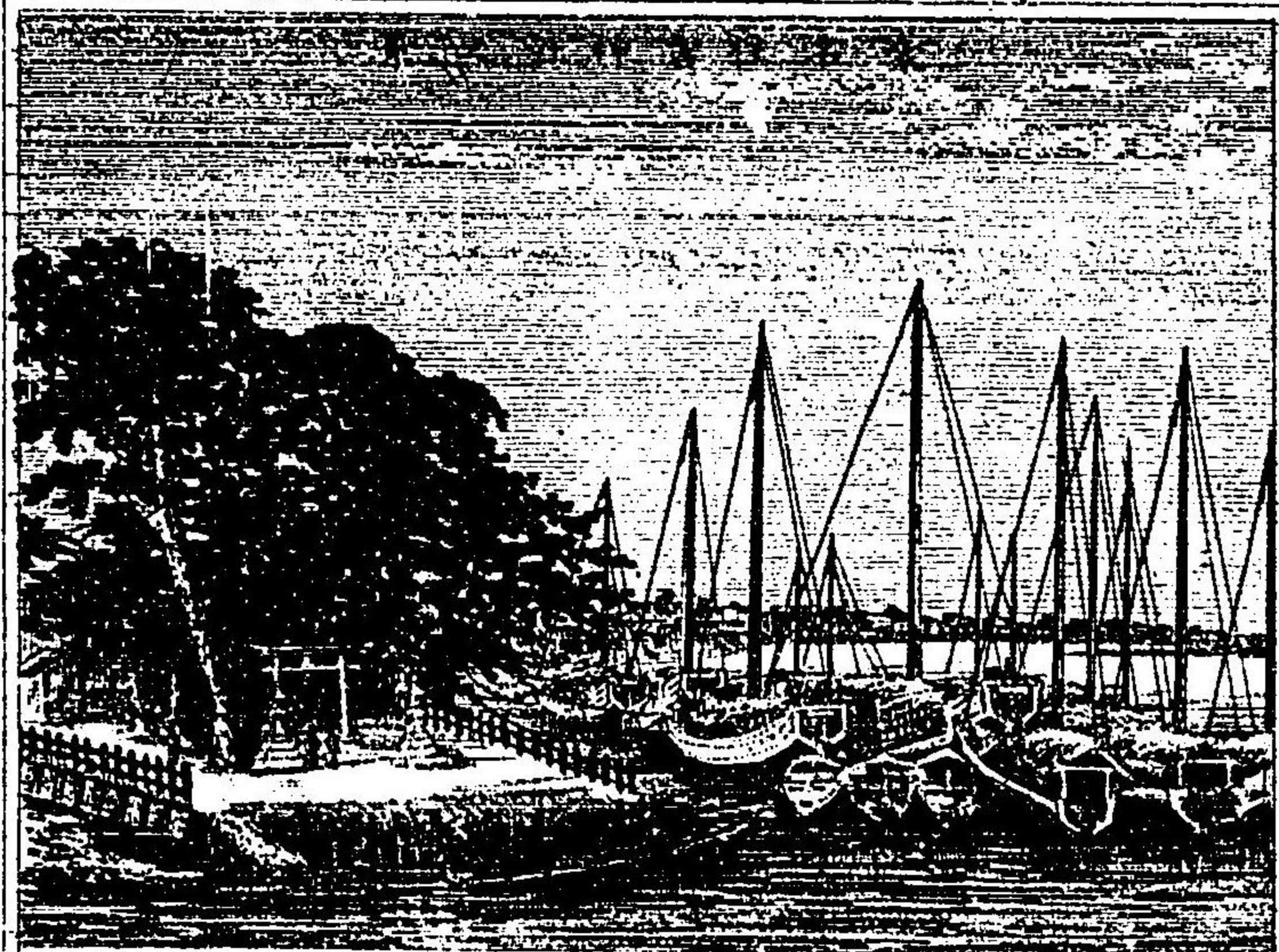
結構及境地の景況は上欄の圖を掲げたり
 此地の如きは本州の要津よて東西二京の
 中間に位置をよめ、近江美濃尾張の三國
 貨物を運輸して目下布設中なる関西鉄道
 會社の軌道は單津又達して官設の鉄道も
 程なく接續すれば北陸道又運送を便し
 西は京都を經て大阪神戸に到るも數時を
 歷す咫尺に達すべしまた山田町に支線を
 分岐するの豫算なり成功の後はこの地の
 隆盛は期すべし唯之惜むらくは軌道線を
 兼名に駐め宮に達し東海道本線に接續の
 間斷するを遺憾とす
 四日市を曉天又出て三龍橋を渡り進めは



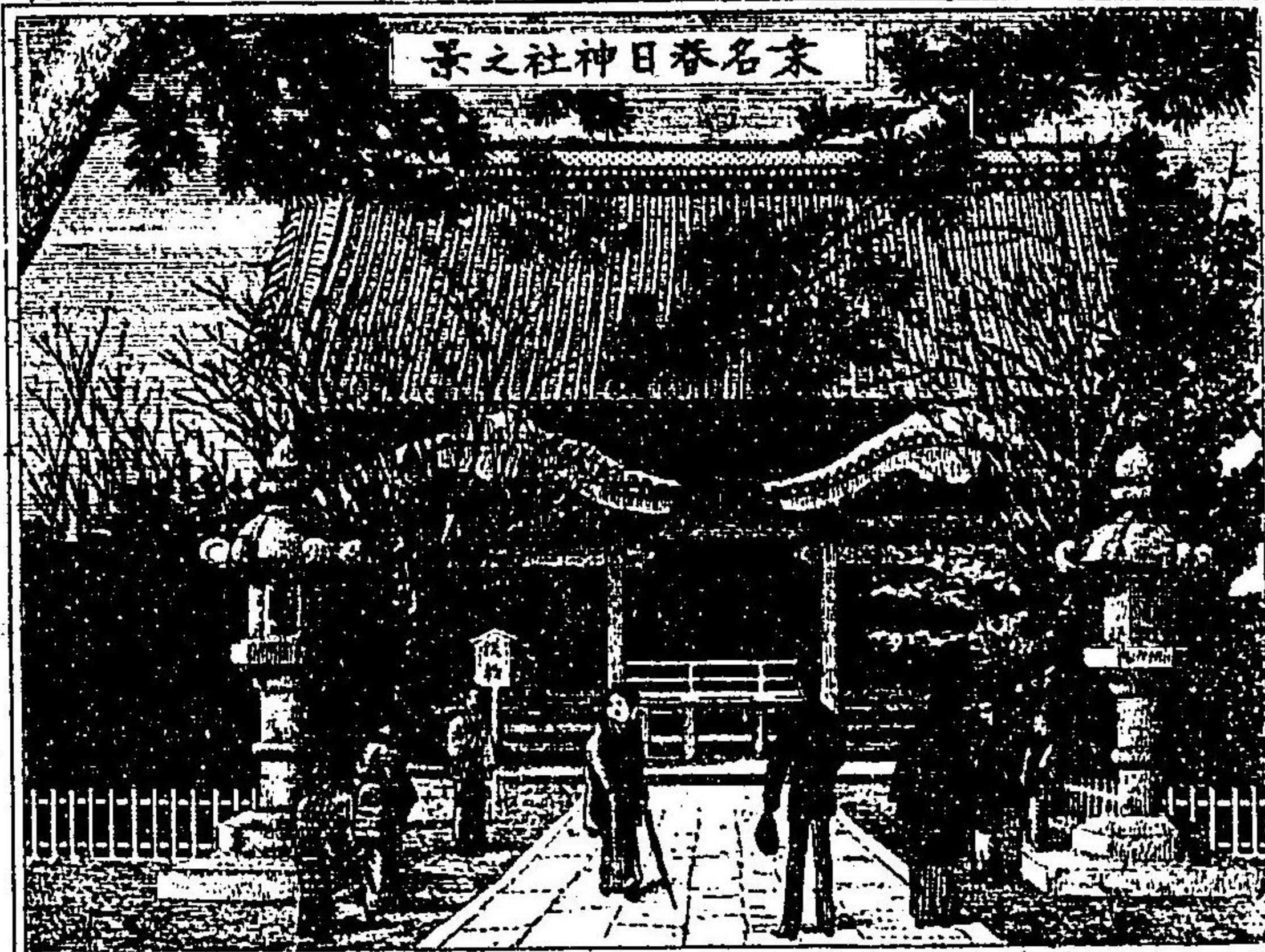
海中又施すや前々の黄昏又海面廣く張り
 終夜海蝦之又罹とぞ翌曉天漁船海に出で
 漁網を曳つ、船を漕各々海岸近く寄来り
 漸次沙汀又曳揚たり、其漁網を傍観する又
 海蝦は悉く網の眼又尾の方より罹るあり
 まご外部より罹あり是は如何と問たれば
 網を罹る後逃去らんものなりと答へけり
 此邊は那古浦と謂ふ往昔より故又奇あり
 春夏の交た晴朗の日、瞭瞻と氣象の頭あり
 土人は此を曇氣と云煙霧の如き其うち又
 山郭人畜の貌頭然と漁夫等時折此を看る
 消滅も亦須臾又在り、此海ならず遠州人は
 海市と謂ひ越中又て濱游と云防州よては



富田村てふ處に到る富田村巷は往昔より
 焼蛤の聞あり樽端又火盆を備へ松毬を焼
 蛤を煨るを見る句又、
 拾兵危うれて味やそとなきに 其用
 車を駐て此家に入り蛤一鉢を吟じ試るよ
 肥肉よして殼中は満喰ふよ頗る美味なり
 来名の焼蛤と稱すも實に産ならずと實たり
 杯酌の折柄下婢来て今や此濱又海蝦網を
 牽揚る最中なりと報余も彼の海濱に到る
 此邊は漁者の家多軒を連ね漁網を晒す
 此時漁夫多集りて巨網を沙汀又揚たり
 其大さ六十尋も有む各處又浮桶を附着し
 まご重垂又は陶製の器を附たり此漁網を



狐森と謂ふ愚接るは此は英語の「ト」トトモ
 魔魅妖怪の所為な字、空気の冷熱を異にし
 為る濃淡の差を生じ光線屈折の理より
 恰も水中に挿入する竹木を斜に観るときは
 折が如く見ゆるべし其貌を能視は近傍の
 返照するより外ならず小學生も知る理なり
 故に只其概略を記す此地を去て朝明橋や
 町屋川を打渡りつゝ、赤名の驛に到るなり
 赤名は木曾川の下流海門近く尾張に對し
 市中の其廣狹東西は十二町南北三十五町
 東海道要津の一都會商家は薨棟櫛比して
 灣頭は妓院酒樓多し時雨蛤は此地の名産
 各戸に招牌を掲たり此物を製する候あり

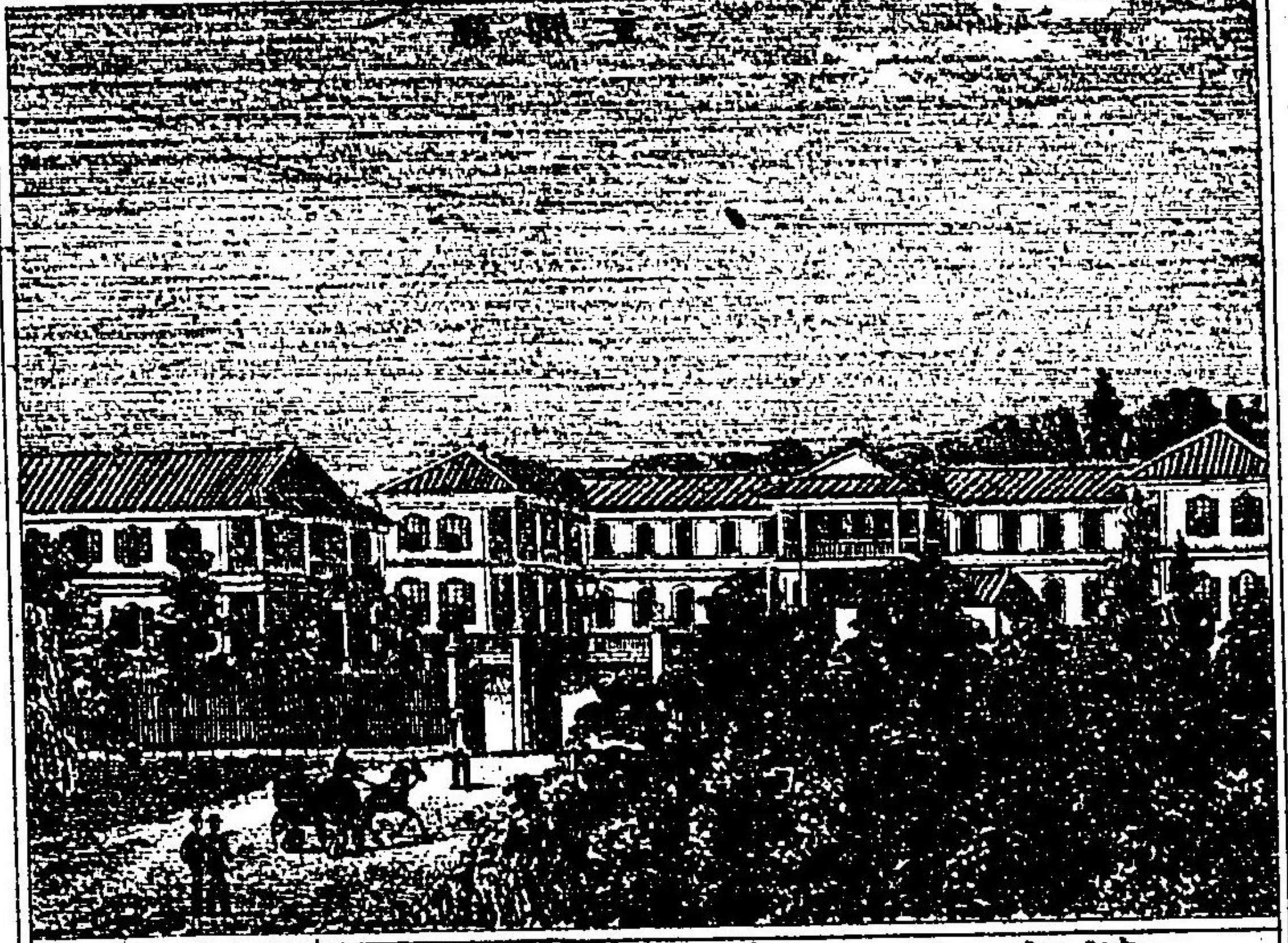


初冬の頃は蛤白魚の其肉肥えて調味よし
 住吉神社は長島に老樹蔚蒼天を蔽たり
 春日神社は宮通の北境地社麓常は賑入り
 従来旅人茲に便船し二里餘を渡り前須に
 上陸しては佐屋神社守万場や岩淵等を歴て
 道程九里宮に到なり近世旅行は四日市に
 乗船して宮に渡る故往時と比れば寂然也
 毎夜大垣へ船を出し尾張の貨物を運送し
 旅人の便に供すなり

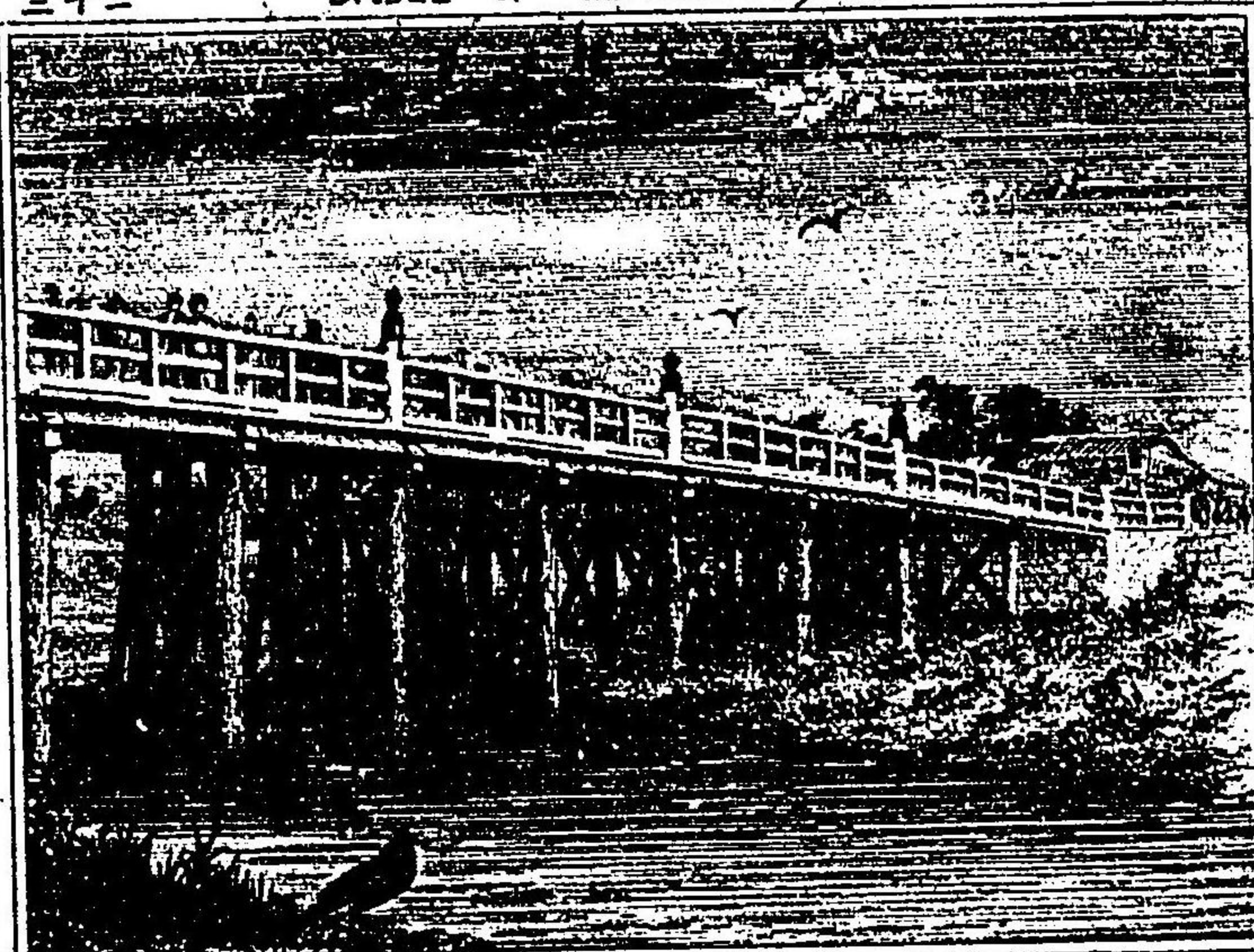
船渡大垣赴赤名 山陽頼業
 蘇水通の入海流播声雁語帶鄉愁獨在天涯
 年秋暮一蓬風雪下濃州



内外泰宮之記
 旧藤堂公の山荘なり、園裡又池塘を造りて
 翠松花卉奇崑を擁し、山泉の景趣又富なり
 路ハ蜿蜒山径ニ巡り、山頭又躡れば縣廳の
 高郭は眼下ニ頭れて塔世川其南邊ニ繞り
 全市を離れて岩田川流の末ニ峙つ高燈は
 贊崎港として内海を湛て尾州の諸山をば
 晴處ニ透望し本州の山海眺望の勝地なり
 柳原礦泉場は目石山津を距ること五里餘
 菰野は景色清麗して近世盛夏避暑の爲め
 浴浴する人多しとそ家質硫氣痛風又良し
 結城神社は八幡町、忠臣結城宗廣を祀る
 社殿境裡麗美を盡し土地人の尊崇敬拜厚
 く賽入常ニ絶る事なし



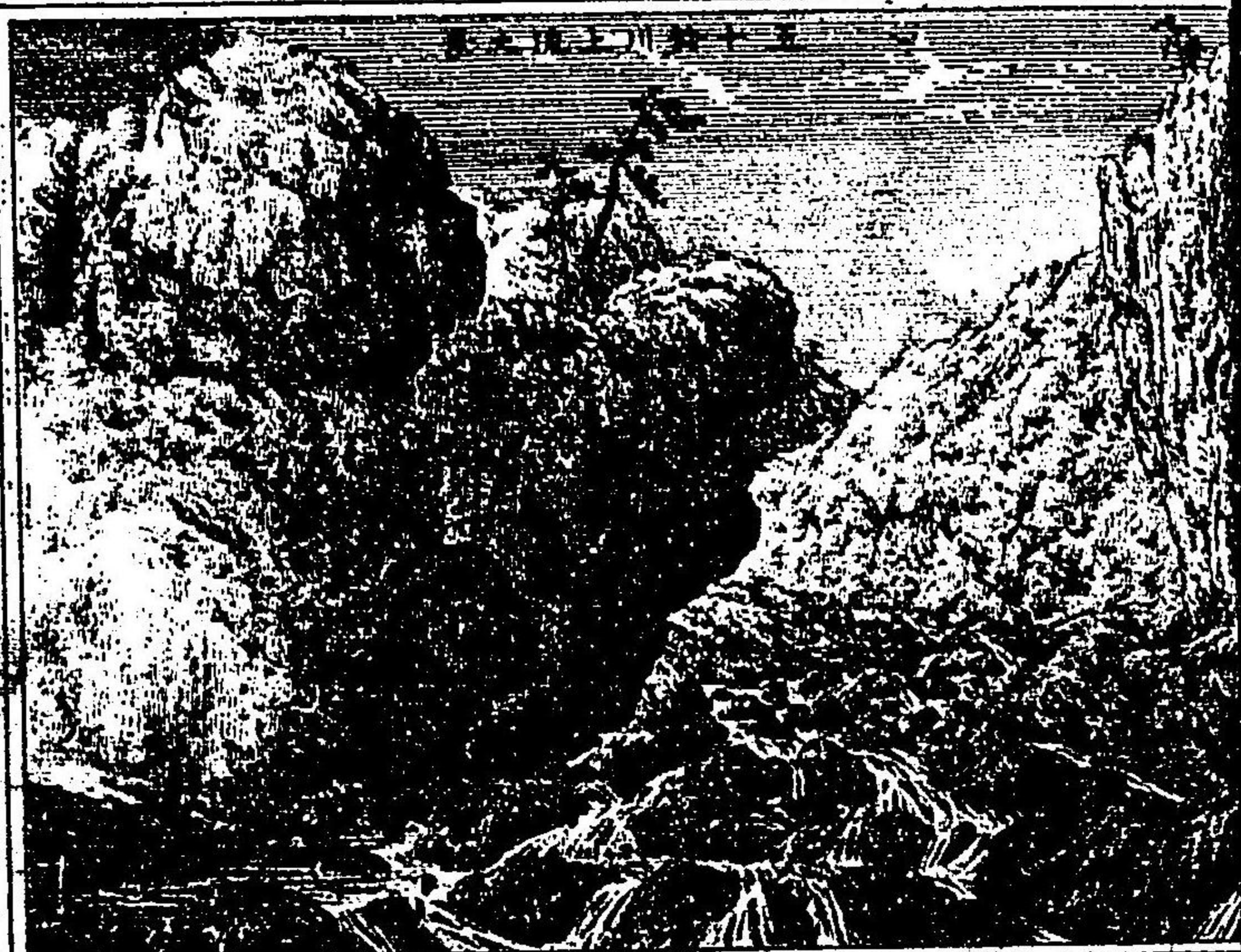
内外泰宮之記
 津は安濃津の省略本州の一都會として
 岩田川又は橋を架し其名を江戸橋と呼ぶ
 三重縣廳を中茶屋野位置本州八郡を治し
 市坊は九て八十七町巨商豪家軒を並たり
 諸邦貨物致ニ輻輳し碇泊場又程近くして
 贊港ニ燈臺の設あり海陸の運輸便利して
 土地は頗る繁昌なり大門町は人行雜沓し
 高屋軒を連ね色々の雜貨を取ぎ繁華なり
 故又慧日山觀音寺の本尊は如意輪觀世音
 石像として和同二年二月安濃津の浦にて
 源夫等が網に出現し感得すると謂ひ傳ふ
 上欄ニ掲ぐる公園は縣廳よりは北ニ在り



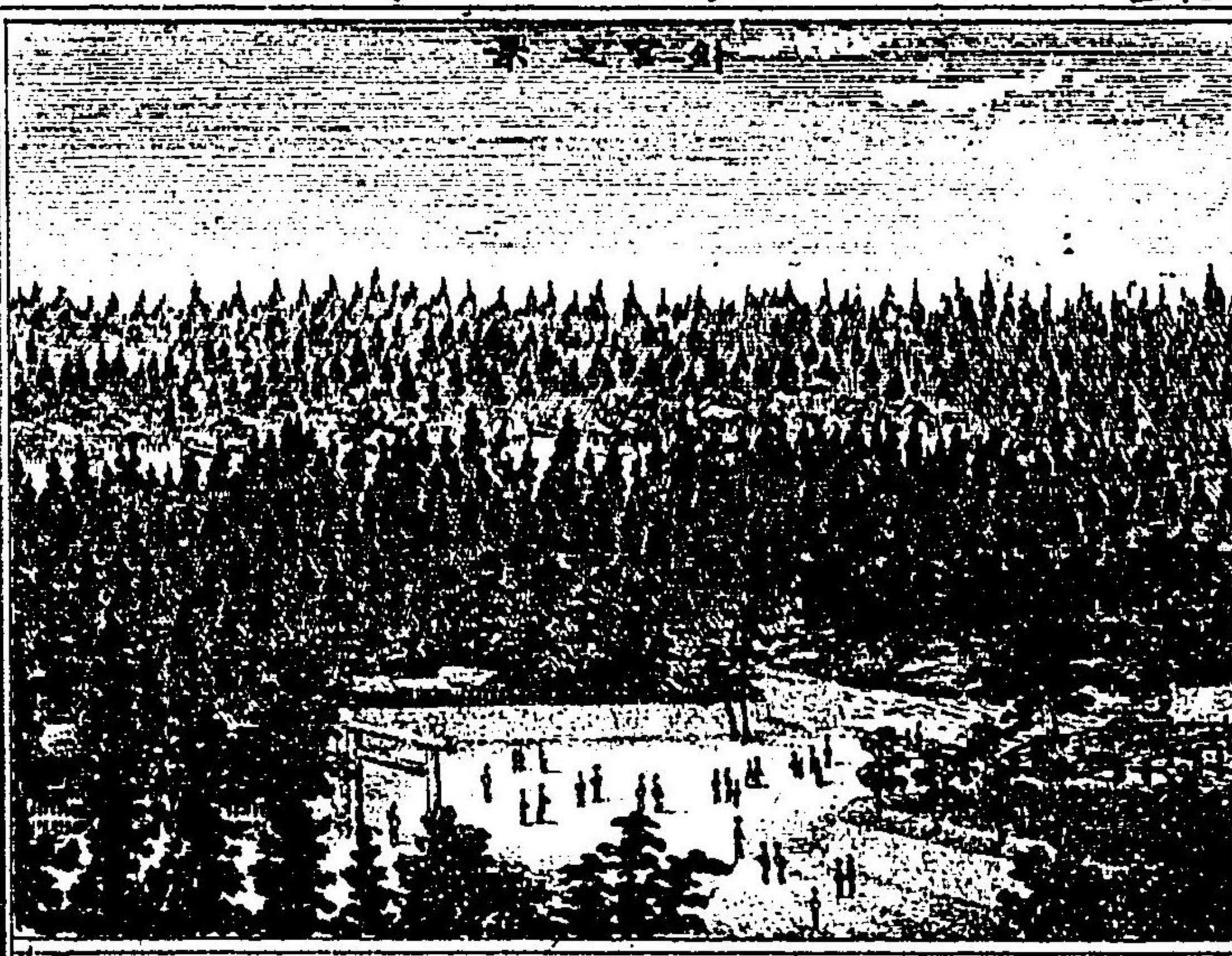
有名の鈴屋は魚町、今の主を信郷といふ
 往より其地ははしむる地を信郷
 松阪を立出て榑田川、明星は行は茶店を
 尚過行は宮川に到る一名度會宮川と云
 最大河として水源は伊勢大和紀伊の州取
 大蓬原巴洲と発して濁川大内藤川を容れ
 海に注ぐ濁百二十間此れ山田の地として
 山田は陽田とも謂ふ其地一里二十五町
 外宮の傍側にて官司称宣の邸宅軒を列へ
 裁判所及び郡役所や銀行電信局等備れり
 頗る繁華の地として旅舎酒樓多く相隣り
 毎戸講名の招牌をば門に建てて客路導と
 四季間断更らばなし



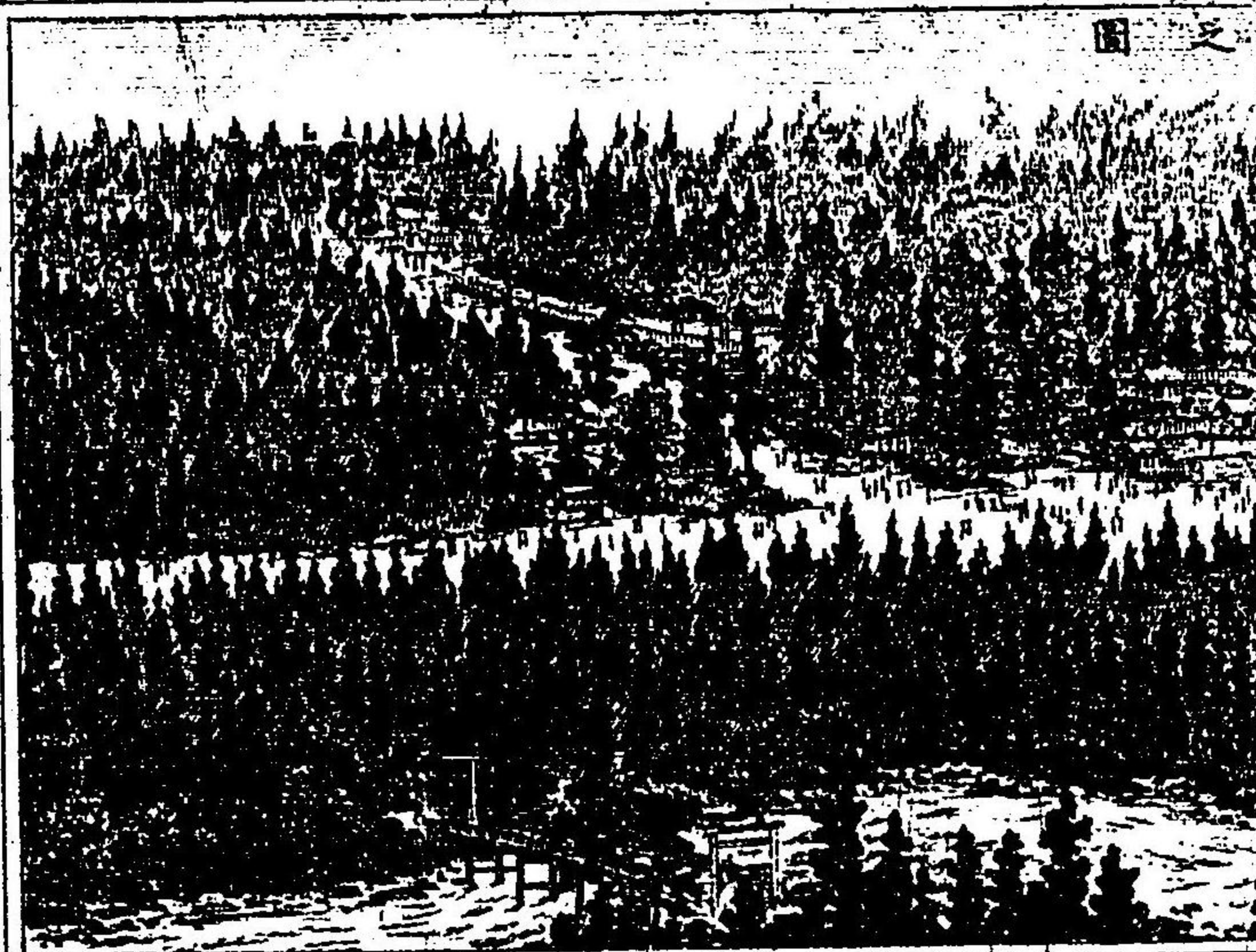
熾魔堂より三町計り野徑を行む句碑あり
 月の夜に何れをあきき乃鳴千鳥をせぬ
 津の南端に青樓多く雲津川の長橋打渡り
 月本や六軒通過して松阪に到る津より松阪到
 松阪は飯高郡として市中の曠さ廿四町餘
 富商及豪農混濁の地貿易最も繁盛せり
 大橋あり西柱橋と云四五百森は舊名なり
 子依とて人の海に松阪の地を信郷といふ
 此橋を渡り二町計り三井氏の慶宅てふ有
 其構造最も美觀なり白粉町は角屋と呼ぶ
 精家又は安南呂宋の古器珍觀の教品あり
 日本之光輝と題する書板視れば此品物を
 悉く縮寫し又來歴を明細に詳き示したり



左右二門を關つ、正殿巍然と神古なり
 此地を出で小田橋を打渡り東にむかへば
 道路は漸次又高して間山と謂致又一場を
 開て門戸又客を呼ぶ是なん阿叔阿玉とて
 社音より三弦を弾き歌調は例の投與へよ
 此を過れば中島てふ古市館町宇治街等は
 外宮より内宮に到る要路なれば其坊間は
 人煙稠密建ちならび毎歳四五月の其候は
 内國の賽者爰群集し旅舎商屋の繁昌なる
 他國に比喩の處なし古市町に藝妓娼婦は
 最多く妓楼の魁たる門標を看よ油屋は
 白井と改り備前屋は大田光照と掲げたり
 又、伊勢音頭とて古く傳はる煉舞あり



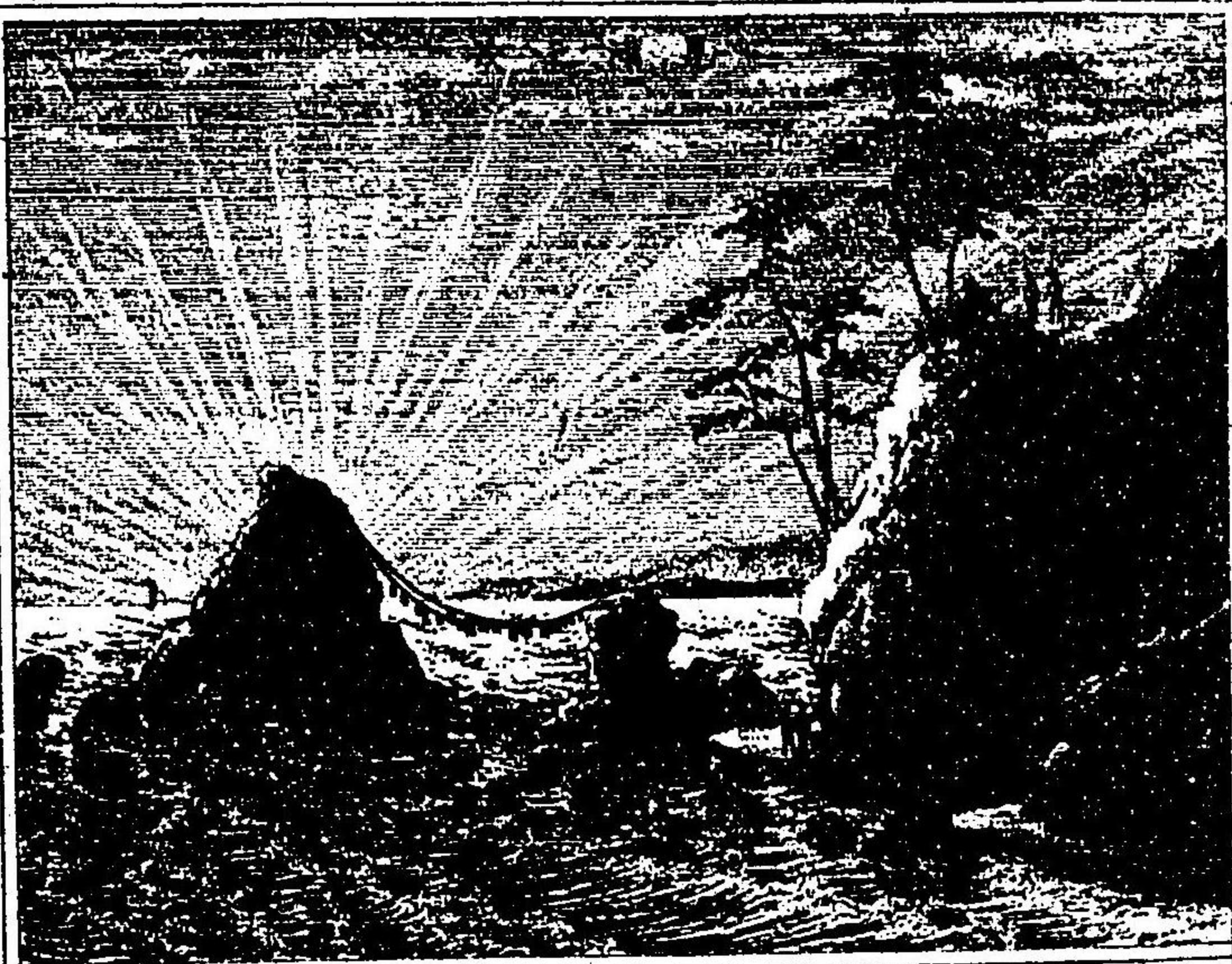
豊受太神宮は外宮と唱へ祭神は豊受太神
 瓊々杵尊天兒屋命天太玉命を配す雄略天
 皇二十二年七月創建丹州の眞名井原より
 此地に遷し奉るなり社境は最も清淨にて
 光叔辭嘗して白日暗社殿の結構は神代の
 風趣を存し巍然たり實に尊崇の感を為す
 先づ豊川橋を渡つ、賽路又向へば大樹有
 清盛捕と謂少し行ば一華表あり右側又は
 神庫あり古典を藏す二華表又向へば傍に
 玉串所および手洗場賽人茲に嗽き手を清
 三華表又進ば正向に華門あり此に入れば
 賽客こゝに群集して皆な額突きて九拜す
 其構造を拜觀するは周圍に瑞垣を造して



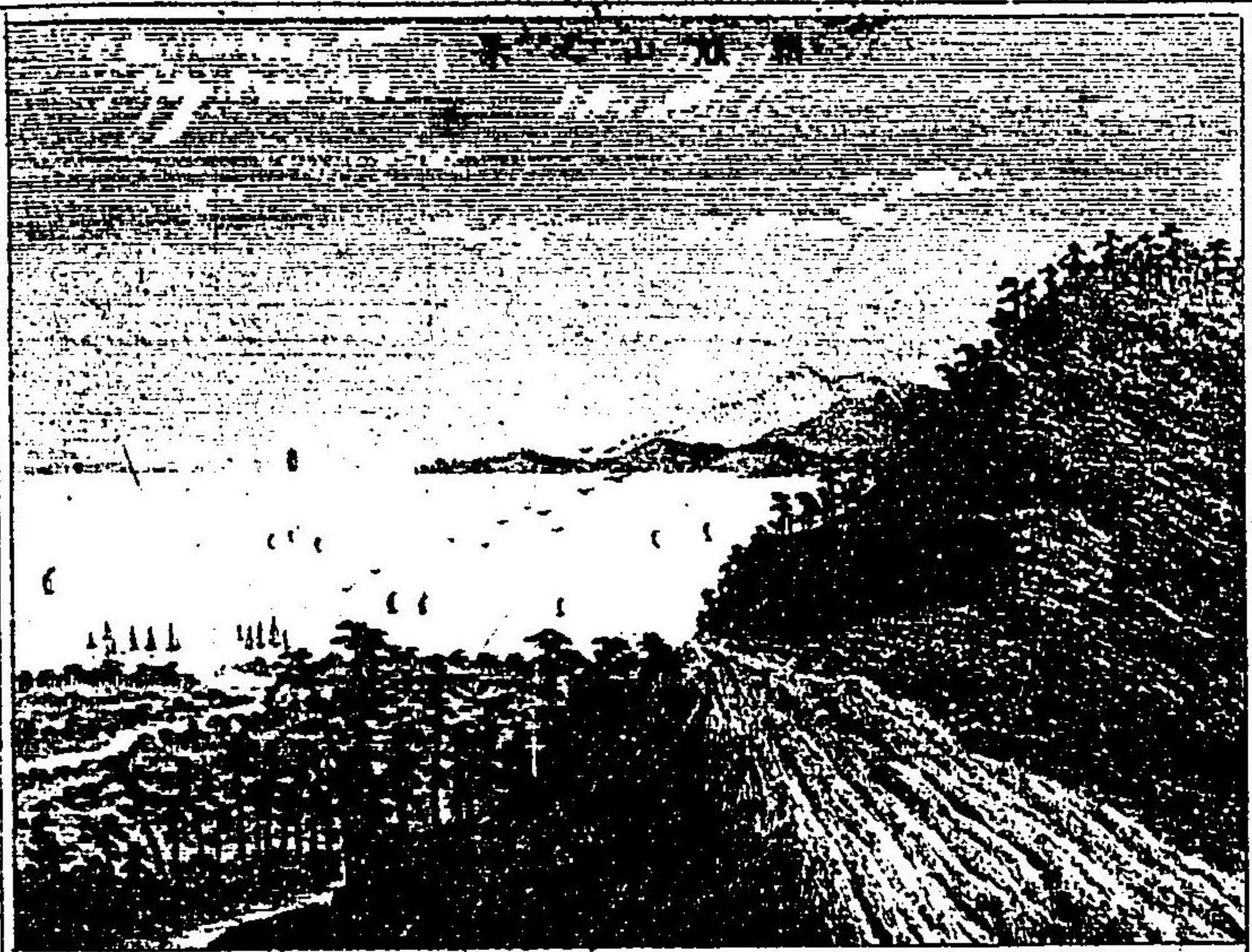
神路山の瀑は其高さ五丈絶壁の崖頭より
 飛泉は白練を晒す如満山楓樹最芳くして
 秋興の勝地と賞べし
 宇治橋を渡り一町計行けば商店の両側又
 櫛比して軒を並たり土産の物品飾り立て
 屋頭販ぐ又客を喚び或は旅客の袖を曳き
 喧囂甚だ雑沓せり群集の中を押分行は
 内宮一華表は向たり老松喬木は繁茂して
 五十鈴川の流清々と二華表を過れば一殿
 忌火屋殿は御饌を調外幣殿及び齋王候殿
 其外各殿賽路に聯て冠木鳥居より第四門
 内へ入れば華表あり尚行けば玉串御門前
 善垣御門や瑞垣御門故に賽客頓突九拜す



娼妓沃姿婀娜として愛興を醸し踏舞をす
 頗る美観なりされど此地たるや神廟の地
 便すべからざる靈地咫尺又妓楼娼婦の多
 實に恐る可事ぞかし
 宇治橋は五十鈴川に架す其長さは六十間
 水源は神路山に発し大瀑小龍の流を容れ
 巡廻て内海に注なり五十鈴川上流の地は
 宇治橋よりは河岸に沿て朝ること十八町
 上欄は掲る勝景の地故に鏡石として其高さ
 二丈横径は五丈計り其清潔鏡面の如なり
 其外奇石種々在り其數を以て名を命ず
 幸ゆりて泉大津石使のこまづ河心る都長也
 幸ゆりて水まきくもむなり神伏の名まも 恭平



金剛證寺は虚空藏佛此山を降れば二見浦
 浅熊山よりは程近し二見浦は度會郡江村
 海岸より奇岩雙立して山海の眺望絶妙あり
 故に赤宮の輩此地を覽觀せざる者稀なり
 爰に海水浴の設あり近世また碑文を建
 賣日館てふ茶樓あり樓上の室は景致宜
 富士の大嶽や白根山其他白山御岳や駒嶽
 諸峯海外又浮か如く山海風趣に能く賞り
 明治二十年の三月に 皇太后宮行啓の時
 行宮の爲作りしもの近頃御嶽山を閉懸し
 二見より鳥羽港に到新路を設け馬車通ふ
 故に昔日に比ぶれば運輸盛行人も亦多
 是より旅行は志摩國 和合山に杖を懸く



正殿は天照皇太神宮即ち大日靈貴尊と云
 西殿は万葉秋津姫命東は天手力雄命を祀
 此二神は垂仁帝の時倭の大東より遷座也
 本宮古殿古傍に在り再宮は廿年毎の例に
 其際致し遷座し給ふ其他外宮も異なるなし
 萬神万葉自心堂堂上明々絶照埃若識靈
 無體一許君親見國尊来 山崎開齋
 是より浅熊山に到る初歩は宇治橋の傍に
 岐道の山径あり進て楠部嶺を越て浅熊山
 此行程は五十町あり朝熊社は櫻大刀自命
 致に茶店あり二見浦海上の眺望絶佳なり
 吾海堂の前より到れば富士堂てふ景地あり

伊勢國物産

水晶 粉 石灰 米 麦 蜀黍粉 茶種 蕨 薯蕷 蘿蔔 葱 茄子 瓜類
 山菜 粉 桂 藍 煙草 海鹽 苧麻 當酸 芍藥 茶 蜜柑 枇杷 柿
 桃 榲 楮 油桐 薪 材木 松茸 椎茸 鹿角菜 和布 鹿尾菜 石花菜
 藍卵紙 魚類 海蝦 恩汁麩 青海苔 時雨蛤及び白魚

同賦路

東海道 東名 四日市 石巻師 野 坂下 近 江土山
 桑宮路 四日市 神戶 白子 上野 津 雲出 松坂 水明星 山田
 同別路 関 楠原 梓木 鹽田 津 金沢 志摩路 山田 志摩島羽
 伊賀路 関 加太 伊賀上 柘植 津 前田 長野 伊賀平松
 同名張路 松坂 八太村 垣内村 伊賀 伊勢地村
 大和路 山田 田丸 丹生 檀宮前 七日市 波瀬 大和 鷺家村
 紀伊路 山田 田丸 相鹿瀬村 粟津村 阿曾村 間弓村 紀伊長島村

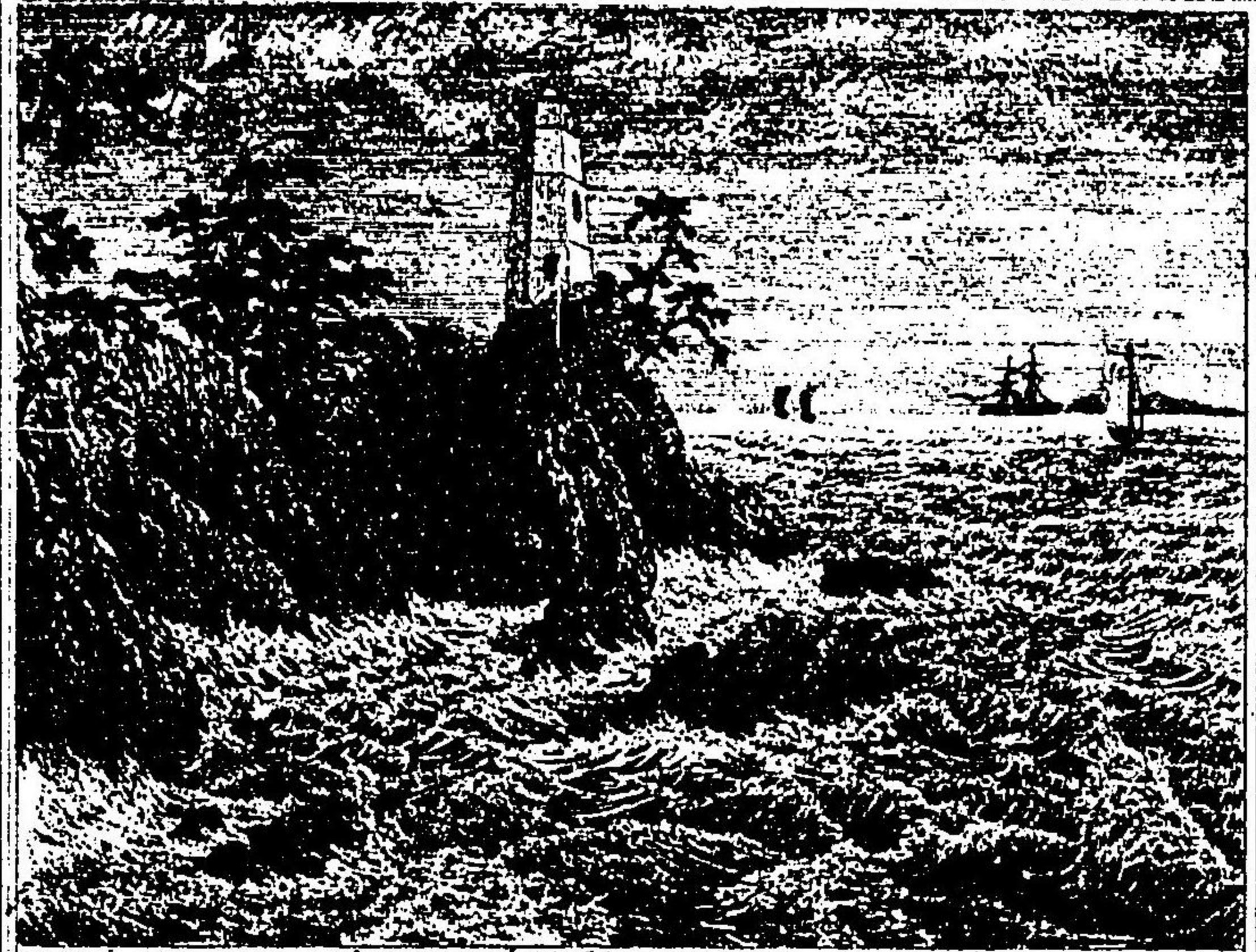
志摩國之部

此國旧伊勢島と鳴一西北は朝熊と神路山伊勢志摩の坂を為し其他は海と瀕面して
 東西狭く九三三三餘南北七里海は出入し谷志美濃の二郡とす都邑と喚ぶべき者は
 鳥羽の港湾あるのこ人口は四千七百餘人此地最たる山は無く岡陵高低平地少なし
 東頭僅く平地有のみ沿海は七里餘にして南部は美崎あれども岬頭は大小の岩礁
 相列り潮流常々險惡是を以神島之瀬と云西に向ひたる一岬は御座の岬と云紀伊國
 熊野浦を隔た見崎は相對す其距里三十里岬陰海湾は深く入り濱島港は其海門の北
 大王崎は美島の東大王岩其海中は時ち正束は伊豆と對して其直徑は六十里なり
 東岸は的矢港あり安東崎及び菅岬共其港口をば狭みたり渡鹿野島は其中央に
 横きり港上の西部は青峯伊勢と連絡し其間九十九谷あり溪間の下流は池田川
 安東港の湾内は流暗礁に於ては替類箱桶船下都佐島風倉中島級類及長瀬地瀬
 船舟船障子船舟角瀬神島次々磯島の瀬舟航海中の危險處なり
 二見浦を立て歩二里和合山志摩村に到る磯場石の奇あり其高さ十丈其の巨り



東北東南の二港を成湾内は軒餘曲折して其淵さ各五町として東北に向ふ處其深さ三枚より五枚に至る、伊良胡崎は對し一大海潮其間に入る、菅島は燈臺燈へたり石造にしてその高さ十七丈六尺其燈光は白色照射七里は遠す、桃取島は小嶼列り東は津州の灘ありて風雨の爲は其波濤の狂厲する其時は商船致は輻輳し難を避く近世航海大に進歩し方今舟楫も煙として先づ寂寞の姿なり

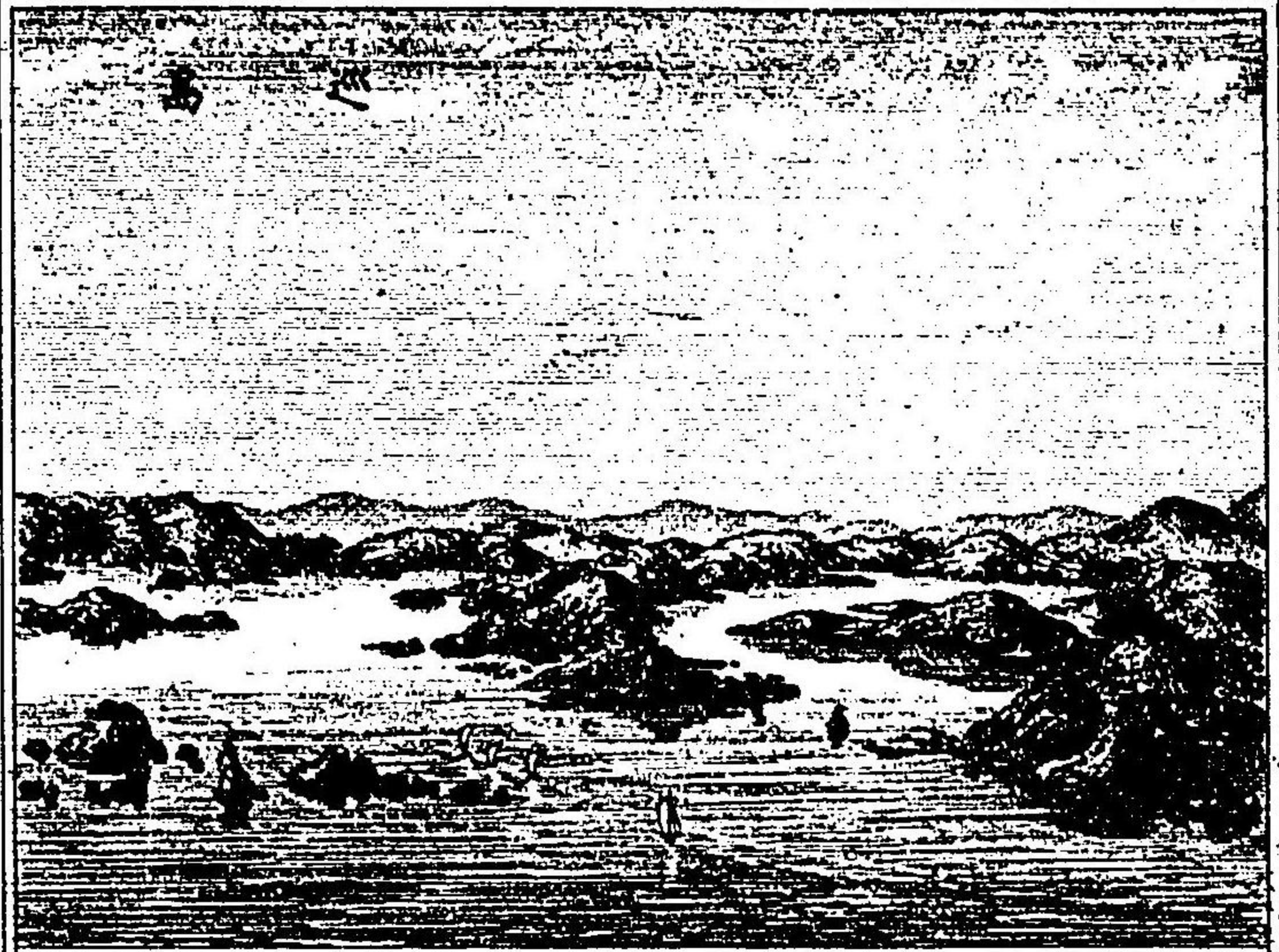
此地の居民は漁業を専務とし朝は鮭棹を携へ出て海霧を穿ち夕へは奥を満載し月を乗じて歸村爲す故は漁夫海土おわく



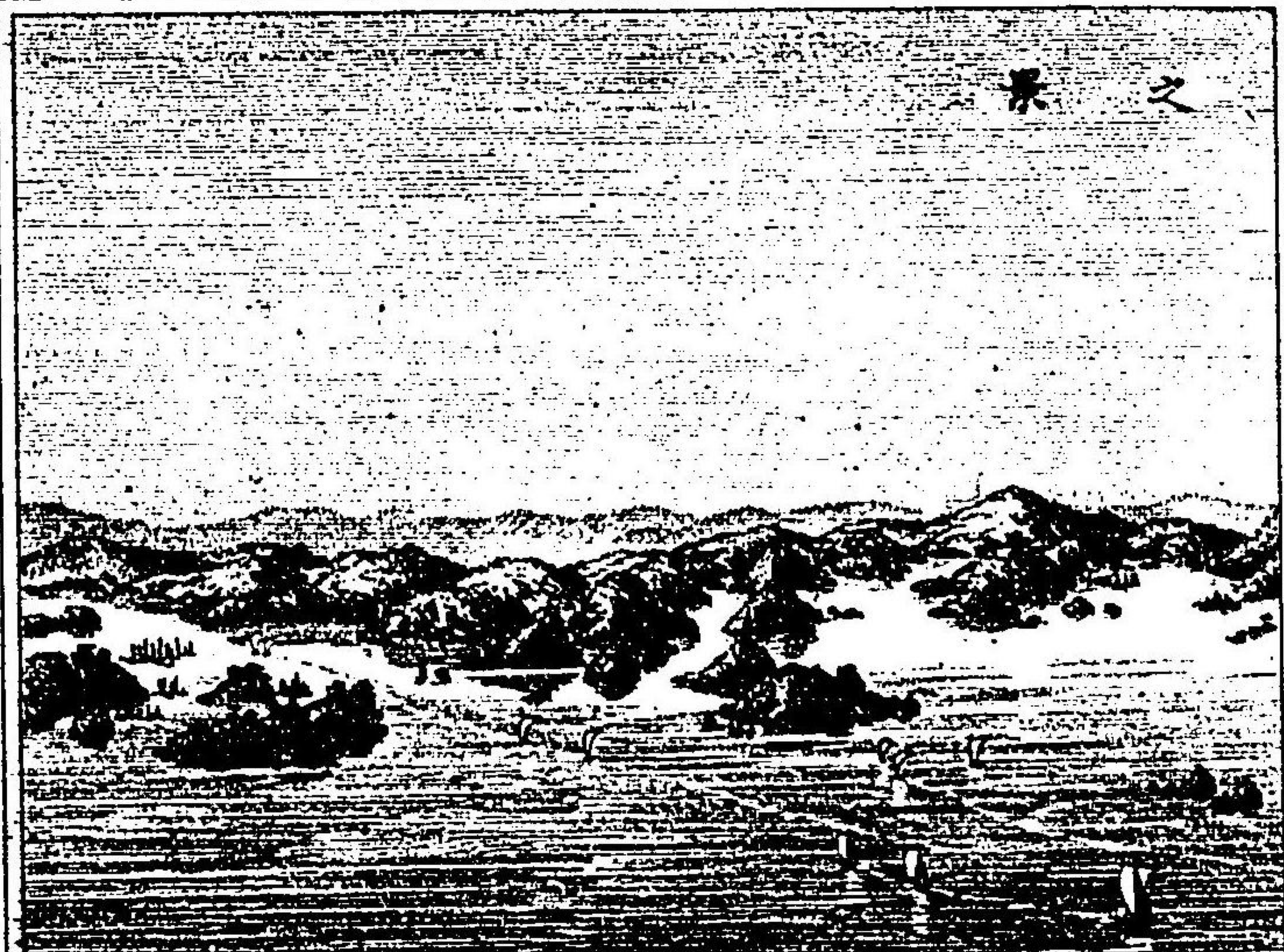
九そ五十六計りにして人語は石心は能慮其及響石の語る如し故に此名あり夫より板路は高低参差たり進む行くと二里計り上郷村の磯邊に到る、伊雜宮てふ神垣あり天照大神の遙宮なりまた行くと二里計り安東の港湾頭に至る

安東港の其曠さ七町港内の深さ三枚より五枚及び北に向ひ的矢港頭は對したり致は燈臺あり其高さ十丈二尺燈光旋轉し白色照射七里は遠す此地を去り行歩二里鳥羽港の坊間に至る

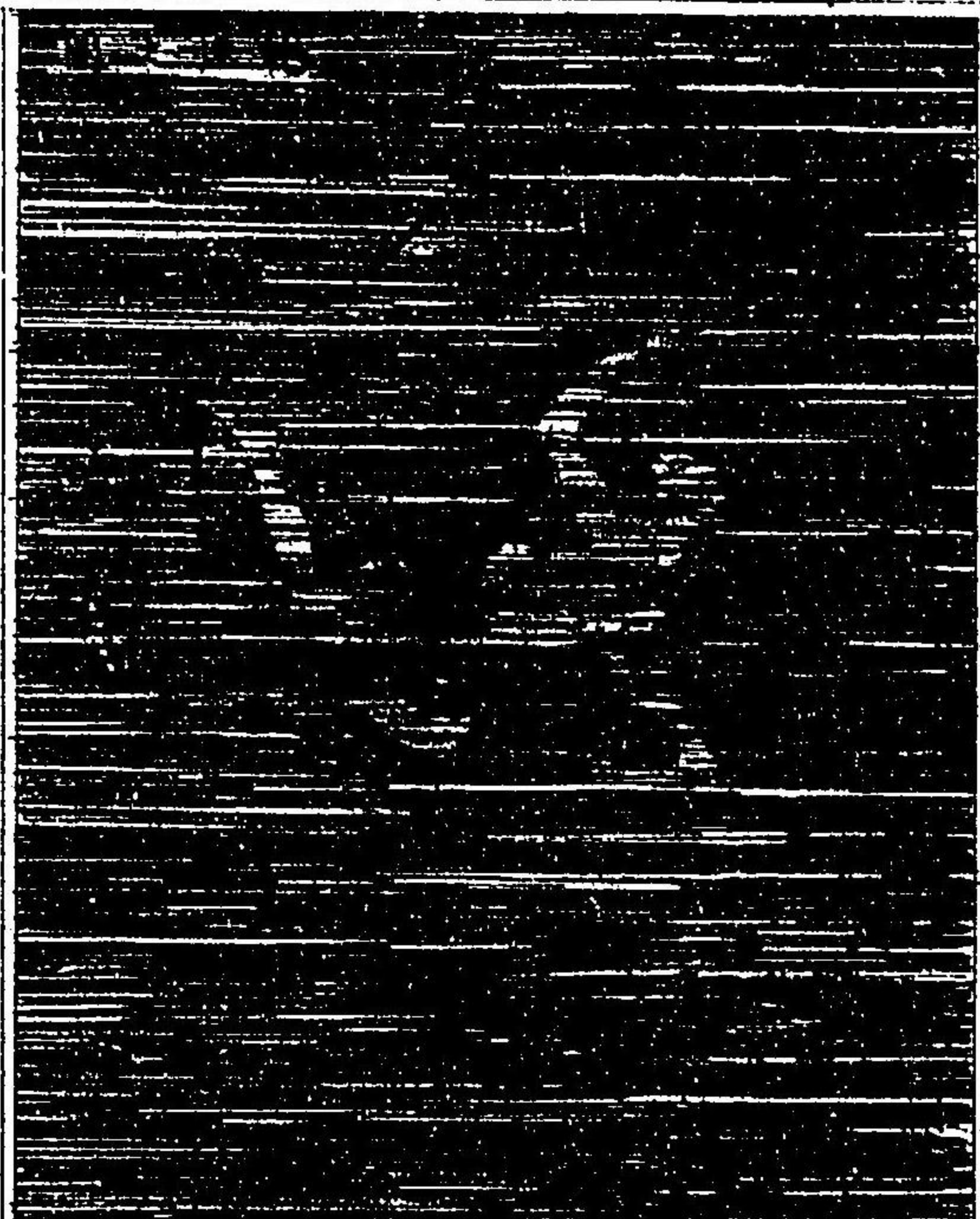
鳥羽港は若志郡に在り曠さ十二町、伊山北は若志島東は坂手管の二島に對し



養工商の人少なく、錦町は少造松所あり
 松柏の修繕に従事す
 本州の人は質素にて其性溫和其上直貴の
 人情あり殊に婦人は能く勞能に慣れ深て
 海に沈みて鯨海藻を採り來者を海士と云
 其姿は腰よりき蒲葉また長き髪を附着す
 其長き若き女は五尋三十歳以上は十尋り
 十五尋をば腰限とす皆遠くまゝ身を投じ
 立ち附きては海底の岩に附着たる鮫をば
 籠を以て不意に放ち蒲葉に納る二三箇又
 至れば腰繩を動して船中の獲者を示り
 其時人々繩を牽揚る其間海士は息を吐
 替時とまども海上は浮でーはし息を吐



其聲聞くも哀れなり
 鯨とる女房を呑むる海 其角
 上瀬は揚ぐ島巡覽は鳥羽の浦より二見の
 浦より巨る海岸の島嶼先づ鳥羽港に舟を
 停めて海上に浮れば島嶼の帆影の隠顯し
 磯邊に列なる漁村は波に浮れる如くにて
 大島寺も程近くして佐田浦よりは上陸し
 日和山に登れば爰に一寺あり眺望は富み
 号の島嶼眼下の時々暮布して一時は衆を
 怡も画中の佳景なり舟人故又風雨陰翳を
 占して松に乗とかや再たて海上に浮れば
 檣杪や疎浦相阿隔浦阿曾浦寺荒磯の時ち
 松樹の緑り淡くして島の考き眺の風趣は



二余り一志浦や阿漕も過ぎ或浦の浪音も響くと海上甚なく宮港より瀬松
 和布 荒布 鹿尾藻 神仙茶 鹿角茶 石花菜 鱧 鱧節 鱧 野魚 海蝦 海
 参 鱧 真珠 ● 取路 伊勢路 鳥羽 伊勢山田

尾張國之部

木州東は三河に隣り西北は美濃に連路し西南は内海に瀕して此地東西廣さ凡そ
 八里にして南北十五里地勢は平衍山なく木曾川西北を流れて木州の國境を際流し
 濠洲の利ありと雖も濠洲の患なき能はず東方は三河美濃諸峯の山脈を受次て
 岡阜は起伏し其土質殊々膏沃米穀は毎歲頗る豐饒なり木州八郡を區分して
 愛智 知多 丹羽 春日井 葉栗 海東 海西 中野 寺又名邑は 熱田 鳴海
 龜崎 大野 清洲 稻置 一宮 津島 蟹江 等なり沿海の形勢は東南部遠く
 南海に突出し其形ち臂を延たる如くなり此を知多の一部とす西南は伊勢海を隔て
 伊勢志摩と對したり東南部は三河の海と對して此も濠の如き其人口七十三万七
 千二百五十餘人人情伶俐して風俗は頗る華美と走りたり
 濃河に列なる山嶽は二宮山や小富士山 唯尾山や小牧山 丹羽郡に在り
 大河は木曾や五條川 日光川や玉野 天白川 皆内海に注ぐなり 津島に在り
 半田 武豊 大井 師野 等なり

彼の松島象嶽とて三社を去

るの思あり御島や御所島龍小

島天崎有瀬や由曾津浦階浦や

神津佐等は風沙に障りも無く

て松を繋ぐと便りよし森下川

濱や深瀬等神島は漁家多連り

て飛鳥は小島照々浮み衆皇子

社は伊勢浦に林頭と華夫頭出

て朝熊山は岸頭と登二見の

浦を漕過ぎて神社港より瀬松

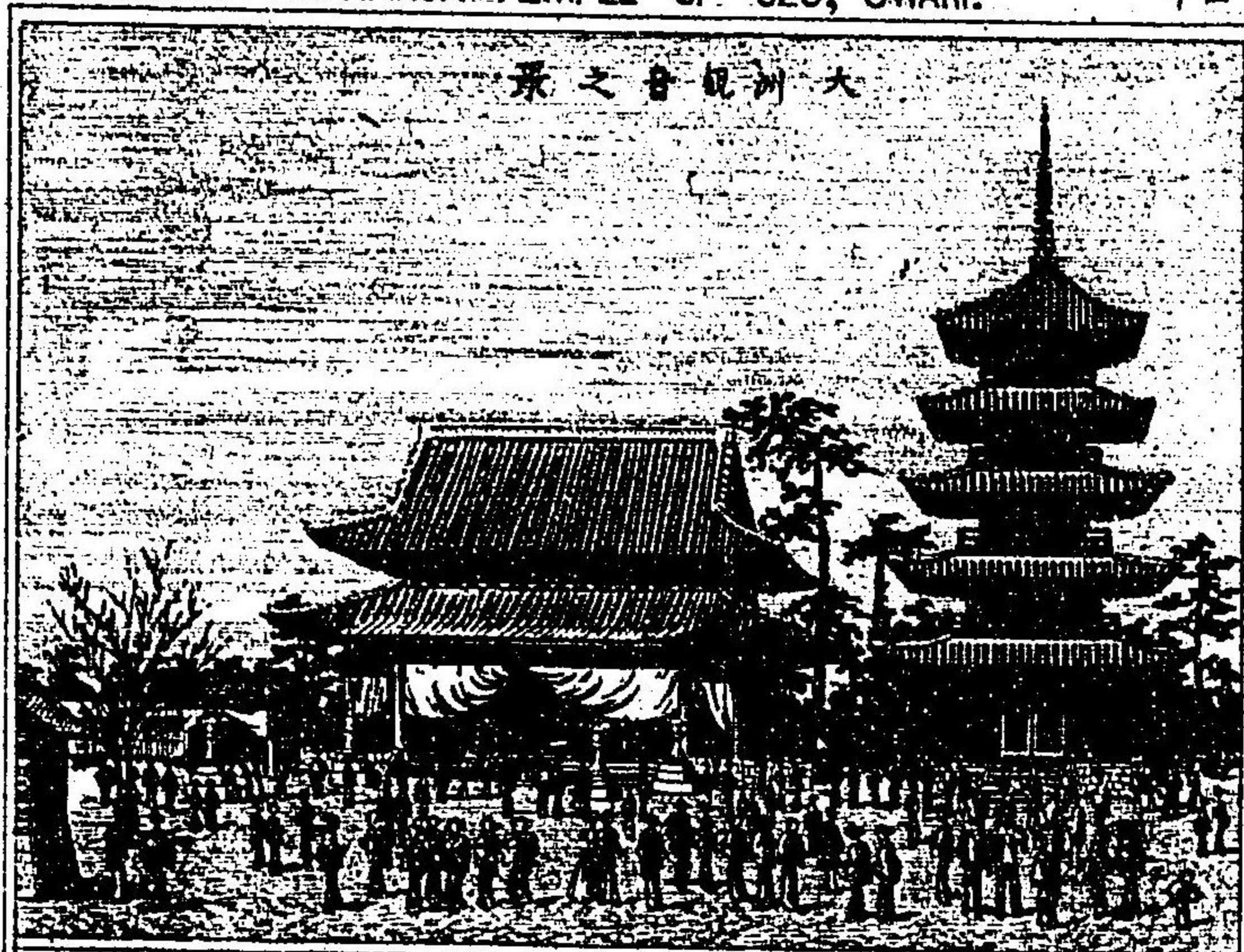


熱田神社は官幣大社正殿は日本武尊
 天照大神 素盞鳴尊を合祀して土用殿は
 草薙の御剣を祭たり景行天皇の創建なり
 境は頗る廣寛又老叡古樹社殿を擁し
 多少の獻燈は樹間に並列して神古びたり
 尾海畑溝畷柵陰々夏木客衣涼蔭成
 廣千秋車廟貌依然血食長 菅茶山
 往昔源賴朝の母は大官司 季範が女
 賴朝も此地に出陣し 後ち天下を平治して
 征夷大將軍を昇進し義経も茲に首服して
 名を西海に止めたり
 熱田突此町を云より名古屋を経て枇杷島
 清洲に到る三里が程商賈職工揃比して



熱田は宮と通稱し東海に津浦として
 南は海潮港々として朝熊山は霧々々
 波濤の末よあらわれ出島津や屋崎の
 浦々海岸よつらなり海頭には燈臺時たち
 神戶町は回漕店多軒をつらねて乗客の
 送迎よひまもなく波止場は貨物運輸し
 四五月の其頃は赤宮旅客雜沓シラベよは
 配酌歌曲の遊興あり
 近世鉄路を布設して東は東京南は武豊
 北は名古屋の町を經近江長濱を歴て敷設
 達して内國の中央を横貫し北海に通じたり
 此地を出て中瀬まち直行すれば教場を
 熱田神社の境地あり

大州觀音之景



諸邦の旅客雜沓し殊に兩京の要路は當馬車往復も時々在

名古屋之記

名古屋區は木州の渡智郡又地を占て四方又山嶺更もなく其地は稍高く高燥此地往古は廣原たり慶長年間徳川家康が茲に城郭を築かせて弟四子忠吉を封ける兩承子孫相ついで王政維新鎮臺を置き第三軍を統率し師管二管を分置して第六の師管營所とし分營は豐橋岐阜松本縣廳を古渡町に建築現今區内の面積は東西凡よる一里三町南北一里五町にして人口十二万五百餘人



木町は全區の中央に南は熱田に連絡し尋常馬車や人力車奥々と間隙もなし百貨輻輳商業の盛んなる事全國中其比を見ざる處なり栄町通りは大路にて近世修築樹を植へて盛夏の頃は扇を置き夕納涼の遊歩あり東を眺れば縣廳の高層聳へて峻々と西は停車場の設あり時々津笛の聲を聞く前に行けば若宮八幡大須の觀音境地は演戲場や講譚寺席を設けて賑賑なり此は降りて七ツ寺泉池に瀕し茶亭あり櫻樹を以て名高し雅俗も茲に遊宴し人行絡繹する如し乃のまや花をたぐりて狂きたり 宇朝



堀川宿を歴て六里余内津の駅に着したり
 此地は木曾路に通ふ是を下街道と呼ぶ
 製茶隆盛の地にして宇治信楽とも並び
 玉野川は琵琶湖の上流にして景致よく
 流れ又白石出沒し巨巖山を擁し礫なり
 老松枝を倒垂し激流石を噴し雪蓋
 清流新雪と砂を帯て白練騎す如くなり
 山澗は治ふ岩崖は百千の松根を載きて
 實は山水の奇観なり
 瀬戸村は中馬街道美濃路と越る要所
 名古屋を距つ五里余陶器を以て著るし
 今其陶工の起源を尋ねるは貞應二年の頃
 加藤四郎春慶とて其出處は大和なり



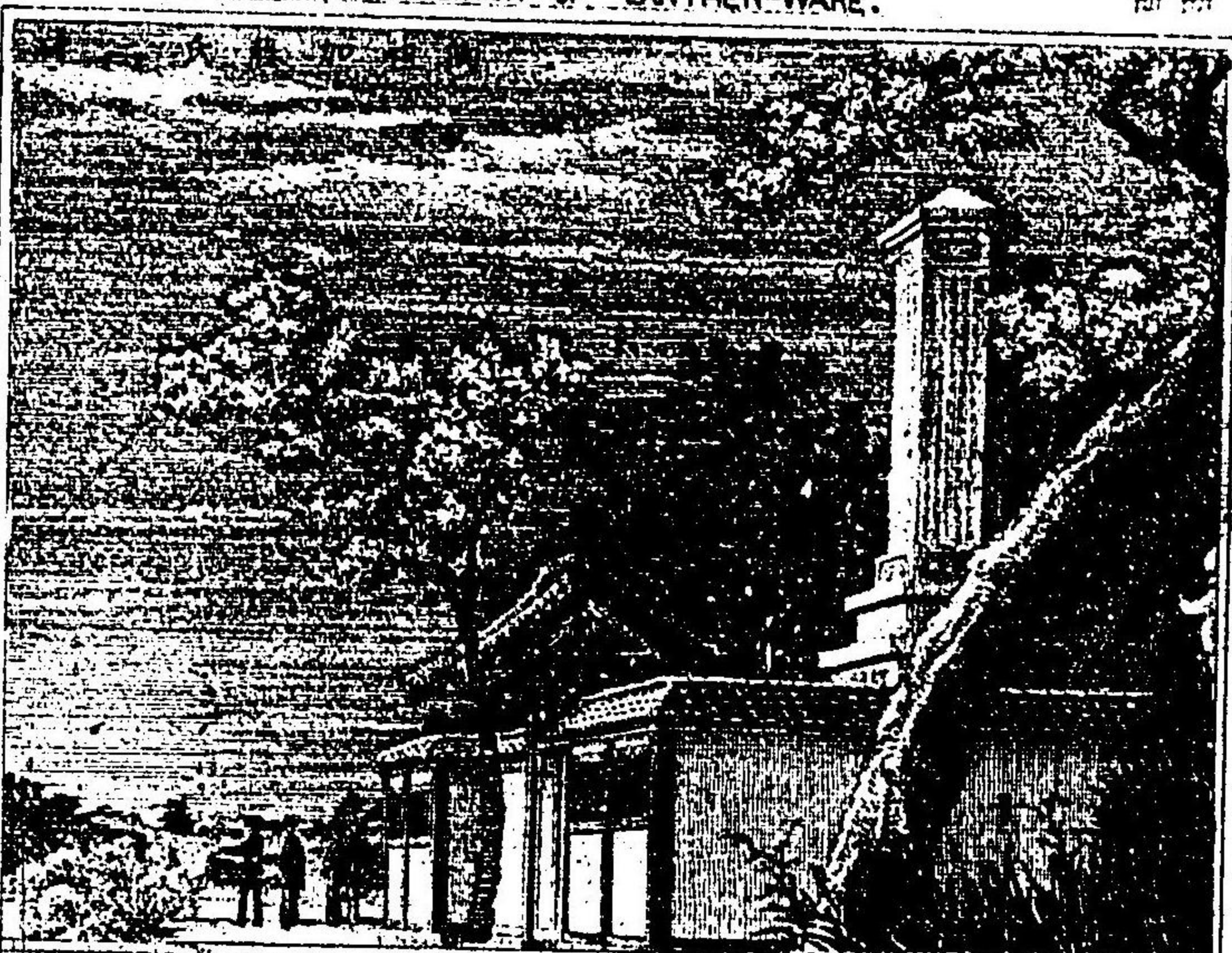
最も名高き町銘は京町及び小田原町
 外堀町と東照宮城地と入れ其結構
 宏壯美麗と天守閣雲を穿る如く龍頭と
 金銃尾は旭と輝きて其名は四方に聞へたり
 瑞雲高彩雲開佳氣中天黃鶴廻為道客臨
 好裁賦乾坤吾黨神靈才
 松山君山
 又其國の心あり多の老の心あり多の老の心あり
 堀川五條橋の下流は兩岸櫻木多くして
 花時観客熱鬧し貴賤政の宴をなす
 官撰兩岸堀川海護奔芳菲幾往還春思茂
 猶在我相逢不語步花間
 櫻井宗哲
 是より名古屋を出て東北に向て扶を曳く

VIEW OF BIWAJIMA, OWARI.



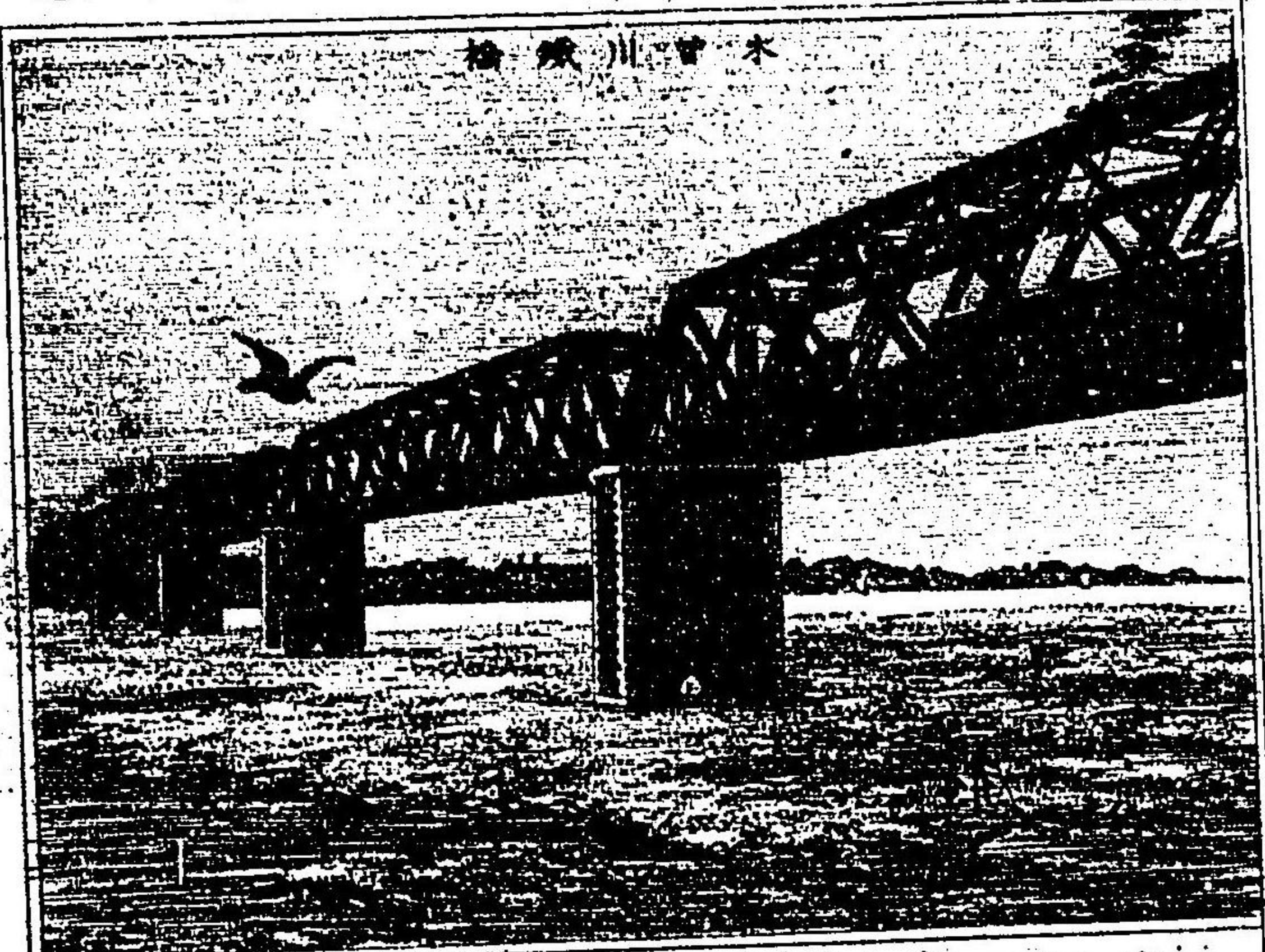
此邦の輸出も多くなり、慶應年間碑を建つ
 上欄に掲る圖の如く陶器を以て精作す
 碑銘は阿部伯耆氏周囲に土封を造して
 紅葉櫻木を栽培し四季の詠めを並べて
 陶祖の靈魂を慰めつ、
 琵琶島は區の西北に斷橋中の一島にして
 本州第一の大橋なり、橋の通は江川町より
 清洲や一宮に至る要路に當り朝よは
 野菜の市立關熱し停車場に近し至便なり
 橋上より立回望せば山水の其異致信州の
 御城跡や美老山加州は白山や江州の
 伊吹山勢州は多度山参河は狭坂山寺
 諸峯の翠巒列りて巽位は錦城巒たり

THE MONUMENT OF KATO, INVENTOR OF EARTHEN-WARE.



山城の源氏に位則て土器を種々の製法を
 業の兼用法を知りて越前より永平寺進元が
 渡来の隨從依頼して彼地は六年修業し
 安貞二年は歸朝為し肥前の川尻に着せし
 其地は密を造作し彼地より齋し来る
 土を用て焼はじれ夫より父が配所なる
 備前の國に居を移し故より香く始めしが
 良土を得たれば其後各國良土を得つ、
 本州の瀬戸山に來て陶器の良土を現出し
 始て此地に密を築き陶器製造は成る盛なり
 夫より六作や十作の名工世に出で湖江鳴り
 信長公の好寵を伴し其精工を得る故に
 支那製品より劣らじと次第に密も繁殖し

橋 鐵 川 曾 木



茶村重政曾是君家開馬場 菅茶山

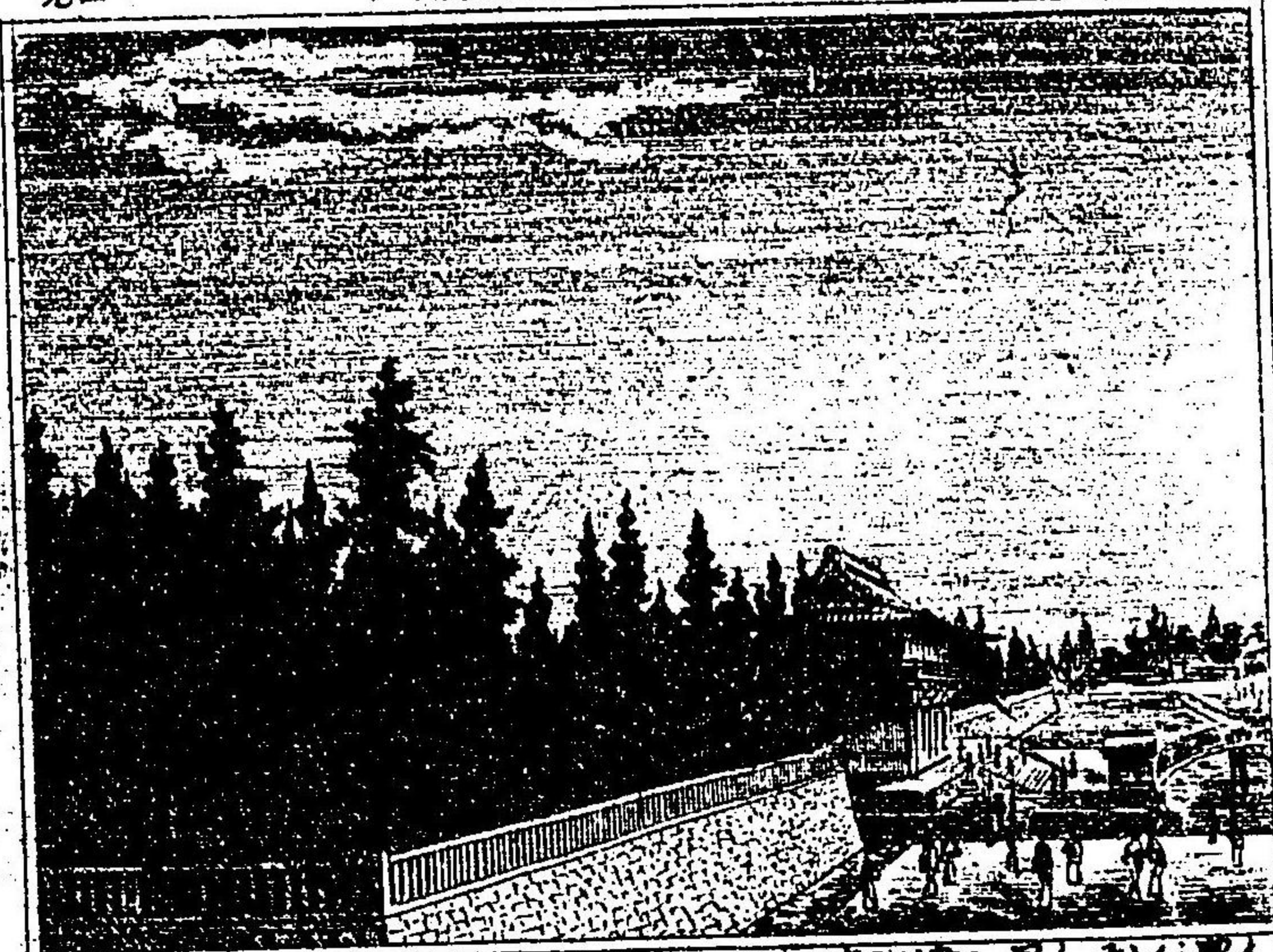
一宮は清洲の北二里餘にして尚武多し
 一宮は真清田神社と云縣社にて大明命を奉る
 當所は毎月三八の日市立ありて遠近の人
 集合して雜貨を販賣終日最も雜沓なり
 例成四月は桃花會あり此日錦旗を粧飾し
 車乘二輛社内にて奉り証據合券の祭事あり
 葉栗中島の西郡村落田畔末を裁入
 皆な養蠶を營業し結城編の織場多し
 日々他郡へ輸出して賣る産物の巨魁たり
 北方は美濃現 近世軌道の橋を架す
 上欄は掲る圖の如く堅固美觀の鉄橋なり
 下流は起の沢あり

街 一 宮 曾 木

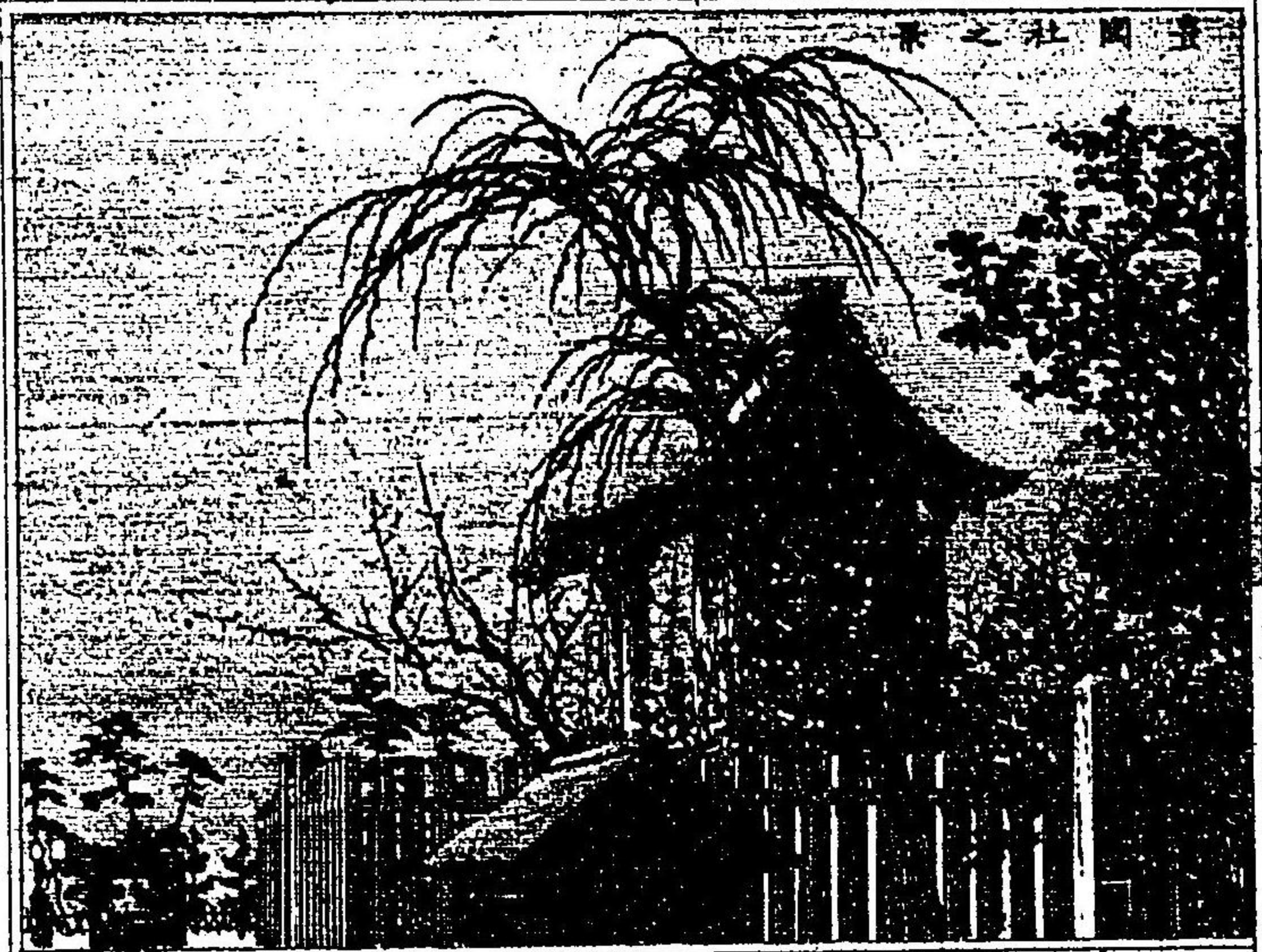


府下の萬東も一時は來り馳せ能く富り
 島南は秋萩養生し雅俗親月の勝地なり
 僅殊に三任曾師長公編著の隆行長横江が子と傳國の際彼は白菊
 の群を興へたり其は杉里藤原と云二男和歌を疾し弱死すと
 云ふ活のふりもて三流の流し果と云ふなり

身を洗ひてを思ひに茶の湯の湯を濁るなり日濁
 清洲は木州中央の地名古屋の西北二里五町
 斯波義重と謂し人元和元年城を築たり
 其后秀次及び正則や性高院まで相續し
 城主たりしが此地は水害の恐れありとて
 慶長年間遷府して其後取と成り濃州に
 通ふ要路なれば茶會夏軒を列べて繁華なり
 地は廣く三郡に跨りて十有二村を連絡す
 北擊南侵隘ハ荒橋機誰料伏蒲場荒敷性



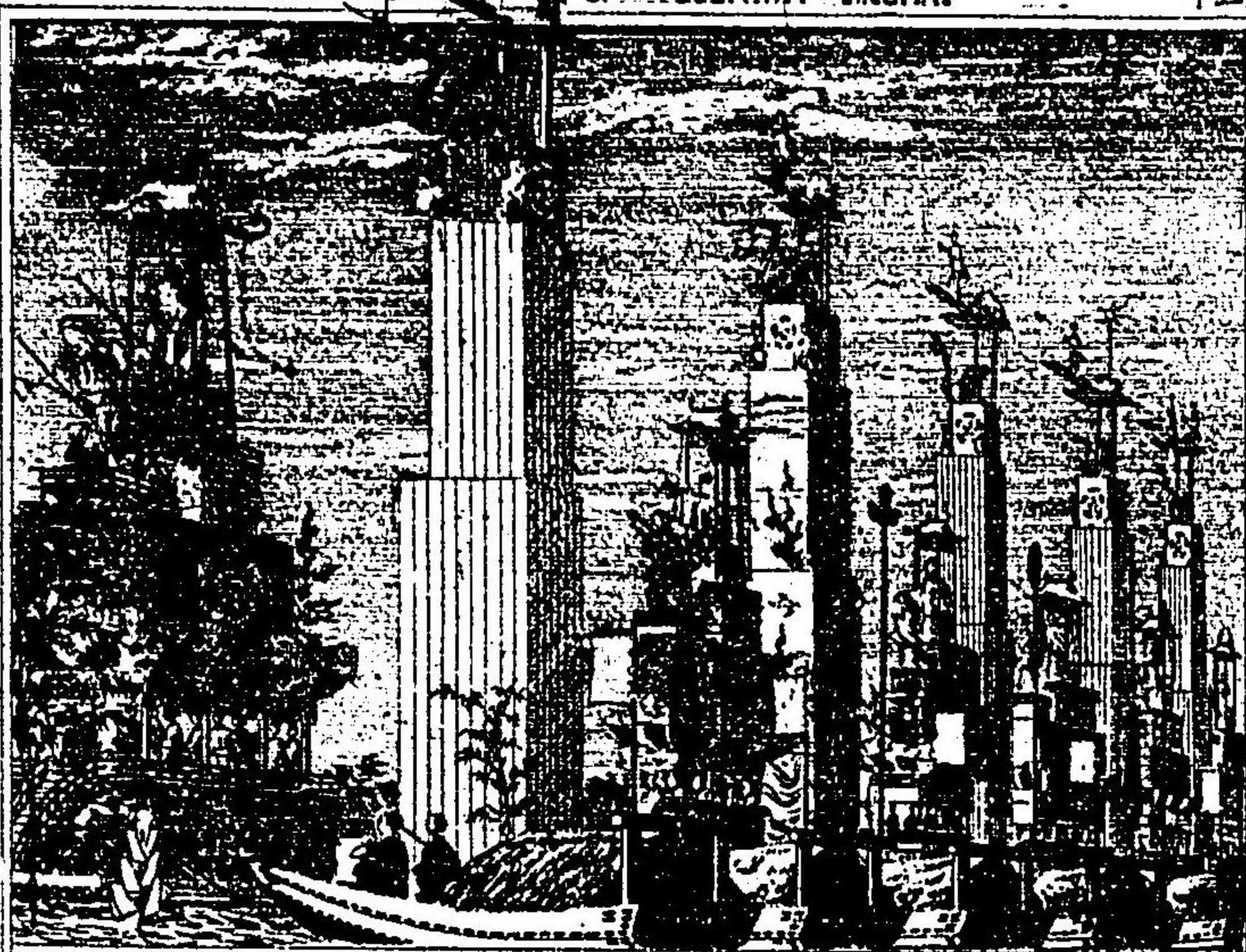
豊臣と外戚の親みあり、故に志津岳先鋒の
勲功を登庸せられ、天正十三年主計頭と
昇進し肥後守と成る。
津島神社は、縣社にして愛智郡中村の西四里
余、遠馬尊、寺稻田媛、天忍穗耳尊を祭る。
弘仁九年の創建なり。
朱殿高臨、舊海津津、雲千載、瑞光新萬里、方知
神化及階前、不斷各州人。 丹羽 弘
六月十四日の夜、秋夜、少の灯籠最と高く
粧點して宵渡り、唱入翌十五日を朝祭と云
上欄に掲る挿圖は、朝祭の景況を示なり。
各松に粧飾る唐鏡、家形は高く引懸い
屋上、剪彩花を飾り、笛や太鼓を合奏し



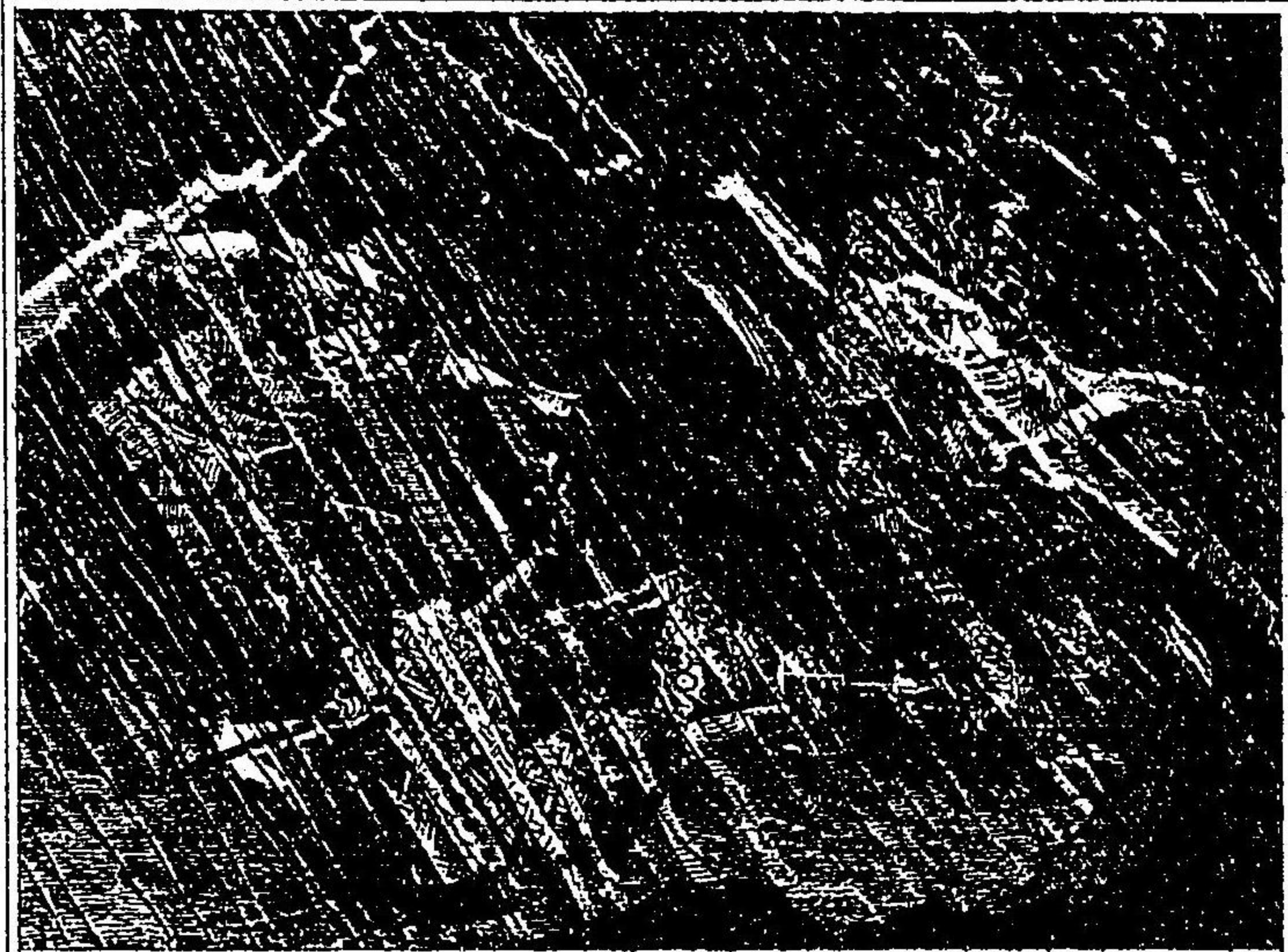
稻置は、舊犬山と云ふ、本州の北木曾川に瀕し
其地高澤、鳥獸多し、城址は公園の地と成る。
遊園の佳地と謂可し。
西愛智郡上中村、名古屋、廣小路より野里
住首秀吉出陣の地とて、太閤堂への前儀あり。
近世上欄に掲ぐる社祠を建築し、境地は
雜樹花卉を培植し、豊國神社と稱呼せり。
將軍家譜、昌慶長三年八月十八日、前關白
太政大臣從一位、任伏見桃山城、上苑、寺
享年六十三、成謚號を豊國大明神と賜へり。
絶海津松原、大明寺、知此地、長榮、前千山、風雨
時、思只作當年叱咤也。 物茂郡
加藤清正出生の地也。此近傍、常泉寺の西



師崎は幡頭崎と本州の東南端にあり、断崖千仞、巖岩百尺、古木は森々、蒼翠して絶頂に登る風景は、濠海三面を一眸に無邊の際涯を對したり、富士峯及び熊野浦山海明美の勝地なり、常滑焼の陶祖は古して延喜式にも載たれど、陶器は瀬戸と世に賞し、湖江は普く流布したり、焼出せる数も多きを、其製粗にして好筆家の需待に應ぜざる故、亦に稱譽せず、然るは白鷗八兵衛と謂しもの精巧品を製造し、官家よ是を獻じける、横須賀旧馬走瀬と云、商賈多し、繁華の地、衣浦とて古人の詠多し、



車乘の高き十三間、其輪は都合十二枚、實に一奇の壯觀なり、名古屋より汽車を乗り、熱田大高寺の駅を経て大府驛に到れば、此處より軌道は東に分岐して三河に向、此れ東海道の本線なり、余輩は直達し、龜崎港に向ひたり、此海岸は千餘家の漁村なれども、繁華なり、半田港は龜崎の南に在り、鉄路を通じ、又横濱は隔日定期航海あり、武豊港は半田の南線路を達す、旧一村、落近世開墾し、棲を建て、明治二十年の三月、天朝臨幸あらせられ、海上觀覽の幸あり、大井港は師崎の北、四五町計りの淺なり、



海天秋色絶塵嘆幽趣猶添月一痕斯地稱水
 如有意與石走々起源村
 龍隱
 乃上野之清流の石の影を流すは 蓋者
 其の石を流すは 蓋者
 まなは秋の浦の影を流すは 蓋者
 宮殿を立出て笠寺の観音閣の前を過ぎ
 天白川の橋を打渡り、鴨海駅及び有松は
 絞染を請ぐ屋敷其名は湖江に聞たり
 爰を過ぎ敷歩として路傍の傍に墓碑を視る
 此れ今川義元の古墳此邊を捕狹間と謂ふ
 往昔織田今川両氏が争戦の地榛莽の中
 聖々從臣の碑を樹し戦闘の事蹟を記す
 故に於てや偶然と往事を追懐し大息す

嗚呼今川氏駿河を據り、遠州を跨り、参州を合併し兵強く糧足れり
 傲然と東海を雄視して一蹟も全れ死果て千載に骸骨を現たり
 是他なし戦ひ勝て且つ驕るゝ由るのみと慨然して此地を去り
 行は境川てふ橋あり、此を渡れば三河の國知立に到る宮殿を出て
 海崎を経て四里十二町

尾張國物産

床石 磨砂 遊根
 藍 浦穂 茶 海參
 干鰯 特城掛留糖
 春貝 鱈白生軟 鱈次
 味噌 醬油 陶器
 七寶燒 扇 團扇
 豊桑燒 陶器 漆器

今沢路

東海道 鳴海 熱田 榑福田 榑前 須賀 伊勢 東名
 美濃路 名古屋 小牧村 榑置 榑手 美濃 織名
 同列路 名古屋 榑清洲 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑
 同列路 名古屋 榑清洲 一宮 美濃 笠松
 同 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑
 同中馬街道 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑 榑榑
 美濃 榑野村

三河國之部

此國東は遠江に隣り、西は尾張に接續し、北は濃信に連絡す、南は洋海に瀕したり。其廣方の東西は九百十六里、南北は十七里餘あり。山脈は東北に連りて盛なり。就中遷美郡の地勢は臂を伸ぶが如く、海に出で尾張の知多郡と對し、共一湾を抱きたり。天羽大平豊川の三大河あるを以て、國の強を得たりと云南方土壤肥饒にして、北地は凡て瘠地多く、相半の地と謂つべし、木州八郡なりしも、明治十一年に改正し、加茂及び設楽郡を東西南北に分ちたり。碧海、額田、賢飯、南設楽、北設楽、東加茂、西加茂、幡豆、八名、遷美、十郡と爲す、諸名邑は、川谷、大濱、知立、拳母、足助、岡崎、西尾、新城、田原、等なり、人口は四十八万七千一百七十余人、風俗は淳厚にして専ら農業を以たり。

旗本山は尾張に接し、木宮宮路山は國の中央、鳳来寺及び鞍掛山は豊川の上流にして、石巻高山、遠州、二坂、河原、二於ては豊川、太平、大屋川と云ひ、矢作川は美濃に起り、木州を横貫して、共内海に流れ注ぐなり。



知立は舊池鯉鮒と云近世世郡役所を設け、高野村合軒を列ねて土地は頗る繁華なり。知立神社は縣社として、吉備武彦命を祀り、仲哀天皇元年の創建、素戔嗚尊と云たり。旗本神社は知立の北四里許にして、高野村縣社として大磯命を祀り、杉槍時々幽雅の地、故に廣沢源と云あり、其高さは九丈、幅二間、下流は天羽川に注ぎ、盛夏避暑雅客多し。八橋村は在五中將の詠歌に著し、今橋かよ、其舊蹟を存在して、雅客故に杖を曳く。

自羽林題社、昔年不詳、八橋、我來、却謙、聖門訓、樓字、為、邦、政、耶、山、岩、岡、齋、や、橋、の、橋、社、と、云、の、橋、も、思、は、ま、り、大、平



鏡屋此外数軒あり、岡崎の城邊は徳川氏創業の旧地にして方今公園の一となる開闢眺望の勝地なり真宗三河の教校所西洋風の建築たり太平川沿岸の地は近世宏社の紡績場は巨額の綿を製造し藤川は水か運轉の機械を用て紡績し他邦へ輸出盛なり宮崎及び桂山の村落は製茶を以て名高し巴山は額田設茶は隣る高嶺として八面結晶の雲母を採出し小富士は其形を以て名を命す此より駿車を進めて官道に向ひ藤川や赤坂打過てやがて御油駅に着したり此道程は五里廿八丁

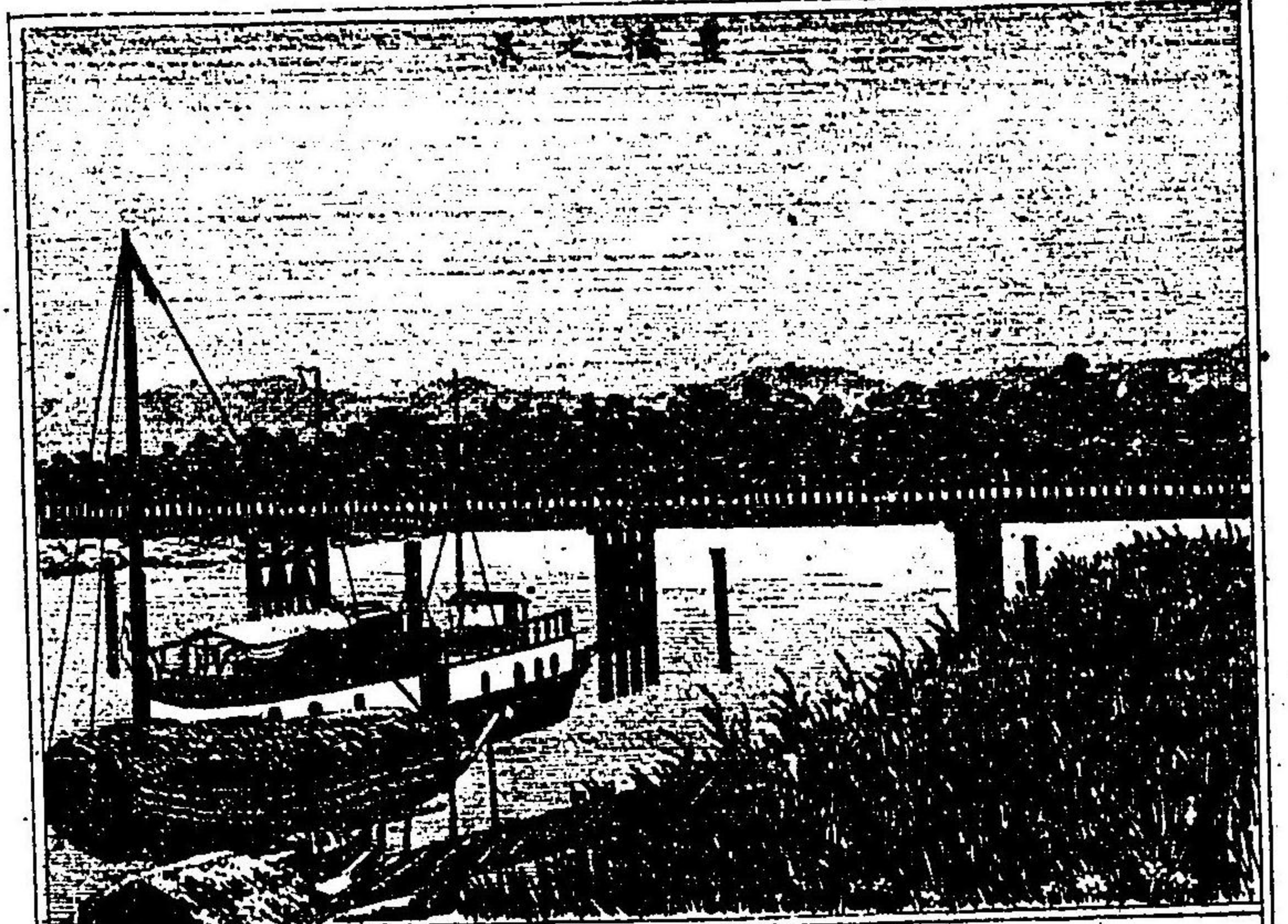


大瀨港は知立の南二里船泊便利の地にして近時松葉の設茶あり日々隆盛又進みなり石川大山は和泉村の産大瀨の少し東北の地近世致又碑文を建つ、矢作橋又矢矧は書す二百八間の長橋なり橋畔に淨瑠璃姫の古蹟あり俚俗云此姫源牛若丸を慕ひ来て此駅に勞死けると天正年間織田信長の寵妾阿通と謂しもの姫の事情を演唄す此を淨瑠璃の宗祖とす此橋を過れば岡崎知立より三里廿八丁瀬車は大府驛より川谷を經此地に達たり岡崎の町貞は九十一郡役所の設在りまゝ商家も多し繁昌なり旅舎は志まのを始め

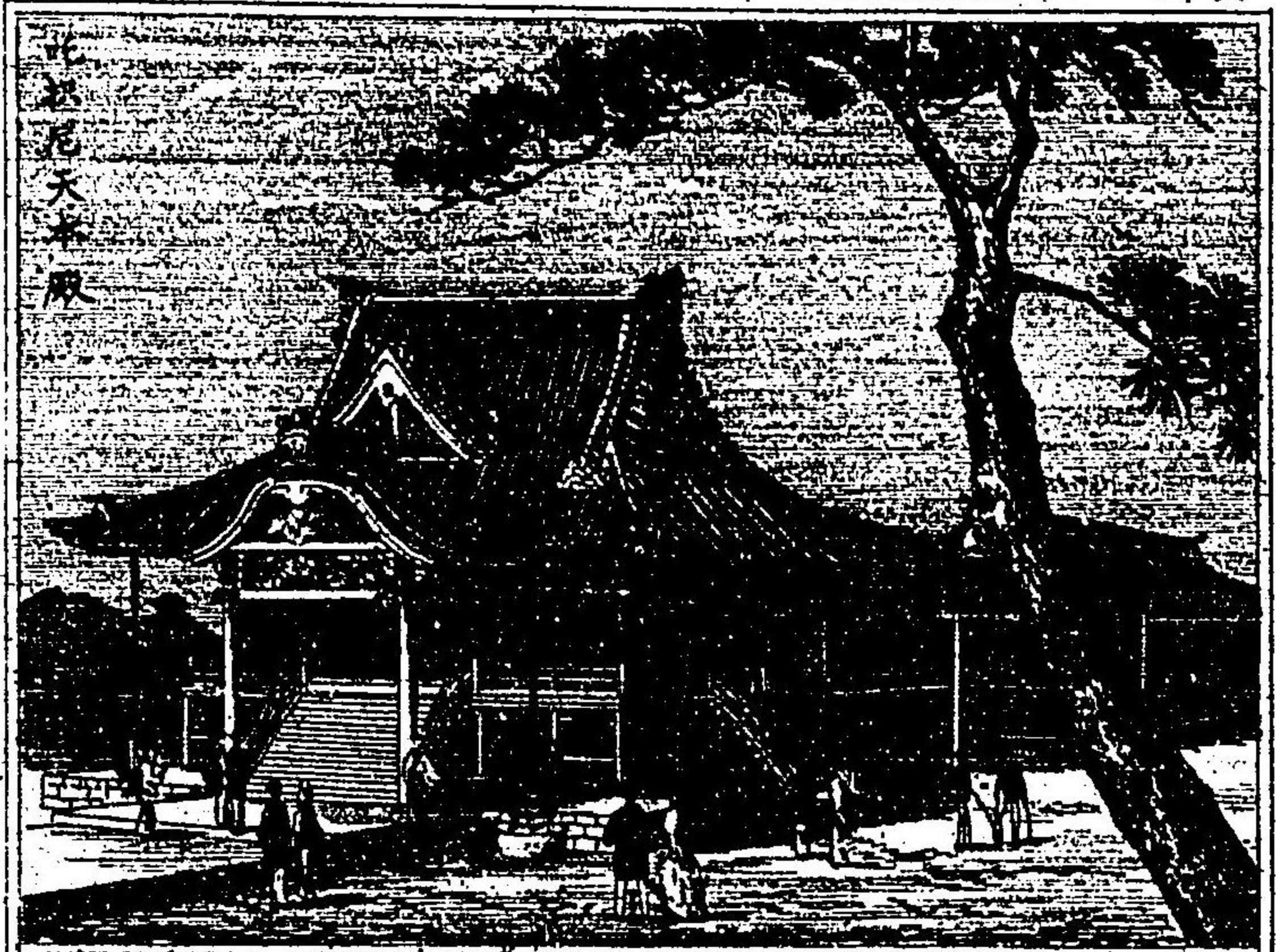
九五 MYŪGENJI OF TOYOKAWA, MIKAWA.
AND ARTIFICIAL MOUNTAIN ON THIRE.



VIEW OF TOYOHASHI, MIKAWA.



御油駅より郡役所あり、族舎軒を聯ね繁島地
 鉄路は岡崎より蒲郡を経て此處に達すし
 秋葉山鳳来寺路は御油より大木に到る
 行程は二里二十二町新城に到る二里四町
 新城は豊川に類し、濃州に通ふ要路に當り
 商家及族舎軒を列べ、人車往來常々賑々
 山間の小都會と謂へし、龍川は豊川の上流に
 追分てふ處を経て、鳳来寺門谷町に到る
 此道程は八里餘なり、秋葉神社行程は濃州に當り
 此山中に七瀑布あり
 鳳来寺は天台の西宗、僧利修の開基にして
 本尊藥師佛を安置し、山上に東照宮を築る
 豊橋は旧吉田と云ふ、御油より二里二十三町
 郡役所あり、鉄路を通ず、市坊負數二十七町



本宿は州屋を始め数多く百貨輻輳其繁華
 岡崎は伯仲し豊川の流木地を横貫し海に出で
 流木を勢州に往復すし
 妙嚴寺は禪刹にして豊橋の北二里に在り
 僧徒易の閑基境地有吃尼尊と云佛堂あり
 通谷豊川橋荷と呼ぶ寺域は頗る廣寛として
 莊嚴園裡の莊麗は實又俗服を驚駭す
 關東の人專信おほし其何たる所謂をいはず
 破鹿神社は國幣小社豊川の西北一宮村に在り
 大己貴神を祭祀す庭観音は豊橋の東一里
 此辺は廣き松林にして幽雅の地と謂ふべし
 二川駅に到る一里餘此駅の東は境川あり
 是より遠州の地に入る

物産

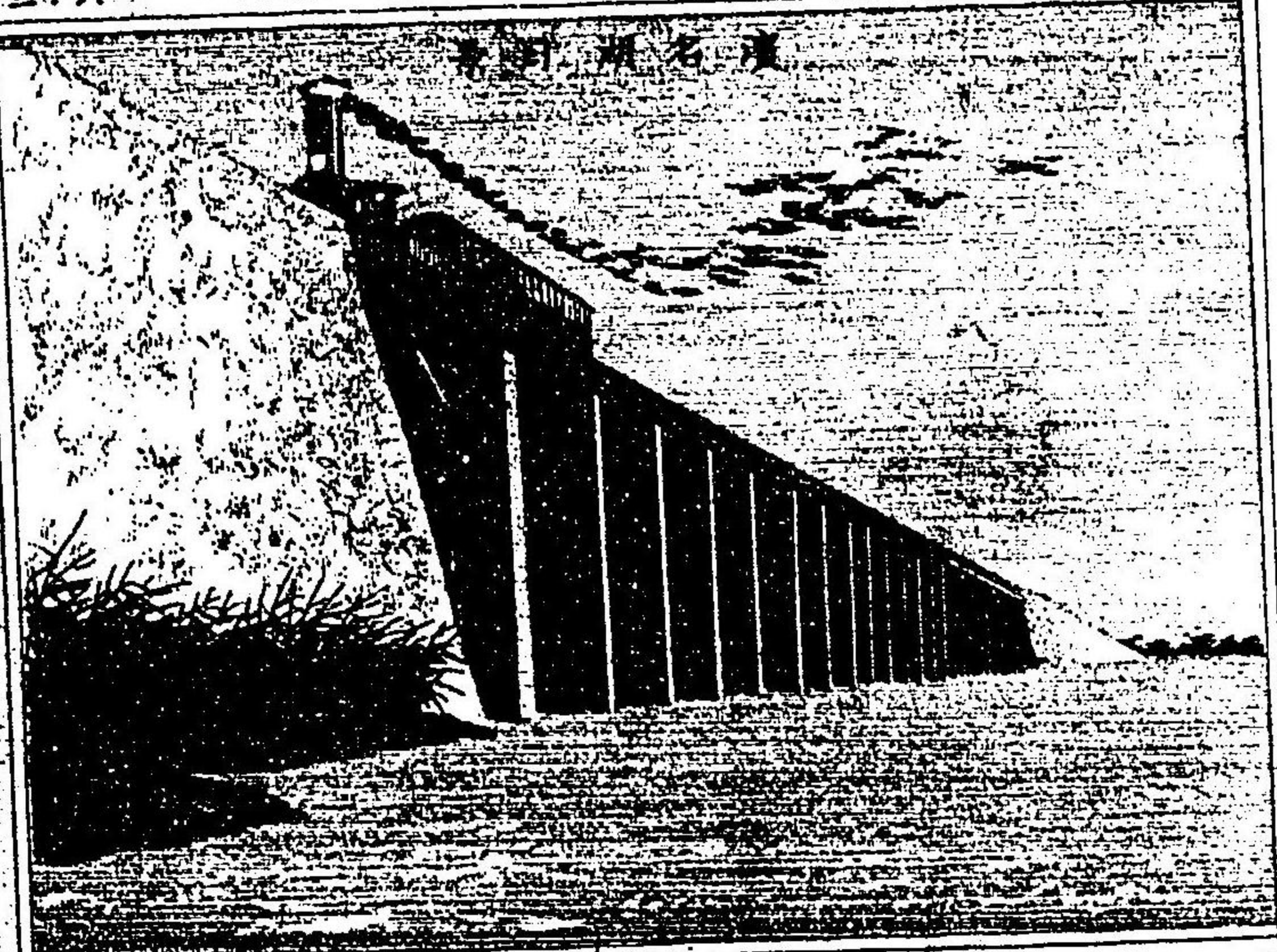
粟母 御影石 石粉
 名倉砥 鐘乳石 石灰
 甘薯 羊 松茸 茶
 猪皮 海苔 鰯 干鰯
 海參 海鼠膜 牡蛎
 春蘭青白紙 木綿 酒
 総米 味噌 醤油 塩
 粟粉 六名粉 絞油
 漆 陶器 煉火石 酢
 紡錘 燧金 麻繩 炭
 紙類 臭籠

三河國水路

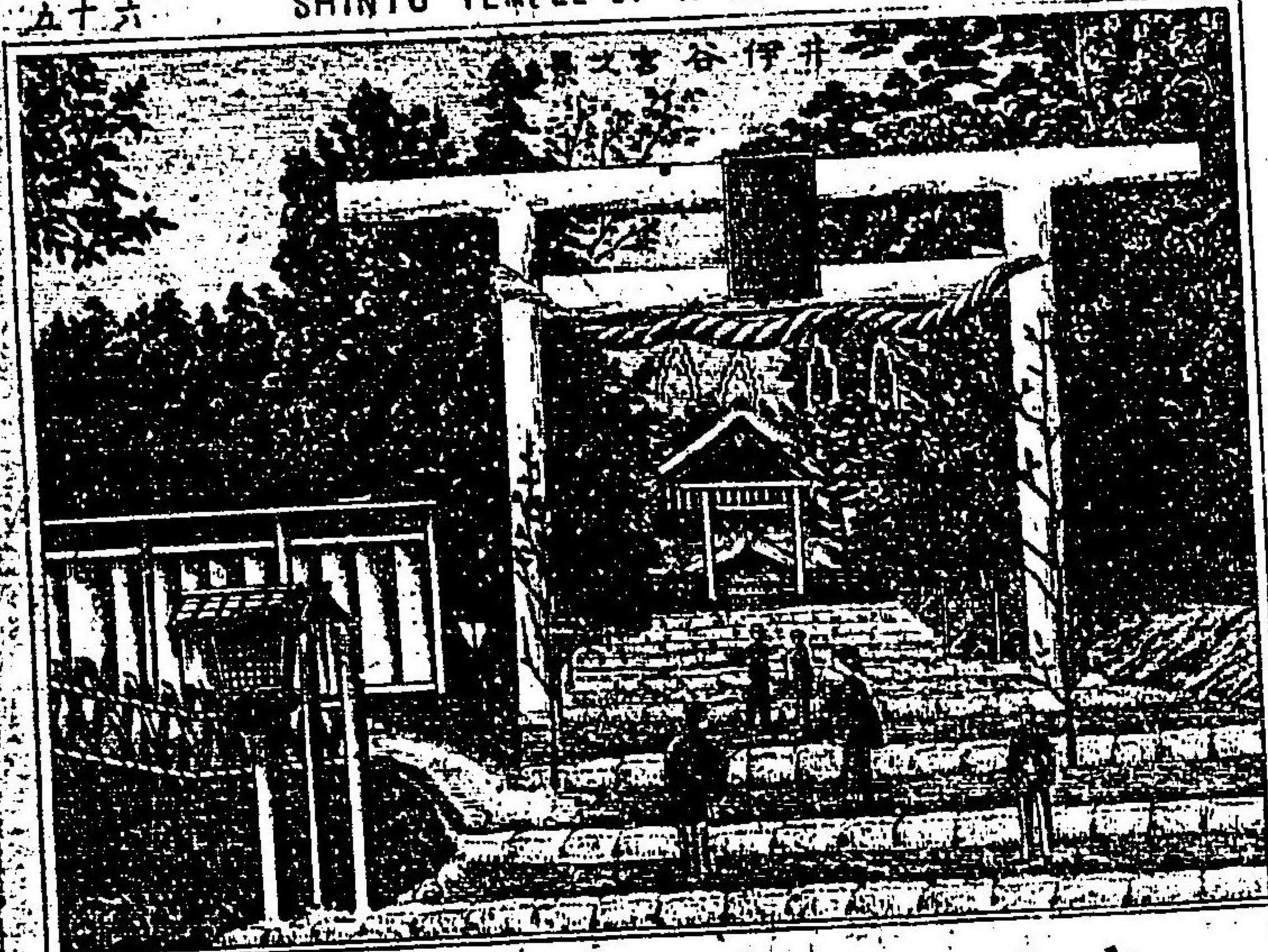
東海道 二川 豊橋 御油 大 赤阪 豊川
 岡崎 知立 尾張 鳴海
 遠州 木坂越 御油 北 金屋村 嵩山村
 遠州 三箇日村
 同新所 渡松路 二川 遠州 上原
 秋葉 鳳来寺路 御油 大木 新城 門谷
 大野 嵩菜山 遠江 太平
 借渡路 御油 大木 新城 田代村 東田
 内村 田口町 上津具村 信濃 根羽村
 同列路 岡崎 岩津村 赤原村 九久平村
 大高村 足助 明川村 武節町
 信州 根羽村

此國東は駿河に隣り、西は三河に連接し、北は信濃の山嶽連なり、南は洋海に對したり。東西の横徑十八里、南北二十里餘にして、其地勢北方一帯、山脈信州より來り、頗ぶる深阻困難、南より漸く平坦なり。大井川東部を際流し、天龍川中央を貫ぬき、瀕海は沃衍なして、川澤多故、入時として、漲溢水害の憂いあり。本州は十有二郡とす。濱名、教智、引佐、龜王、長上、善田、磐田、山名、周智、佐野、城東、榛原等として、又名邑は、新井、二俣、中泉、杖塚、見附、森町、掛川、横須賀、相良川崎等なり。人口は四十一万九千九百廿餘、風俗は樸陋、其民は茶橘を以て業となす。山嶽の位置は、於る三嶽は蛇王山といひ、木阪山は三州に連り、觀音山や光明山、大日山や秋葉山、青崩山や木宮山、高天神山や無間山、尾美山や白光山、黒法師山や朝日山、皆な本州北部にて、信濃三州に跨りたり。故に三處の原野あり。三方原は其原り、三里餘、野原は狭く、三里餘、改野原は一市引といひ、東西狭く、南北長し、六里三十四町あり。現今開墾に從事せり。

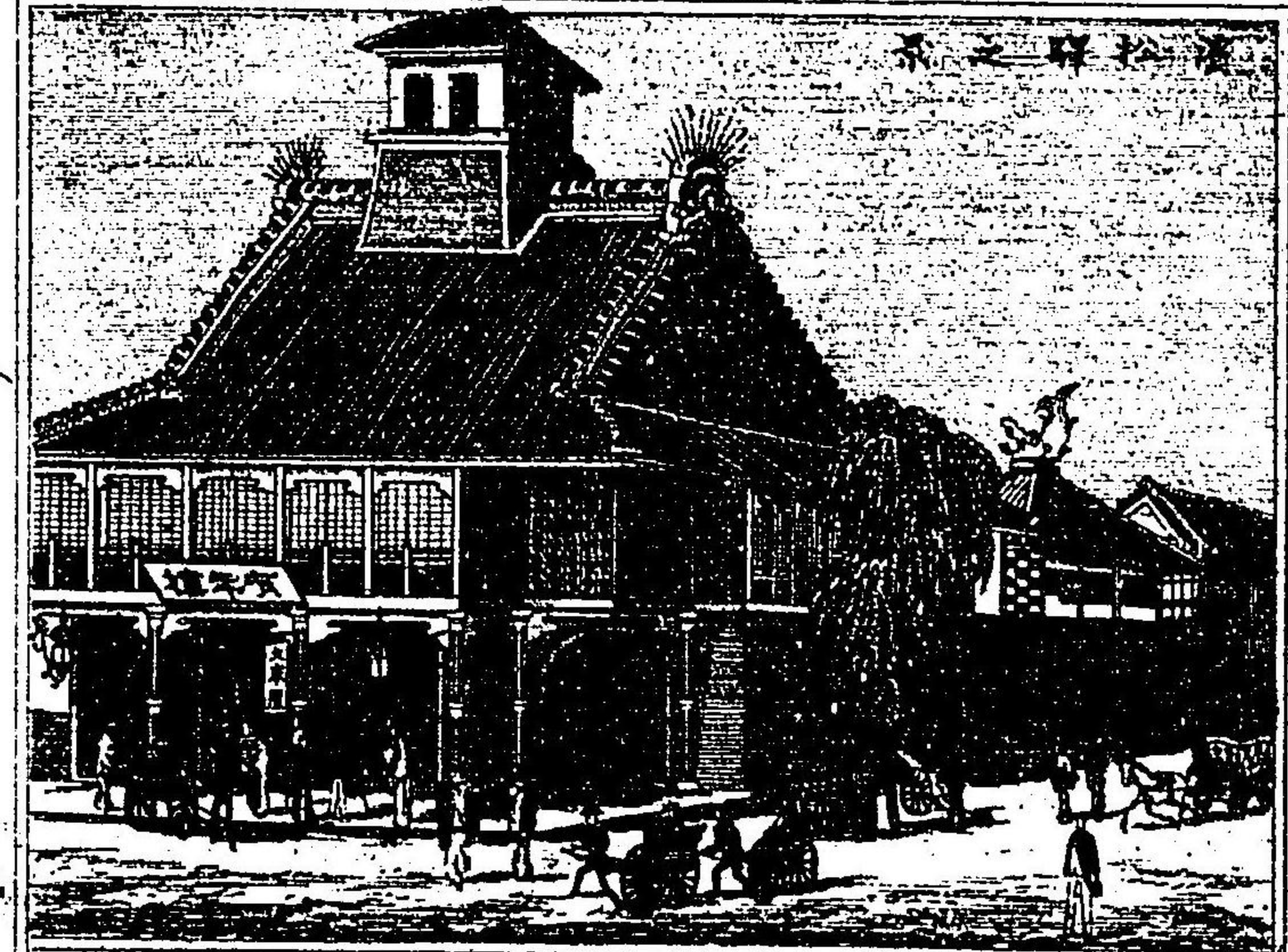
THE RAILWAY OF HAMANA LAKE,
ON THE MOONNIGHT, TŌTŌMI



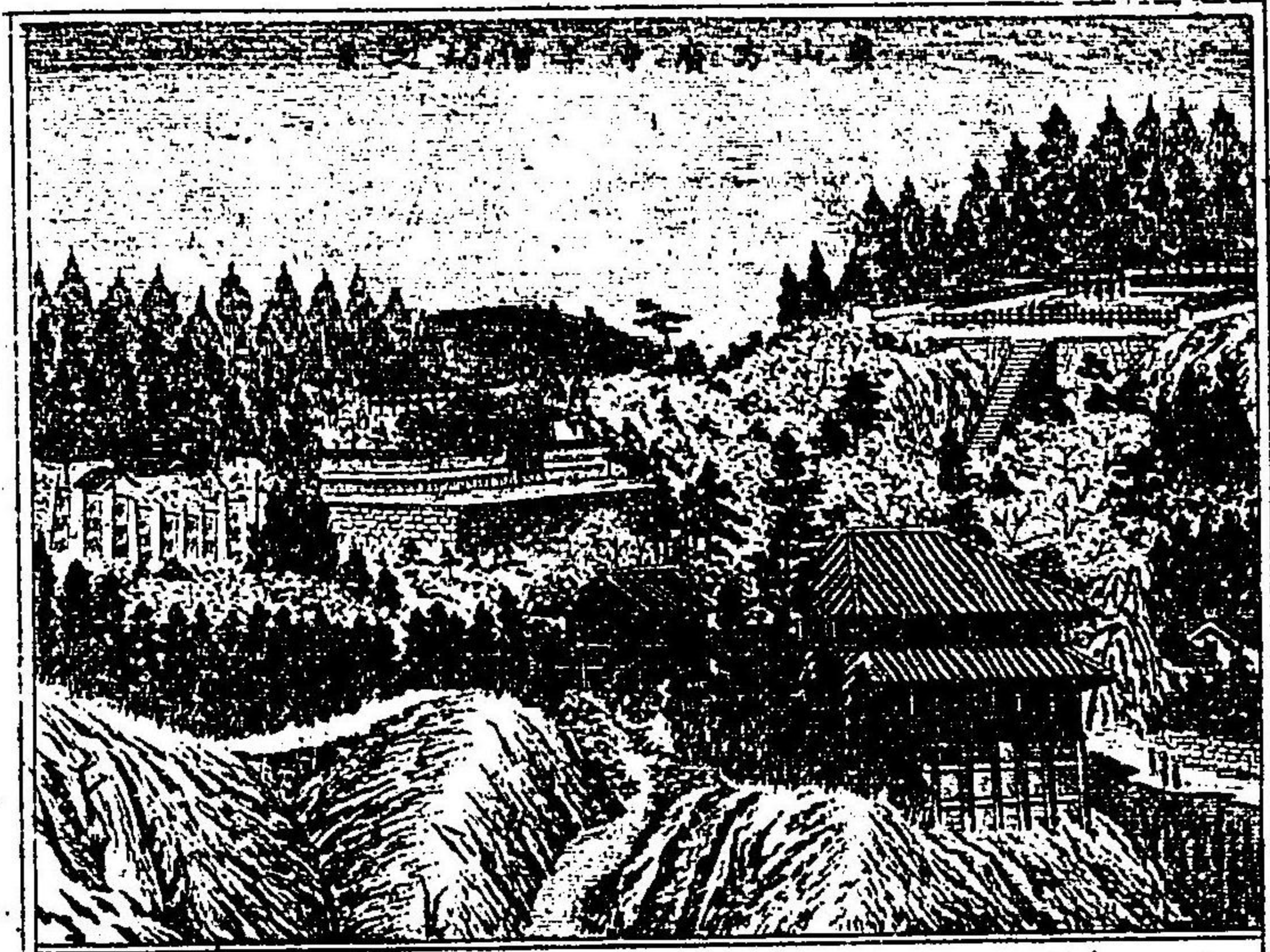
二川原を立出行けば新所の渡口として、近世溝渠を開掘し、新所を経て濱松や三箇日及び氣賀町は、津海通の便利あり。○陸行すは白須賀や数々有名なる高師山此道程は一里十八町車を駐めて回顧せば、嵩山松翠たはやか、其幹あかく清潔。宛も公園と行くと、津州津を、伊東寺跡より下田まで、眺めつ、溪の松は、雲水の間に隱歎し、波濤は岩礁に噴激し、白煙を放つ。潮聲は、近く耳底に響きたり、實に觀濤の一番なり。正長津州津、見阪東南海水浩無浪、吾儕不具、孟阿眼世上、憑誰問大源。 山崎開齋、



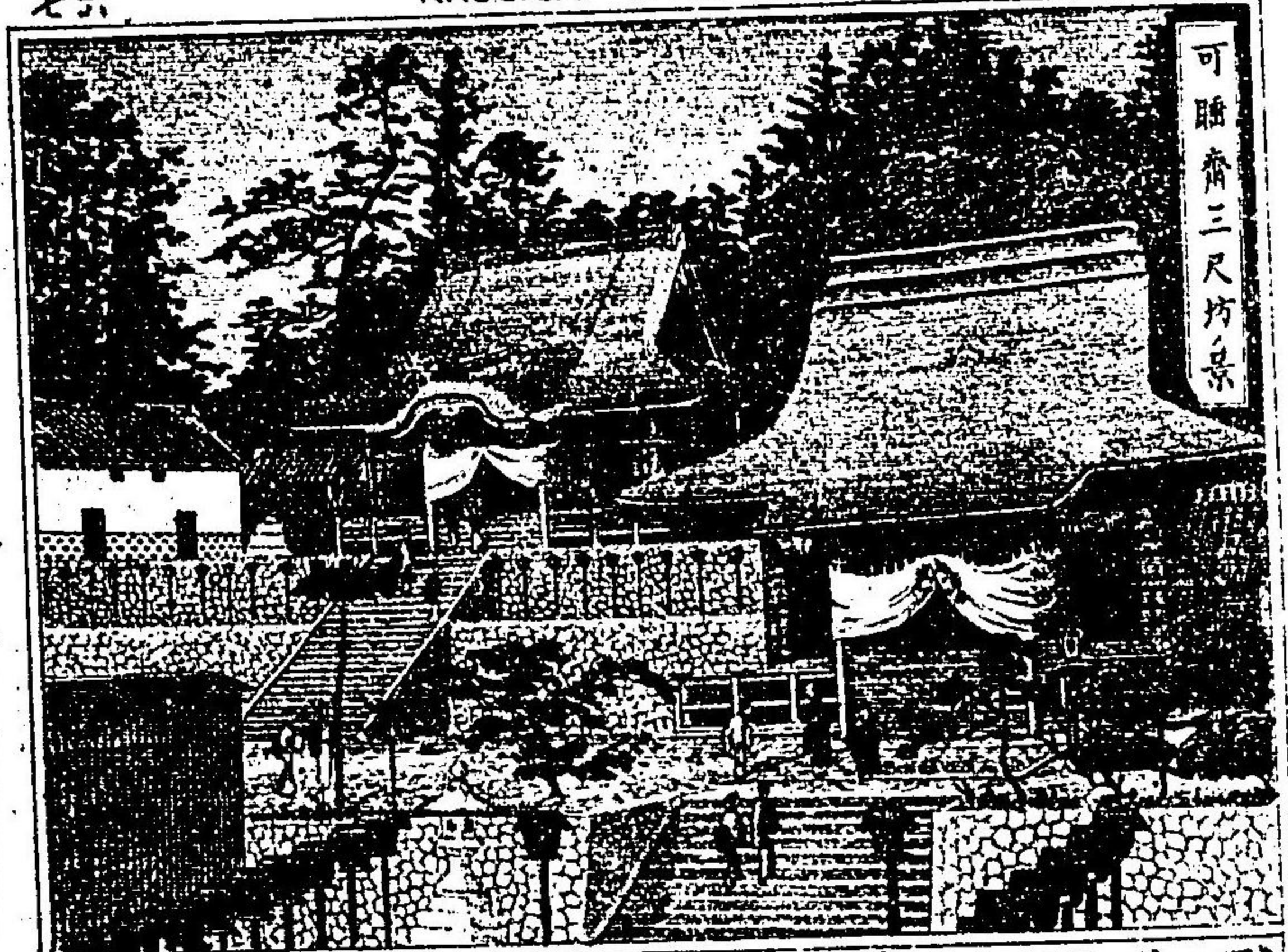
宣長
 此の山を多とみれば、程も遠き程も近きなり。宣長
 濱名の橋を打過て、舞阪と向ふ西は海
 砂原は廣く渺々と、渚の白砂は降雪の
 堆積る如く故々たり、潮風林梢を拂ひ
 法聲を和して面白し。
 ○舞阪の東部馬郡は停車場を設置して
 鐵路は豊橋より鷺津此地を経て濱松と達す
 濱松は郡の一都會、兩京間の半途なり
 市坊の負數廿七町、郡役所を高町と置き
 裁判所や郵便電信局銀行等も全備して
 土地は頗る繁昌なり、旅舎多き其中、
 大米屋は上欄圖の如く、客室最も美麗なり
 奥山の半僧坊の路は、濱松取を北と岐れ



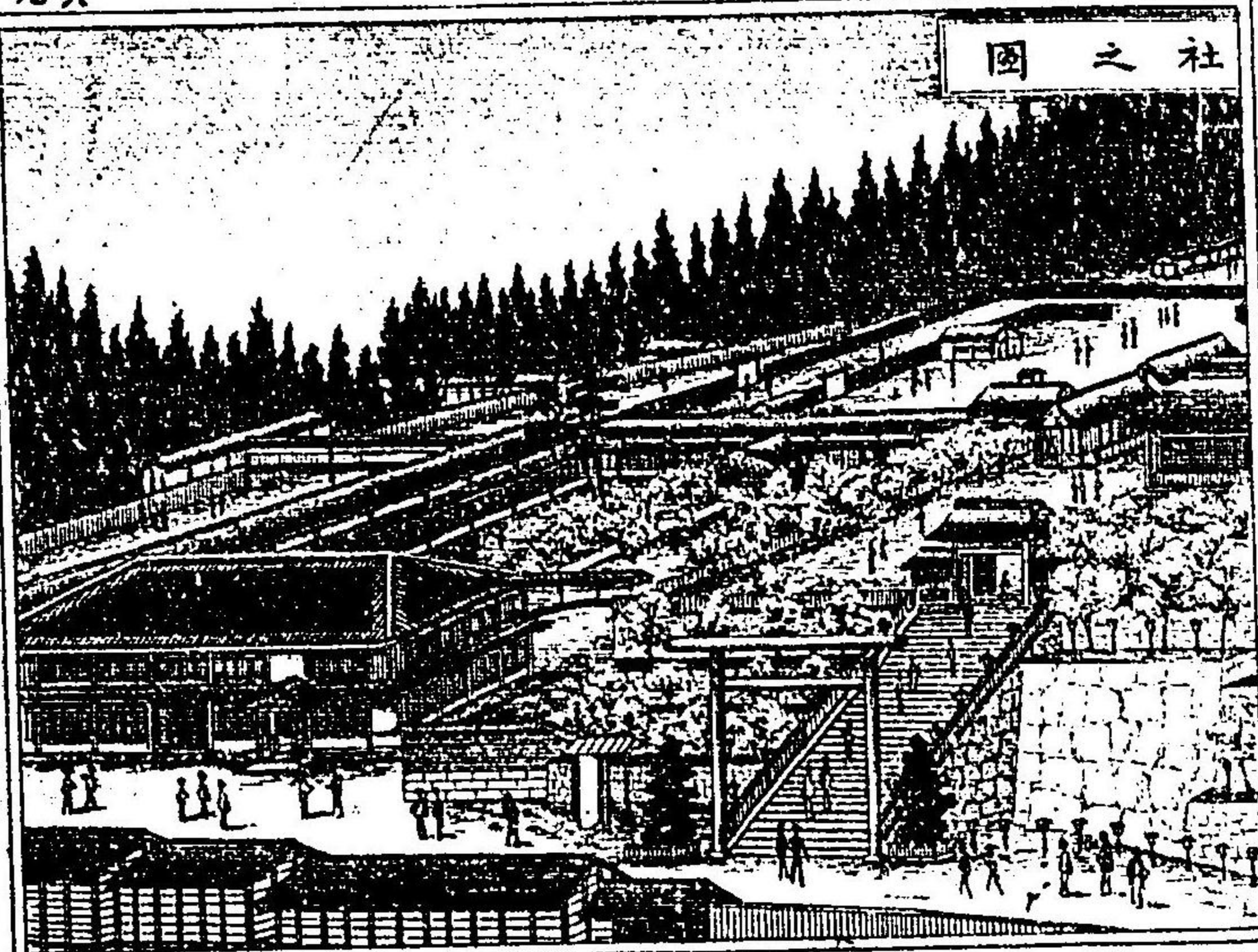
阪を降りば道平坦、又行松斷続枝を盡れ
 橋本を過れば新居なり、爰は今切てふ處あり
 白須賀より一里廿九町、濱名は旧と猪牙湖
 明應八年六月の海嘯、湖濱崩決し
 濱湖となるや、今切と呼び来る
 幕府茲に閣を居、旅客は便船を渡し、
 雖新后閣を放棄して、斷橋五十餘町架し
 通路の便を成就し、軌道を棧架せり
 此橋頭、又徘徊ひて、足下を眺れば、海淺く
 瀬穩、又衆魚游泳し、多少の漁舟は湖上、
 翠岫岸、又達なりて、其風光實、画の如し
 螺貝何時、拔機、濱師、浪語、太奇、生想、應、開、闢
 氣機、發、終、古、猶、存、今、載、名
 山崎蘭齋



十有餘町を過行は、兩道分てふ處あり
 此阡陌を右に岐る、此を後街道と呼ぶ
 是を進み行は三方原祝田郡田三箇目等の牧場故
 松葉生し原頭は富士山嶺を眺望す
 纒は茶圃一屋あり百里園と標號し
 園長は横田保氏とて専ら製茶に従事せり
 是より祝田村へ入る一橋あり尚行くと敷丁
 金指宿に到るなり、此地勢は溪谷より
 岡陵に向ひ兩側は教屋を建築し
 此郡中の邑なり、旅舎や茶店の設あり
 此地を出れば降り路は又九折の岐道あり
 井伊谷宮の賽路なり、
 井伊谷宮は官幣中社宗良親王を祀るの事なり

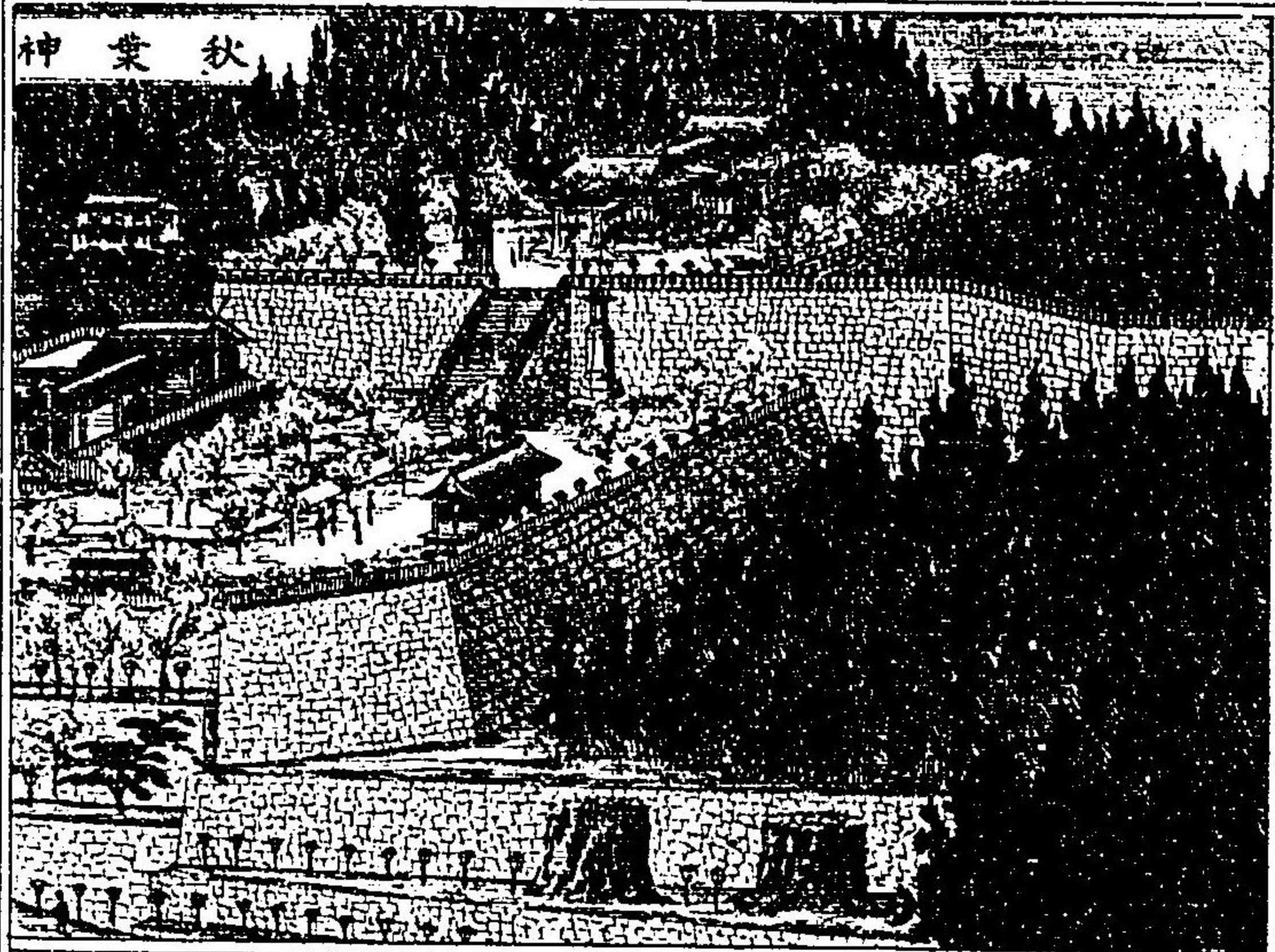


可勝齋三尺坊景
 明治四年又造營し、殿舎は頗る美麗なり
 井伊谷學校を打過て十町計り進は奥山の
 半僧坊の華表あり、尚十餘町も進行し
 山門の邊に達したり、濱松より道程六里余
 奥山方廣寺は禪刹聖鑑國師元孫開宗なり
 郷主朝藤是を建立す、國師在世の其項は
 千人有餘の僧侶が茲に留學する故に
 國師道場の名を傳ふ山内は天台山に似たり
 上欄に掲ぐる圖の如く堂舎莊嚴は杜堯の
 半僧坊の殿宇は開山堂と隣接す
 境地二十景の勝あり
 白崖 谷 鏡 巨
 一徑入初地鐘聲隔樹聞、禪房在何處蒼苔白於雲
 虎豹石 類 支 峯
 虎豹斷入突、不可向幽僻恠巖、無人傳異狀



社之園

秋葉山と著したり、
 秋葉神社は縣社にて、軒遇突智神を祭る
 明治六年寺を廢して、三尺坊を可睡齋と稱す
 此麓又天龍の流あり、乗船し下る迅速なり
 鳳來寺と到る山中又七瀑と云あり、
 ○可睡齋は上久野村禪利僧怒仲閉基なり
 旧は大院とあり、往昔徳川家康が
 戦争の際、敗軍し、此寺に入りて潛居し
 僧衣を着て、燻煙を睡る時、敵兵致し追迫し
 處々を探求し、これども徳川の策、欺かれ
 只山僧と誤看して、危急を遂免れり
 其后寺を可睡齋と云、此齋、三遠、駿、三國の
 曹洞宗の僧録と為す、近世秋葉寺轉稱して



秋葉神

奇石名羊腸、非比世途險、尋常詩畫徒、如何加渲染
 海龍窟、
 石橋橫碧澗、絕壁瀑泉懸、層層地靈罷、玉龍降九天
 抱成岩、寺西易堂
 空疎高自標、論說紛斷口、看君腹便々、選無一物有
 我昔遊錫、狼風光同此地、一溪水有聲、見葉紛々墜
 龍平甘寒、閱過幾千年、不作人間兩、山中長護泉
 文聖所遊、化東方亦有之、天台何用訪、且探真山奇
 靈仙洞、
 空洞和靈仙、叩之無一物、無端驚宿雲、徐自洞中出
 龜背橋、江島天江
 境深奇、百出人、訝入蓬瀛、兩岸歡無路、從驚皆行
 右、松久、艾舟編
 ○秋葉神社と到る路、濱松駅を北に岐れ
 五里千町にして、二俣村、二里十町を経て、光明山
 致、又大懸瀑は二流、為す一を雄岳瀑と云、高九
 一を雄岳瀑と云、高九、此地を出て、二里三十町

遠江國物産

石腦油 石灰 大豆 茄子 白甜瓜 乾薑 茶 蜜柑 楊梅 柿 松茸 推茸
 海苔 和布 石花菜 年魚 鯉 石斑魚 鱧 鱒 鯛 鰻 馬鮫 鰻
 木綿織 葛布 白砂糖 黒砂糖 納豆 葛粉 墨表 琉球墨表 蒲筵

東海道 金谷 日阪 掛川 家井 見附 濱松 舞阪 白須賀 三河二川
 三河路 濱松 草薺 賀町 三箇日村 三河嵩山村
 秋葉風来寺路 濱松 二俣村 光明山 秋葉山 西川村 石打 熊村 太平村
 三河嵩山

新所渡船路 濱松 堀留 新所村 上原 三河二川
 駿河上新田路 濱松 中泉 横須賀 相良 柏原村 上新田村 駿河藤枝
 信濃路 濱松 二俣村 雲名村 戸倉 曲渡 水窪 信濃和田
 同秋葉通 二俣村 光明山 秋葉山 平山村 水窪



三尺坊殿を建築し上欄は掲る圖の如く
 賽人常々絶ず賑へり、從井取より此の方二十
 ○濱松駅を東に進めば天龍川の板橋は音間
 鐵路は少し下流にて軌道の構造其堅固
 木曾川鉄橋は彷彿たり是を過れば三見附駅
 一里半 城井驛 三見附 掛川 駅等を経て
 日阪駅は佐夜中山の西麓に川阪屋とて
 旅舎あり近世新路を故に開鑿し馬車を通ず
 此山を越れば金谷駅小沢屋てふ旅宿あり
 鐵路は濱松より東横須賀相良等を経て
 金谷嶺又七百餘間の隧道を鑿空し
 山麓に沿ひ大井川 狹隘なる処に軌道の
 堅固美麗の橋を架す

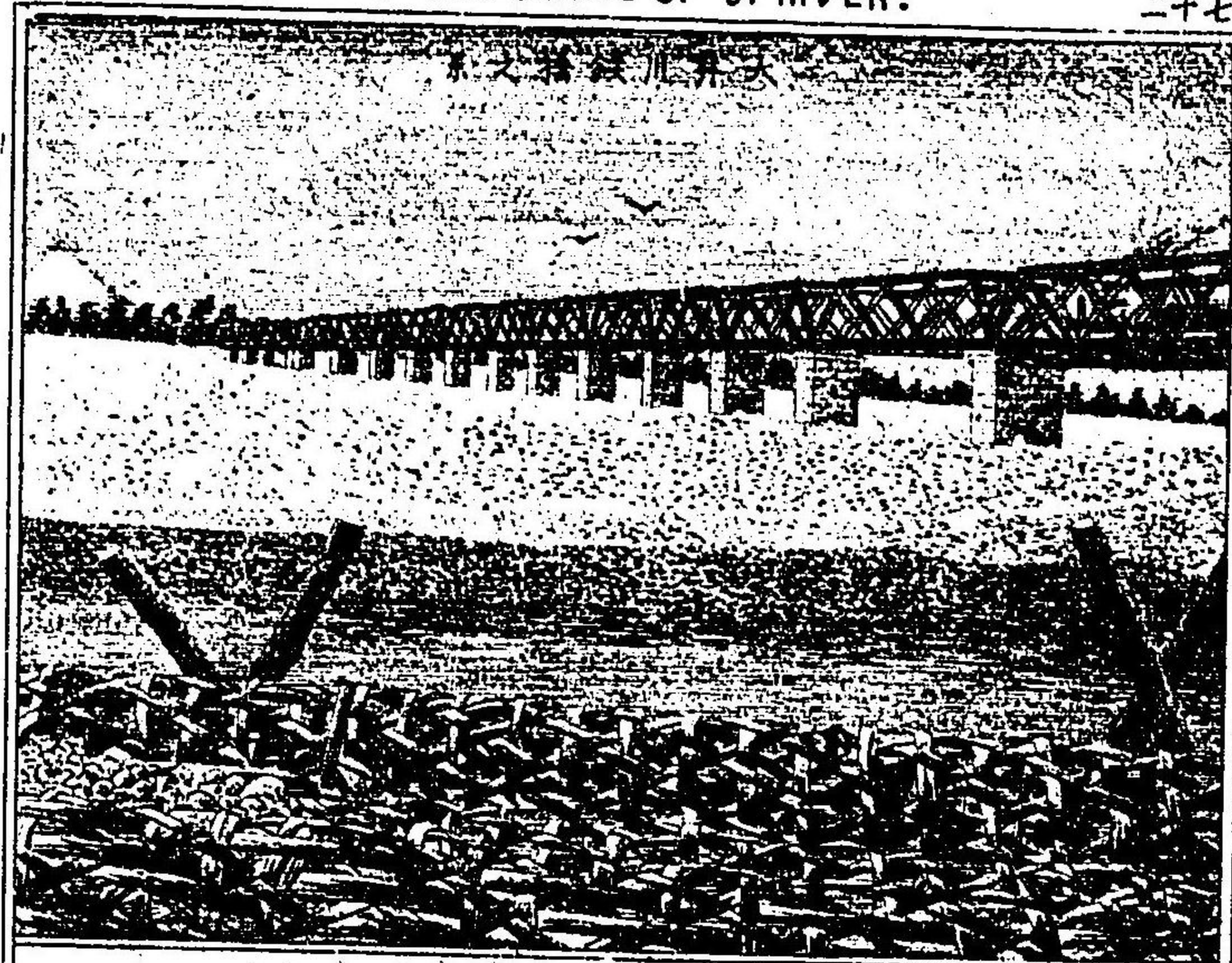


宇都谷隧道之景

○大堰川は駿河の坂、明日香川は有蓋せりと霖雨の頃は瀬瀬の交換することの早ければ鳴田とて河原と成る洪水の際は旅行の人金谷島田の脚を停め徒らう日を送りしも王政維新橋を架し近頃軌道を復架せり昔日の運壘や肩輿の困難も王化に忘れり實は昔譚となりしなり

大井の長橋打過て既車を進め二里計り藤枝岡部も通過して十石阪を越へ行は宇津の山路は向なり近世致し隧道三町計り鑿空し木材を圓擁して宛も礦穴に入る如し

○旧道は萬の細道とて勢語は出て名も高し湯谷口よりは阪の下、熱野権現の社側より

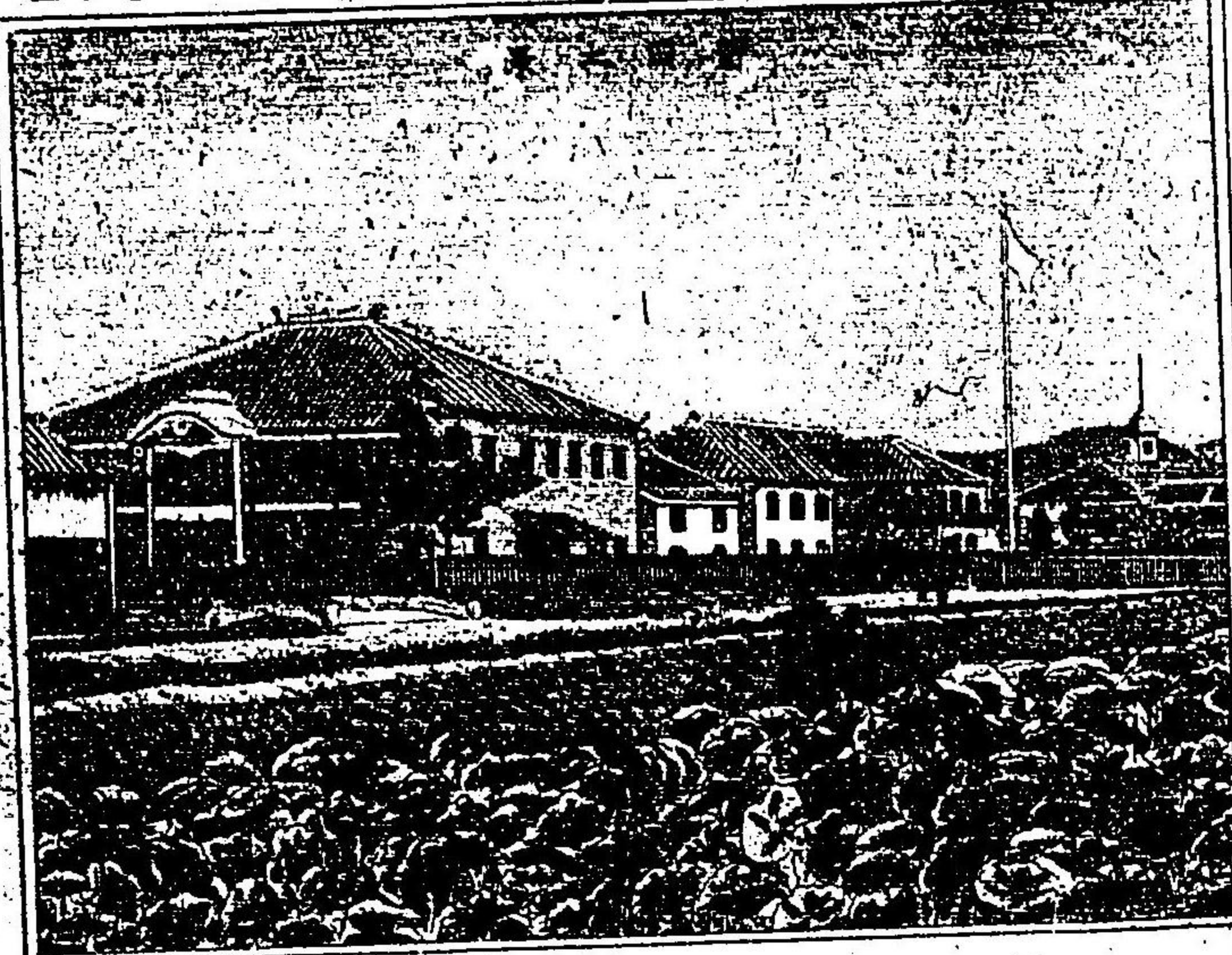


大井川鐵橋之景

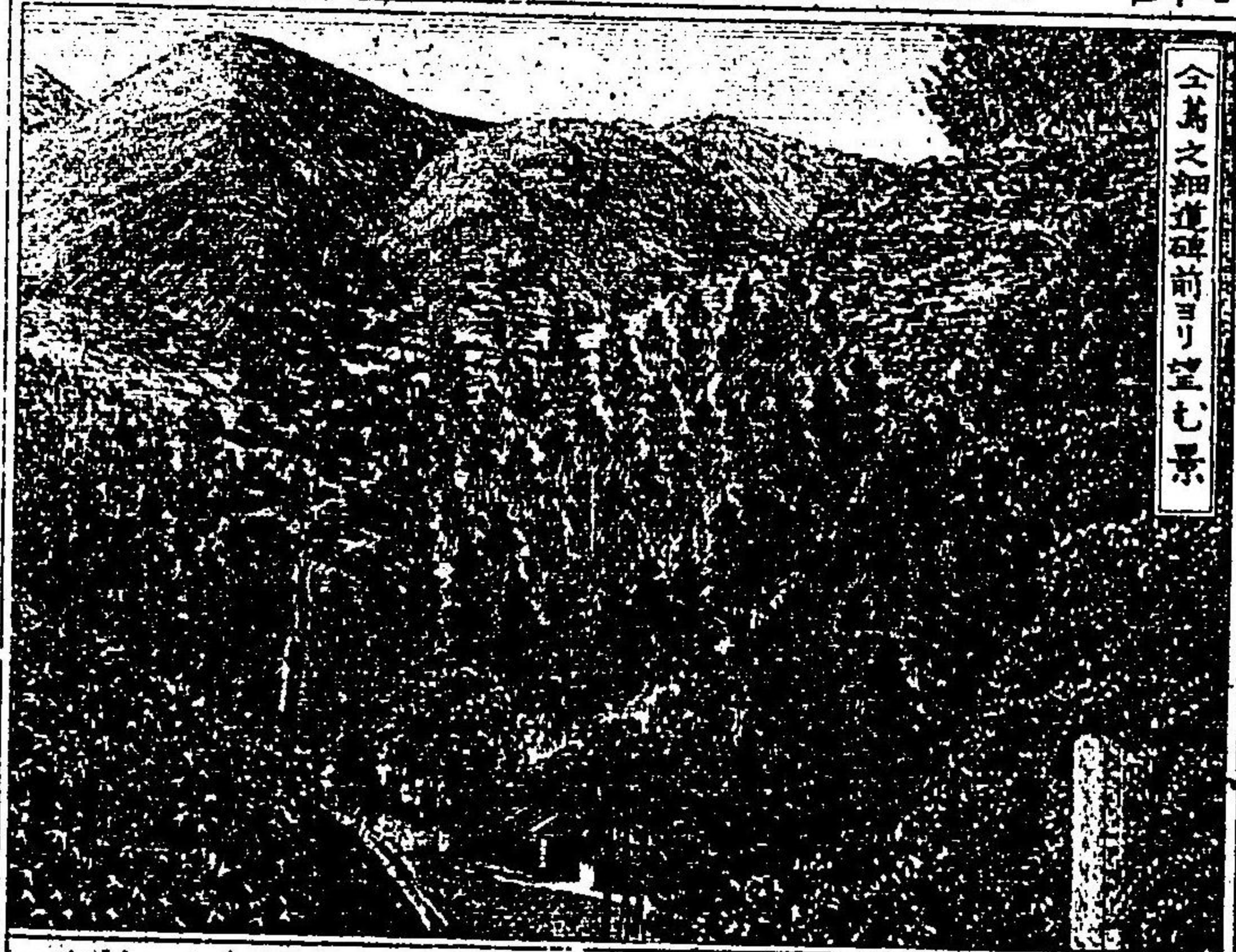
駿河國之部

此國東は相豆に連り西は遠江に隣接し北は甲斐信濃に巨り南は洋海に瀕面す東西九十八里にして南北の長さ十二里餘富岳北方に挺出し其山脈相豆に延き西北は信濃より来る富士川中央を貫流し其土性は黒礫にして茶及び麦作に宜し

甲信接壤の土地は立身と雖も霜墮て菽麥とても發育せず瀕海の地は平坦且つ漁塩に利あり本州七郡とす志太益津 有度 安部 庵原 富士 駿東 等にして名邑は 田中 焼津 清水 沼津等なり人口は三十六万千百餘

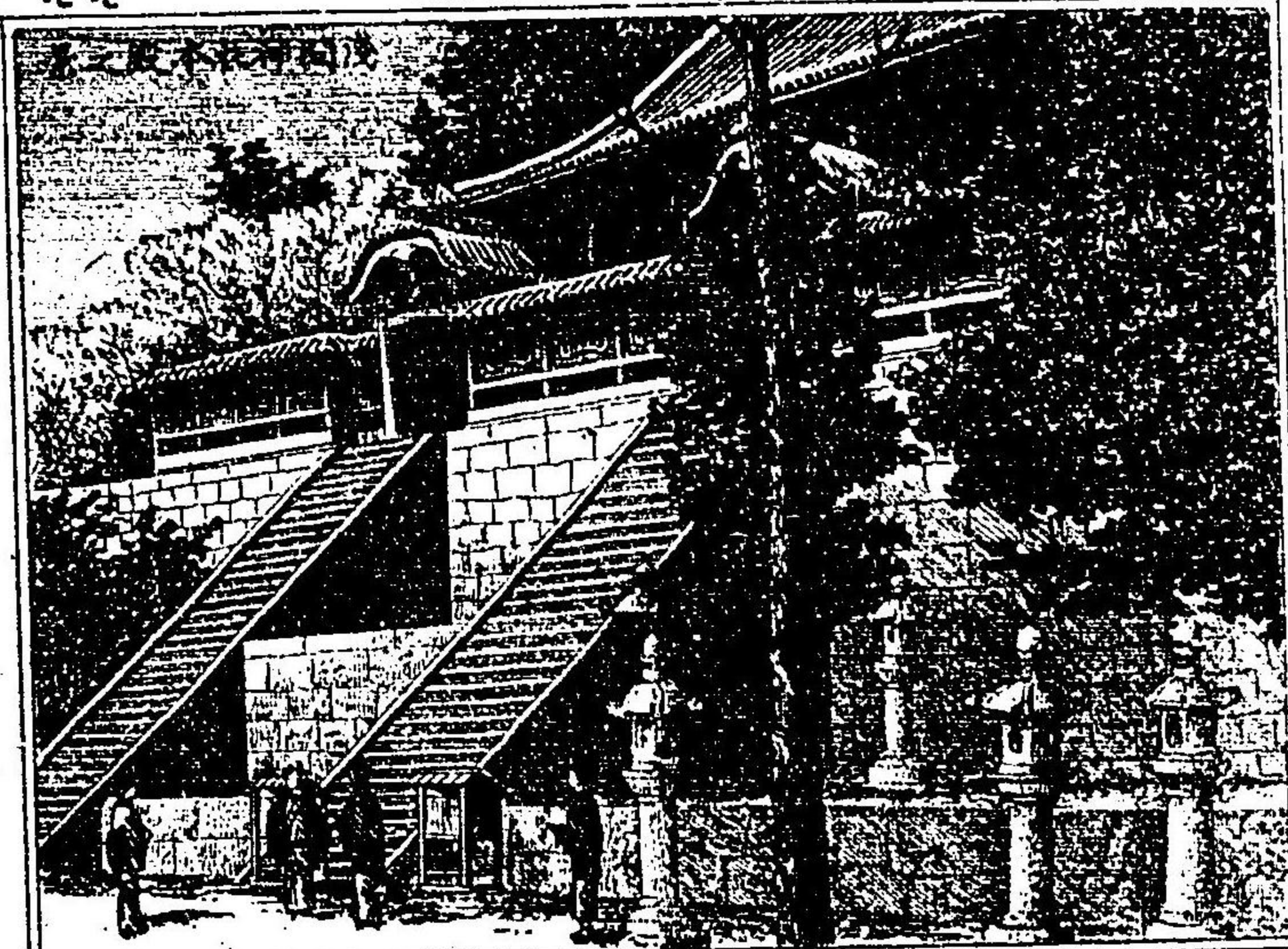


山中回首費吟申遺愛萬楓秋又春今古冥
 名手鏡平歌後更無人 羅山
 是より鞍子を過て一里半安部川に到る
 安部川橋は長三間靜岡縣勸助町および
 手越村の間架す橋に際して茶店あり
 富士屋と呼ぶ橋に倚て茶を喫し橋畔を
 眺れば清流を前して富士峯橋東に對す
 阿部奔流鴨綠濃長橋臨岸為虹窓峡中別有
 芙蓉面直此雲間白雪峰 田文哉
 うつろ名阿部門の富士山 如松

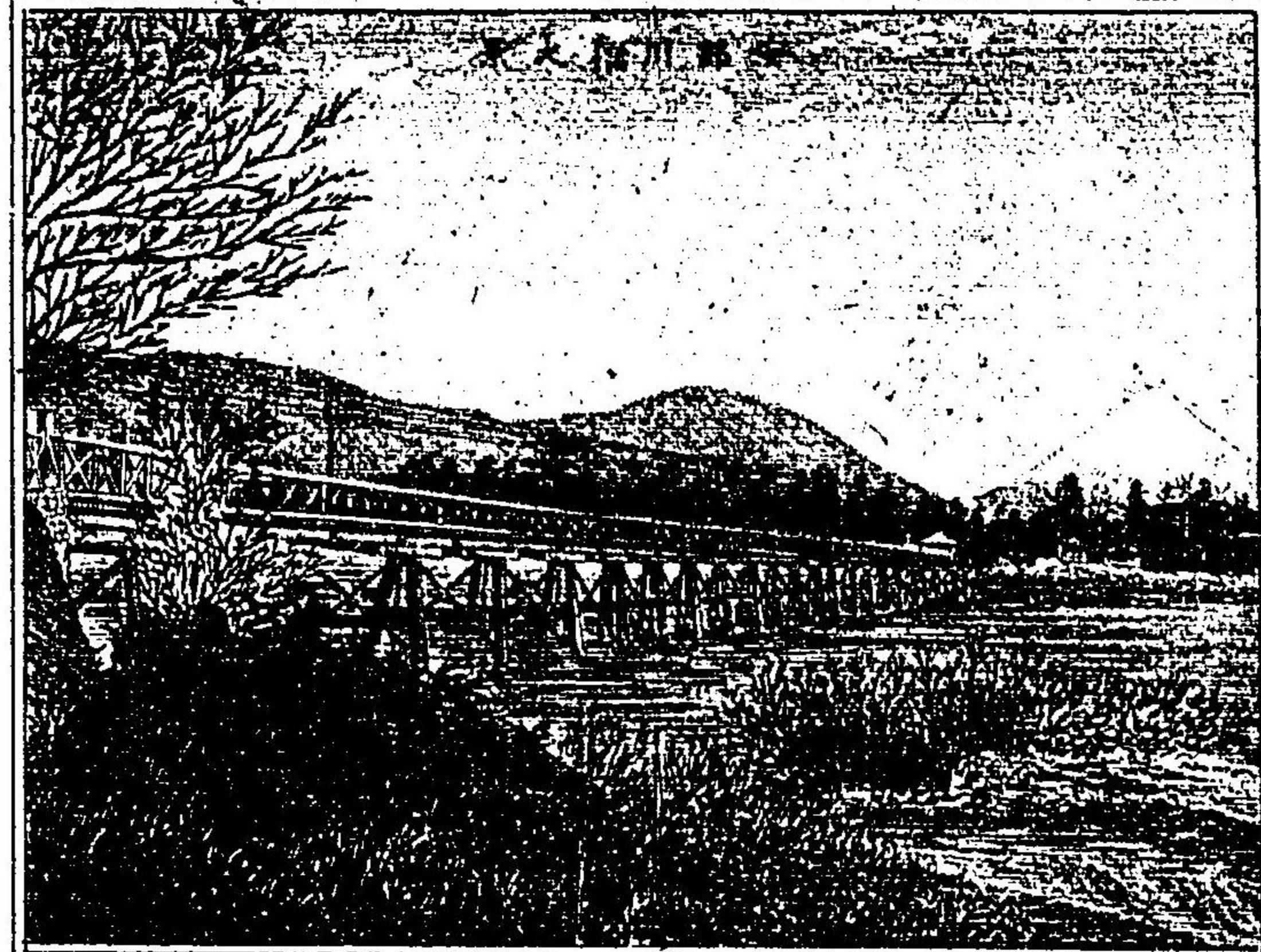


今基之細道前より望む景

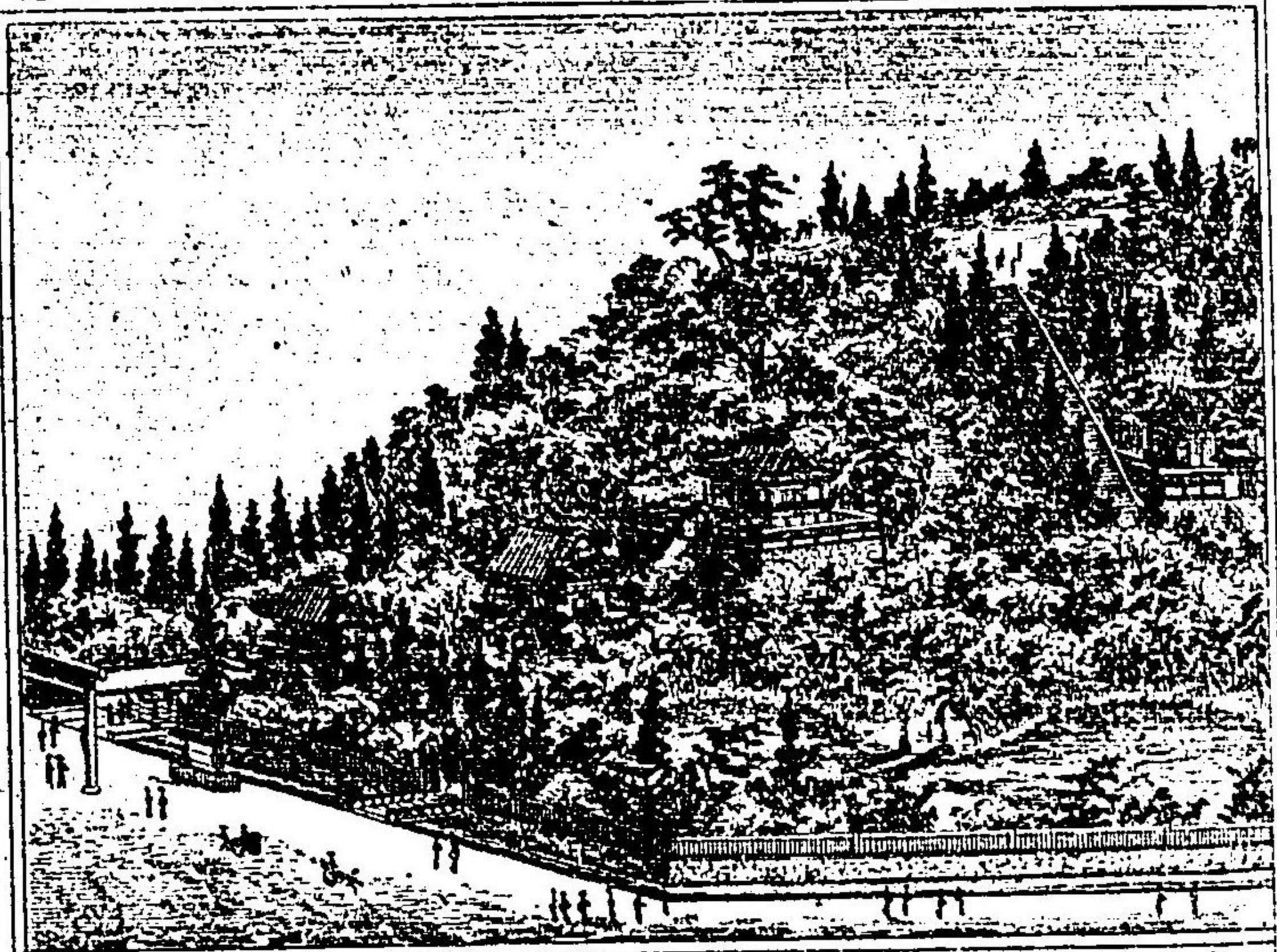
右に岐れし細徑あり溪川の流れ右に治り
 尤も折て柱えの橋五六處も渡りつゝ
 阪路をかれば徑廻り山は稍深く幽寂な
 茅萩篠竹繁茂と藤蔓や葛かづら
 脚まとい踏ふ力なく荆棘袂を停めたり
 道者は鎌を携へ先豆莢を雉ぎ川つゝも
 漸次登る山徑を嵯峨しく進は平地あり
 是を神社の原と謂ふ本原神社の古蹟なり
 山頂に到れば山郭は依然として伐木の
 音も幽か又聞へたり陶潛が桃花源に到る
 愉快も斯やらんまた東に降る阪路は
 砂礫の磊落として溪澗に土橋を架たり
 此を渡れば東麓の平橋として官道なり



流車は是より東行し官道より沿て蒲原や
 富士川鉄橋は遠しなり
 浅間神社は郷社にて富士浅間の新宮なり
 社殿二所あり祭りたり一社は木花開耶姫
 惣社は火也貴命なり垂仁天皇三年に建つ
 當社の美麗なる内國日光を一等とし
 浅間神社を二等とす背後の山は青葉岡
 賤機山と稱號し古人の詠も亦多し
 例祭は四月初申の日余葦律の祭日と遇ひ
 静岡官道より左に岐む北は往こと八町計り
 氏地は九て簷端より剪彩花を盛に粧ひて
 灯籠多く掲げたり境地は最も廣くして
 此日賽人頗る雜沓し泉池の邊に碑石あり



愚按此橋は乾より坤位に架す地勢なり
 此川金山石を産す千手煖車蹟手越を存
 曾我五郎が籠せし虎少将も此地の人
 墳墓は相州大磯に在り
 静岡は旧駿府と謂ひ府中は古の國府なり
 市街の廣袤の東西は二十九町南北十五町
 縣廳は追手町に在り商家旅舎軒を並ぶ
 就中より東方屋は客室や浴場美麗なり
 四方の貨物も輻輳し郵便電信局は傳馬町
 二丁目は藝娯の巢窟戯場の如き酒樓あり
 土地は頗る繁華なり古昔東京人移住して
 其風姿ありと虽ども土着人舊事を殊守し
 開明進歩遅たり此に停車場の設あり



我國の風装を為す、履歴は方今出板の
 日本光輝の詳記せり、西洋編全一冊挿圖千枚、廿二
 特別二十五錢郵税二十錢
 秋風織錦賊機山亦不安排不寺開
 應是天公妙工手秋風織錦賊機山
 山崎關齋
 焼津神社は静岡より南方行程三里に在り
 郷社として祭神は日本武尊吉備武彦命
 此地は尊東征の際賊徒原野に火を放ち
 尊を害せんと策し、火が盛んとして危陰り
 葦原を以て火を拂ひ、賊を焚除し、給古蹟
 其履歴は人口に膾炙す、山崎關齋時
 鎌倉城裏、一旦所攻、美職正五首町、
 戒橋夫
 山崎關齋

圖之神問淺



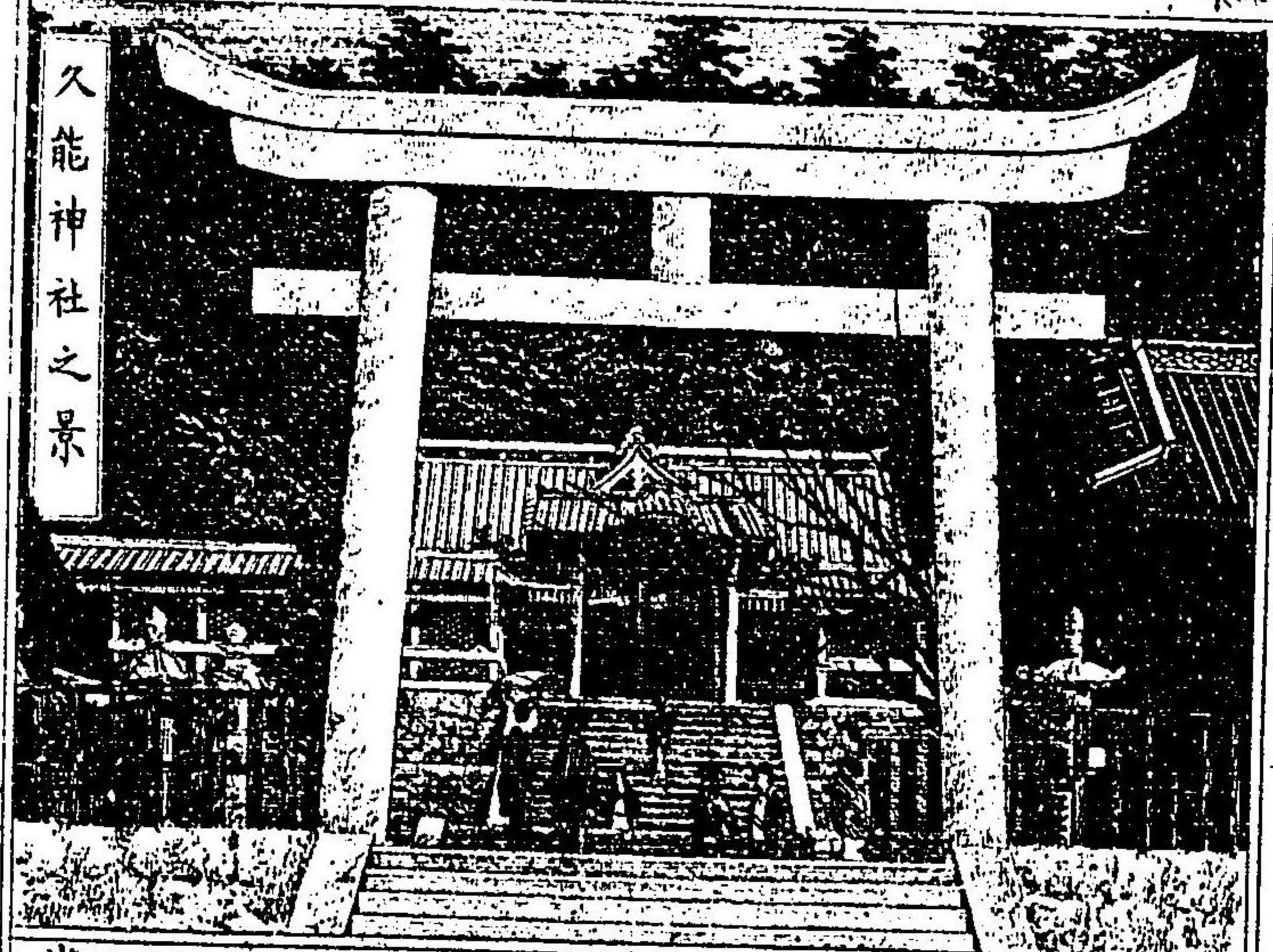
上欄に掲ぐ圖の如く、此日寶鏡の轉寫して
 山田長政の肖像や、軍艦圖する軸もあり
 蘭人齋の象の画圖、奇巧を賞す、連獅子は
 甚五郎の彫刺とかや
 山田長政と謂しもの、其性剛愎不羈として
 四方を遊寓しました、尚松は身を委囑し
 交趾や臺灣を渡り、後復運羅に入る
 慶長天和の間なり、寛永年中長政は
 暹羅に在て戦功あり、其國の婿となる
 封土を領す折から、此地の行商、松太田
 兩人彼地を航海し、國主長政を謁見し
 貿易場を開墾し、日本町の地を存す
 其時神社を囑納す、戦艦画圖の匾額は

久能山ヨリ富士眺望

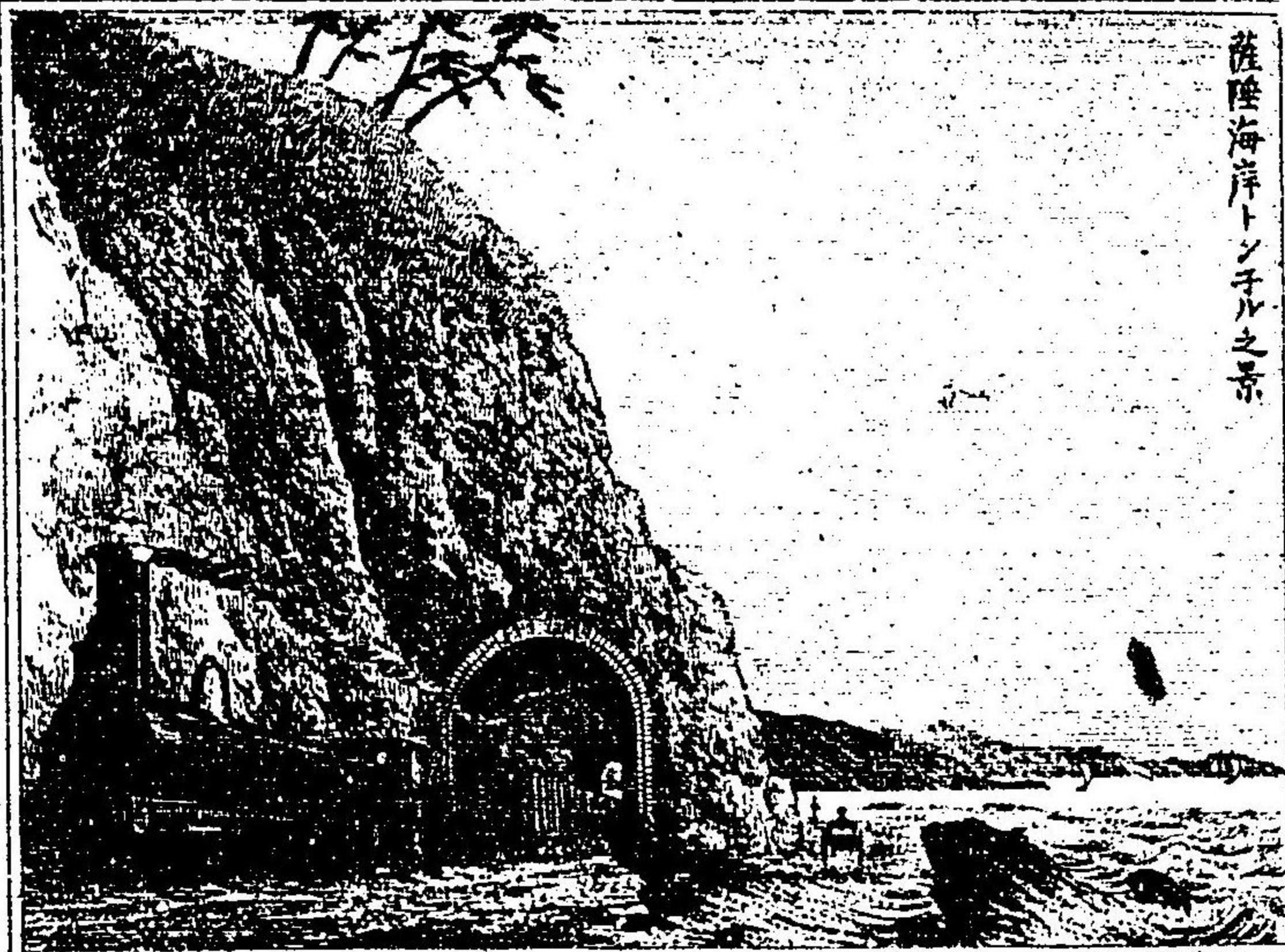


田子の浦端を滑舟も、松梢と走るに彷彿たり
 清水の湾港賑々と、帆橋お目く林立し
 荒磯波上青藻刈る、童子や鮑とる海士
 潮汲む賤女が業ひも、世を辛く送りたり
 快晴美穂夕陽天多ふ景風留旅鞆、西顧久能色空
 花望不盡雲花鮮田子浦上漁艇清見関中波磯烟
 恰是神遊遊化地幾千松樹幾千年 關齋
 文風に田子の浦波もよもよも下かきよな秋の夜の日契沖
 音にまよはせられて田子の浦を渡る日まきき宣長
 あやがいの隔とて春の霞うき春の田子の浦浪春度
 色づくぬ友やうらなね三保のまつ 大坂 吾醉
 紅葉して羽衣りくや松の嵩
 三保より江尻を越て 興津より行程を里半

久能神社之景



久能神社は職社にて、江尻駅を距る二十町
 徳川家康を祭りたり、山は海岸に孤立して
 眺望は富士の大嶽や愛鷹山や箱根嶺
 廢陸岸や清見寺 興津の濱に連りて
 漁車の往復烟を焚たり、三保の松林濃か
 海山風光の勝地なり、清水港は久能山より
 八町計り是より廿町便船し三保村に到る
 御徳神社は郷社にて、三保津姫大己貴神
 三保浦は吾郷路も有名の名勝にして
 久能及び宇度濱の海岸に連る岬島なり
 洲濱は廣狹長短し、翠松数千對慈たり
 湖風の為は枝を垂れ美人粧黛視る如く
 岸頭翠岬列なりて、富士の高峰聳立し

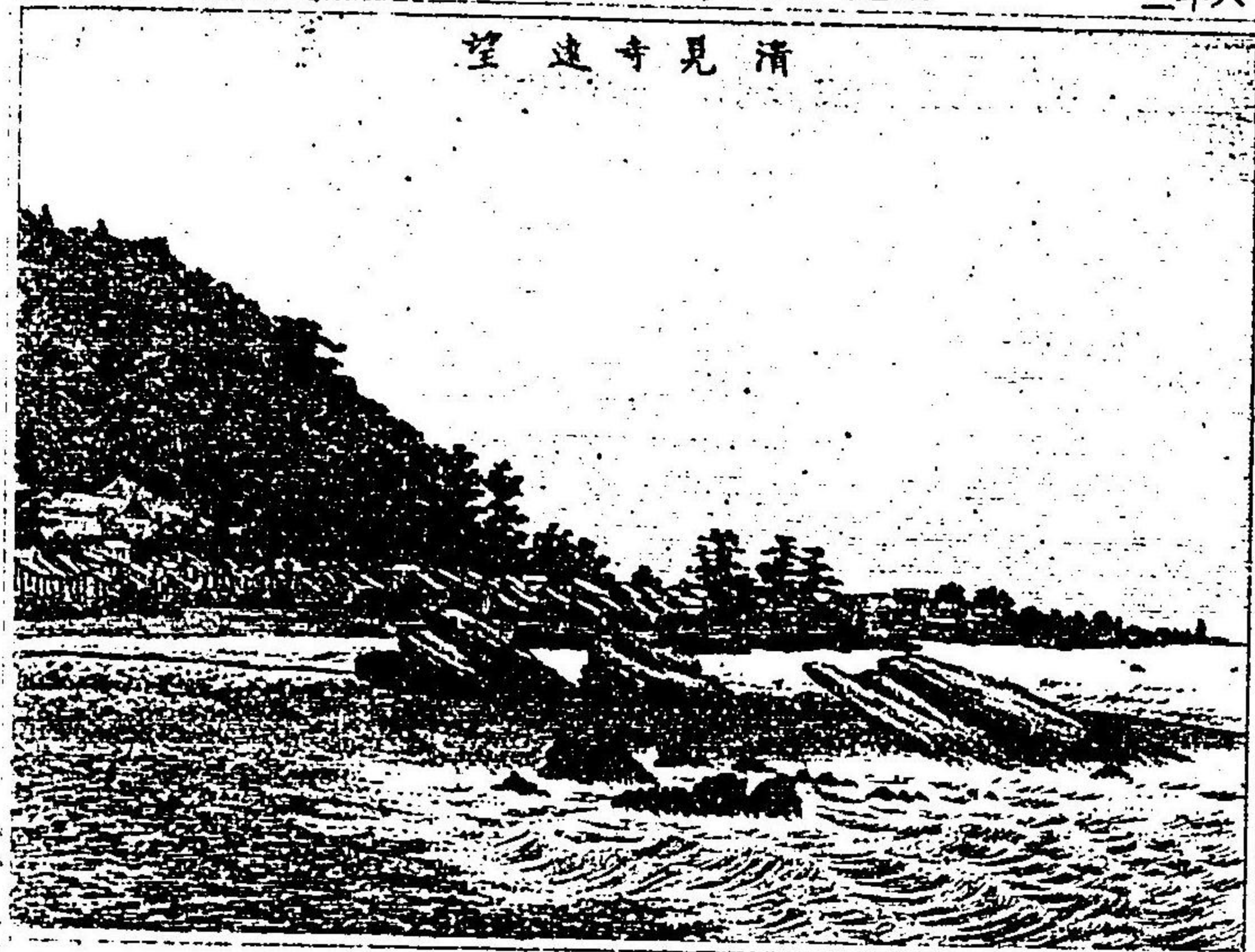


薩陸海岸トンネル之景

不知何處船萬里逐風烟極目沖津上
滔々水拍天 山崎閣齋

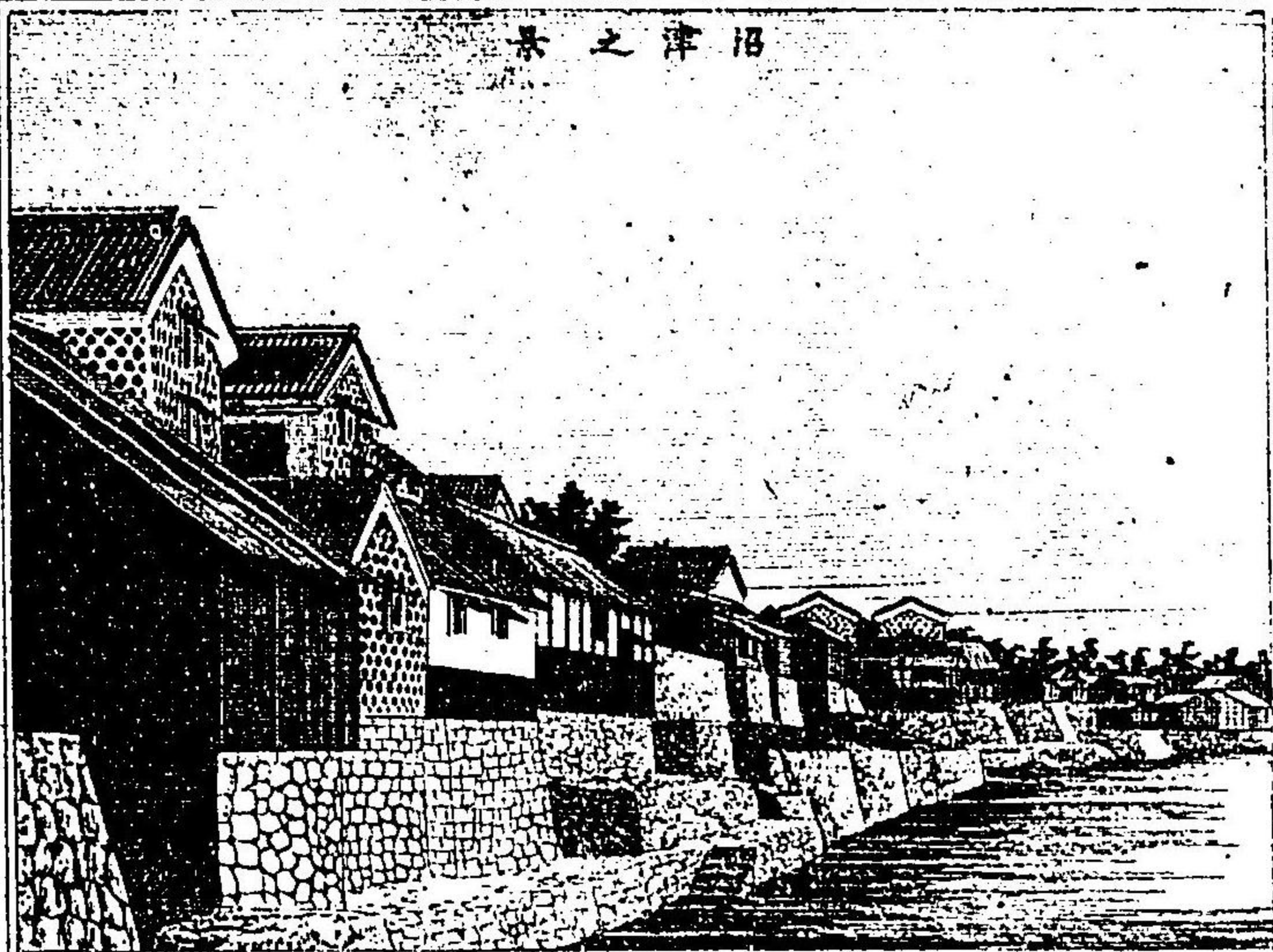
又るゆゑに富士白雲明くて地をくぐり原の浦波難曉
此より薩陸海岸沿ひ由井驛に到る二里十二町
山嶺峻々と海へ聳へ、浪際岩礁參差峙ちて
巨巖隧道を鑿空して、流車往復の軌道あり
倉澤下處に茶店あり、榮螺鮑の調理あり
由井より蒲原に到る、此道程ハ三拾四丁なり
蒲原驛ハ富士川に瀕し、鉄橋ハ岩淵松岡の間
吉原驛の南を東走し、原驛を経て沼津に至る
富士川ハ官道第一の、大河水勢急險にして
河幅水の増減に因り、際限せざれども凡そ拾町
前ハ徳川氏琉盤し、甲斐に於る水路を開き

清見寺望



水口屋方ハ旅籠して朝とく出て清見寺
境地向ひ磴道を、登る地下ハ隧道にて
流車の往復乗々あり、石階盡て寺門あり
清見寺ハ古き禪刹、開宗ハ未だ知れども
足利尊氏再建し、僧明元を中宗とす
寺前ハ江海渺々と、清月禪心を照したり
背ハ山嶺峻々として、庭中に九面の暴あり
鐘樓の傍に碑面あり、榎本武陽君の書跡
門下ハ塩濱にして、時昔より觀月の勝地
清見瀨を眺むれば、尤ハ富士拳拳聳立し
愛鷹山や伊豆の岬、海濤速く靄々と
右ハ三保の松林群立、多少の白帆速く
旭日輝々と波を照たり

景之津沼

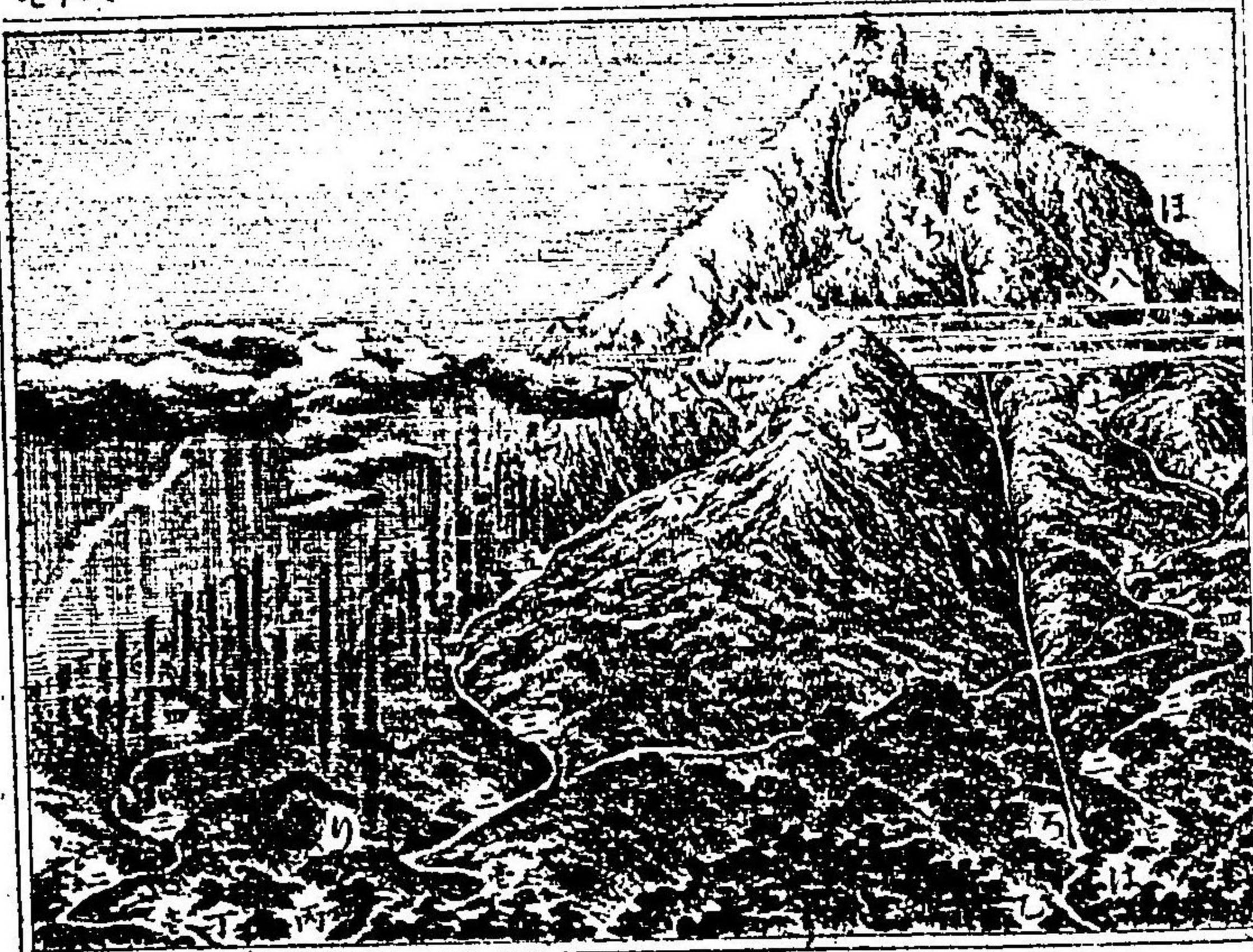


秋冷の氣候を感じ、茲は冬裝束を借り
 行厨と調へ道者を備へ山上六風雨の定期も
 兼笠を携へ杖を持ち麓より嶺頭に至る迄
 道標を建て毎驛に旅舎の設ありま
 第一驛と砂振と呼ぶ山腹に向の砂礫中へ
 基礎を定る處は、刺さく風雨を猛烈に
 家屋を作る便なく、木材を組建置如く
 屋上ハ砂礫に埋没志、完も穴居如くあり
 店頭に販ぐ物品は、甘酒焼酒や草鞋等
 第一驛より喬木ハ少々散見するのみ
 樹木ハ暴風に揉れ、まづ積雪に壓せられ
 上ハ伸びば伏倒れ、地ハ匂ひて矮より
 五驛ハ八驛に至てハ、行路ハ稍峻峻

景之川士富



富嶽ハ富士郡に位して、駿甲相の三國に跨り
 皇國第一等の高嶺あり、其直立海面を距ること
 を萬尺千三百七拾尺、其形も四面皆同じ
 四季に雪を載きて、十三州より此を觀る
 舊と長年常噴火山、登山の路ハ三條あり
 富士川及び吉原驛、須山を経て八里餘
 甲州吉田口より登る、其行程ハ拾里餘あり
 旅車の軌道ハ御殿場停車場の設あり此より
 清野を経て須走の、其道程ハ二里十三丁
 行路ハ砂礫磊落し、是より頂上ハ達五里
 須走より馬返に到る、二里餘の其行路ハ
 稍平坦に松樹鬱々し、馬返宿より路險阻
 馬返の宿に一泊し、此地ハ盛暑と雖ど



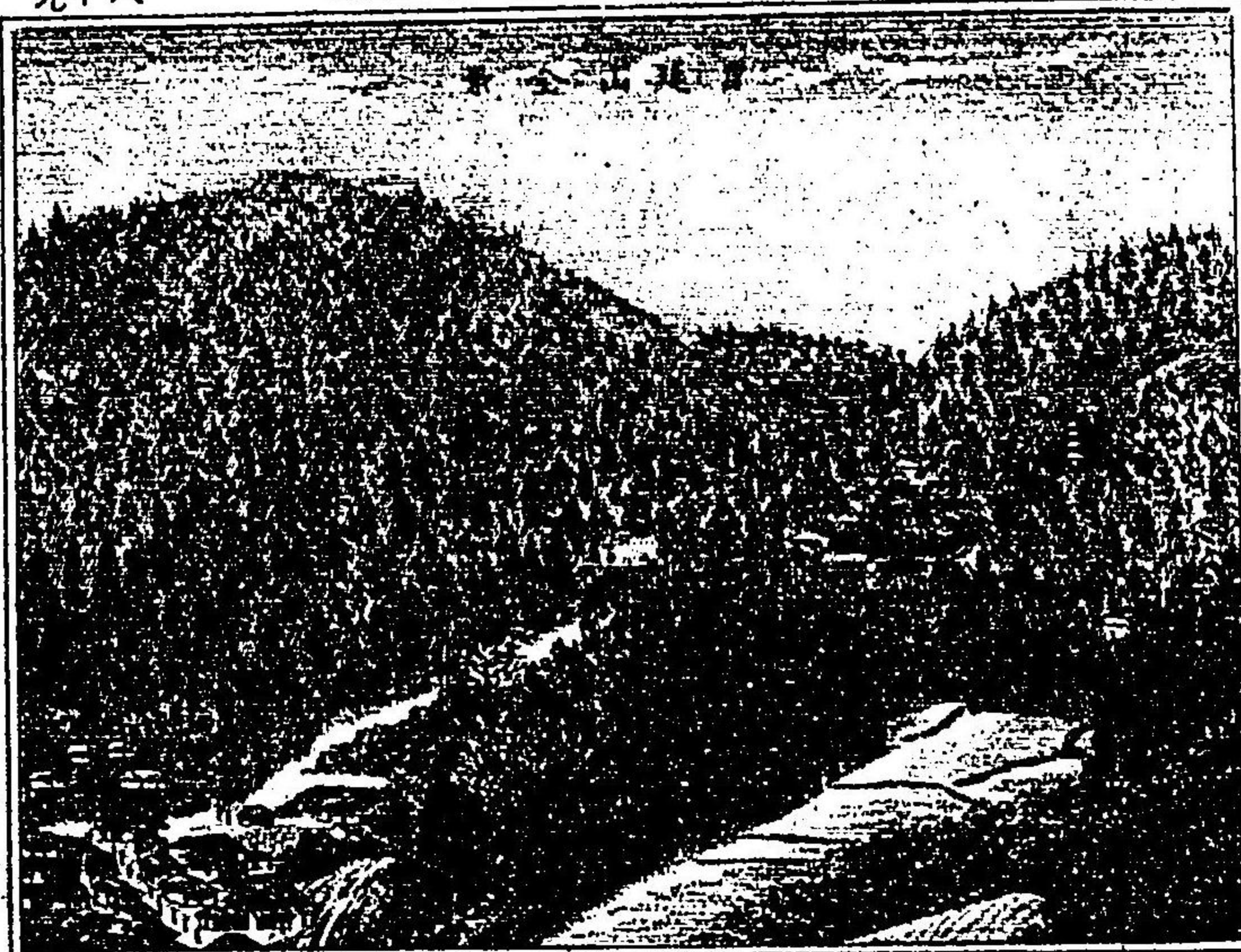
鶴駕高懸何所短程又列白雲遠來憶不覺地球大
 放眼真知天體圓絕頂寒風無育陰暉積雪百年
 腰間我有一瓢酒欲吞玉皇香案前 小野湖山
 日花及及ぬもの末路いかりも高きふの白雪大綱
 お困るのみそふび下しよの峯さ暮の暉は霞門
 東路をえり春の影雪をまらるふの芝山 千薩
 蒲原驛に近世新路あり五貫島に渡り鈴川や
 今井舊吉原打過て原驛に至る行程ハ
 本道より一里餘も健しまた原より沼津に至る
 其道程ハ一里二拾丁沼津驛より三島ハ十六丁
 黄瀬川ハ往昔親朝が蓋經が遭遇せし古蹟
 是れ駿豆の國境にして流車ハ沼津より北走し
 御殿場を経て相州に入る

- 富士山之圖
- | | |
|---|-----|
| 甲 | 吉田口 |
| 乙 | 砂走口 |
| 丙 | 須山口 |
| 下 | 大宮口 |
| 戊 | 小富士 |
| 巳 | 寶永山 |
| 庚 | 剣ヶ峯 |
| 一 | 一合目 |
| 二 | 二合目 |
| 三 | 三合目 |
| 四 | 四合目 |
| 五 | 五合目 |
| 六 | 六合目 |
| 七 | 七合目 |
| 八 | 八合目 |
| 九 | 九合目 |



い鳴澤
 ろ砂フルイ
 は馬カヘシ
 に砂ミチ
 ほ胸突
 へ石室
 こ風除
 ちスリミチ
 り人穴

冷氣も愈増加して、恰も嚴冬に歩す如く
 昨日の苦熱の夢を、肌膚ハ頗る寒くあり
 旅舎に火酒を飲み微酔を取て一泊し
 翌朝嶺頭上峯登り先下界を眺むれば
 空際として天地一色山海澤池を辨せず
 故に巨大の孔竇あり時として水を湛しり
 周圍に嶺峯分裂し清泉あり銀明水と呼
 雲霧快晴する時と麓に列する山岳ハ
 宛も蟻蟻垣の如く海面に基布法する
 鳥嶼ハ島の浮む如く、歸路ハ直下急峻ハ
 杖を背後に衝き建て砂礫と共に轉降し
 或ハ尻に基を縛附け急流と降し待佛より
 登り果り迅速あり



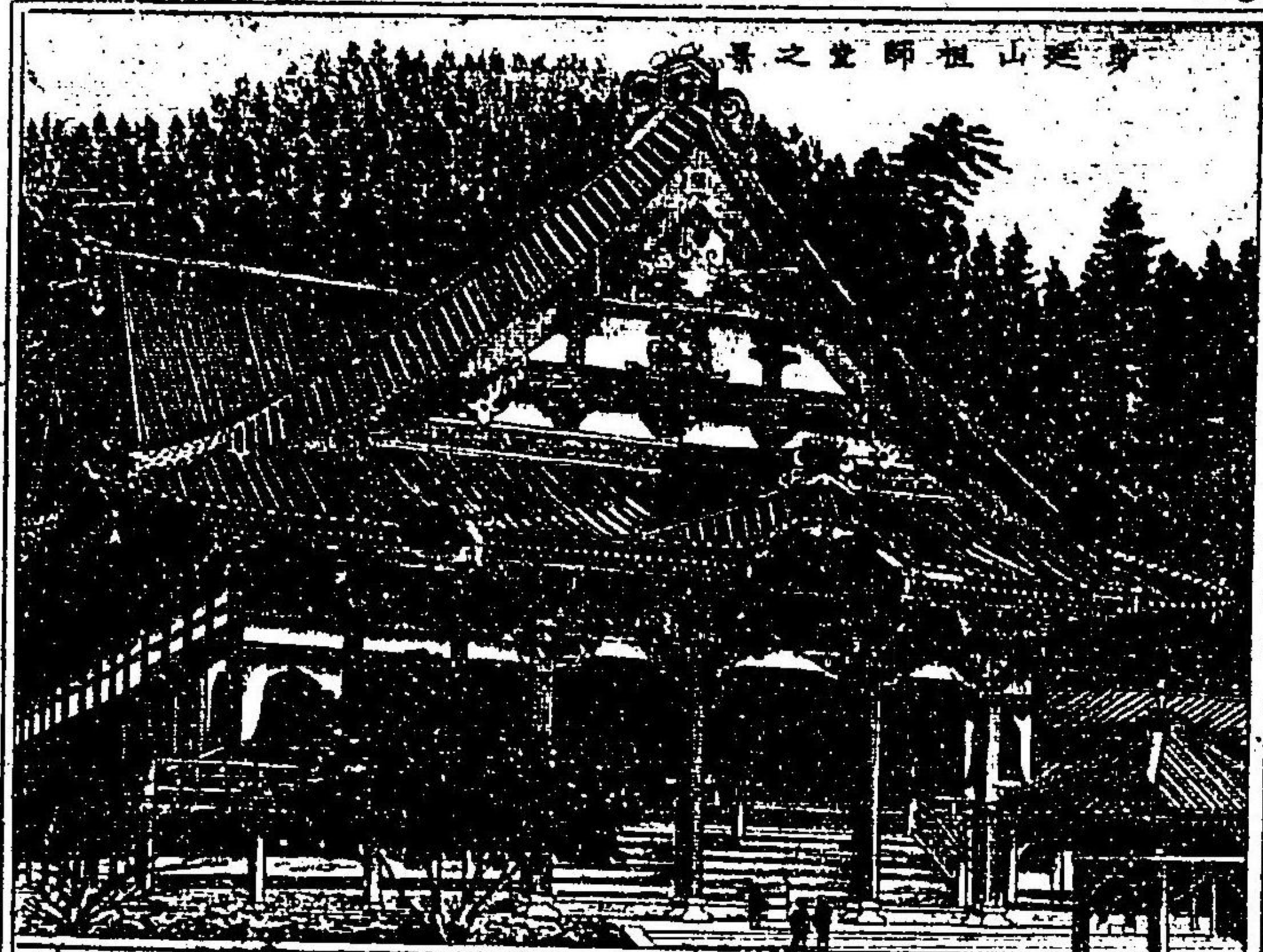
甲斐國之部
 本邦東へ相模小隣り、西南へ駿河に接し、北に武藏信濃に連る。東西凡そ二拾五里、南北廣袤一拾四里。其地勢ハ富士峯の背後に地を占めて、山岳四方小聳立ち、中央平坦に美田多く、材木蠶桑に富たり。諸水富士川に會志、南流して駿河に流る。桂川獨り山中湖を發し、東流して相模に入る。下流を馬八川と謂ふ。國中四郡不分配す。都留、山梨、八代、巨摩、名邑を、谷村、上野原、下吉田、市川、鯉澤等なり。人口ハ三拾六萬三千四百餘。其風俗ハ慷慨を去て、開明進歩に進みたり。



駿河國物産
 黒水晶、馬蹄石、富士石、山葵、毒荏、藍、茶、楮、紙、三椏、松露、椎茸、山椒、漬梨、江豚、鮎干、鮎鮫、馬、志保細工、全驛路
 東海道 沼津一里、原三里、吉原六里、蒲原一里、由比二里、興津一里、江尻二里、静岡一里、丸子二里、岡部一里、藤枝一里、島田一里、遠江金谷
 甲斐路 興津一里、小島村、韮原村、信甲斐萬沢、同列路 沼津一里、佐野村、御殿場村、須走村、相模足柄路 沼津一里、佐野村、御殿場村、竹下村、相模、相模、夫倉沢村



白糸の滝ハ原村不在リ
 幅七拾間芝川不流れ
 ○穴原ハ甲斐の國坂
 萬澤驛や南部の宿
 身延山の東麓に到ル
 破木井に旅舎あり
 久遠寺ハ法華宗にして
 文永十年南部實長ガ
 僧日蓮を招待し
 祖師も茲に居住して
 此も久遠寺と號たり
 今の地に移去造營也
 祖師ガ山之記に云
 其高き八丈七尺にして
 富士川に入る六里餘
 是を過れば水州の
 大野村等も打過きて
 此道程ハ六里なり
 山門に瀕して繁華なり
 甲府を距る七里餘
 佐渡島の配所より
 西谷に草庵を設け
 弘安四年寺を建つ
 文明六年十世日朝ガ
 身延の地たりや



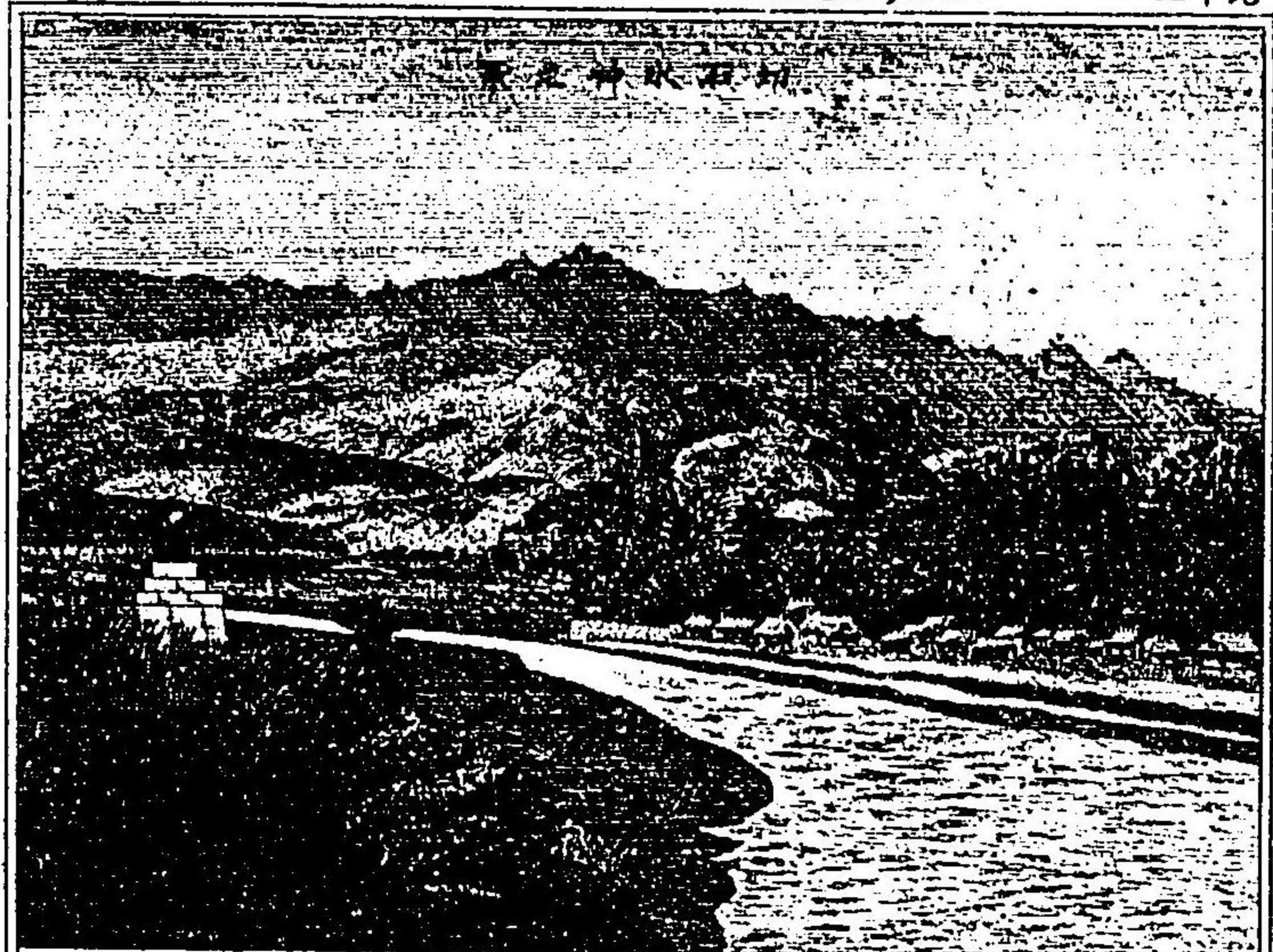
水州を廻覽せんと
 路を北に岐し始め
 此行程ハ四里計リ
 賽せんと東に杖を引
 法華宗にして境地も
 富士山嶺に對またり
 茲に僧元政ガ碑あり
 吾橋路や興津驛より
 小島村や穴原の宿
 是より富士淺間社に
 内房村ハ本城寺あり
 富士川ハ瀕面して
 富士川小釣橋を架け
 山崖高きこと二十尋
 藤蔓を用て織綴リ
 其長さ三拾餘間に
 橋中只板二枚を敷く
 里人渡るも熟すれど
 大宮郷に淺間社あり
 水花開耶姫を祭る
 淺間神社ハ國幣中社



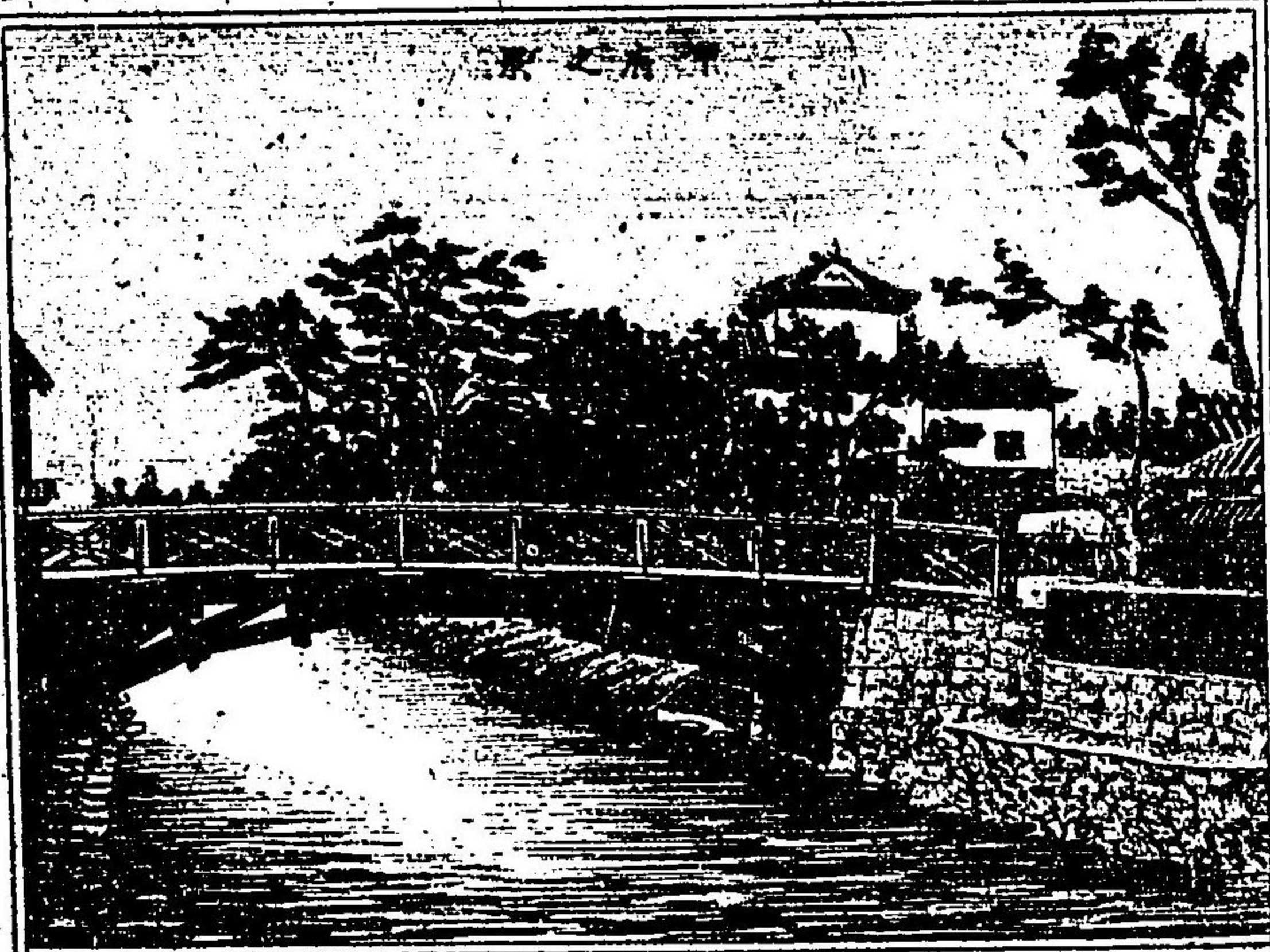
御嶽新道
 在に史に記す所の御嶽を越るに
 身延山を出て二里許り坂路を行は赤沢村に
 白紙瀑あり其高さ十丈余にして幅三間
 其水源は奥池に發し瀑の下流を菊川と云
 奥院に到る六十八町追分より西谷に降る
 途中に祖師の高座石此他舊跡多し畧す
 七面山に到り再び山麓破木井に立戻り
 下山道に到る一里余夫より富士川に到り
 切石水神を右に觀る又懸沢より乗船して
 下る時は身延に到る六里の間傾刻に急す
 急流なる故舟行は甚だ危険とす然とん

望父母陵斯高

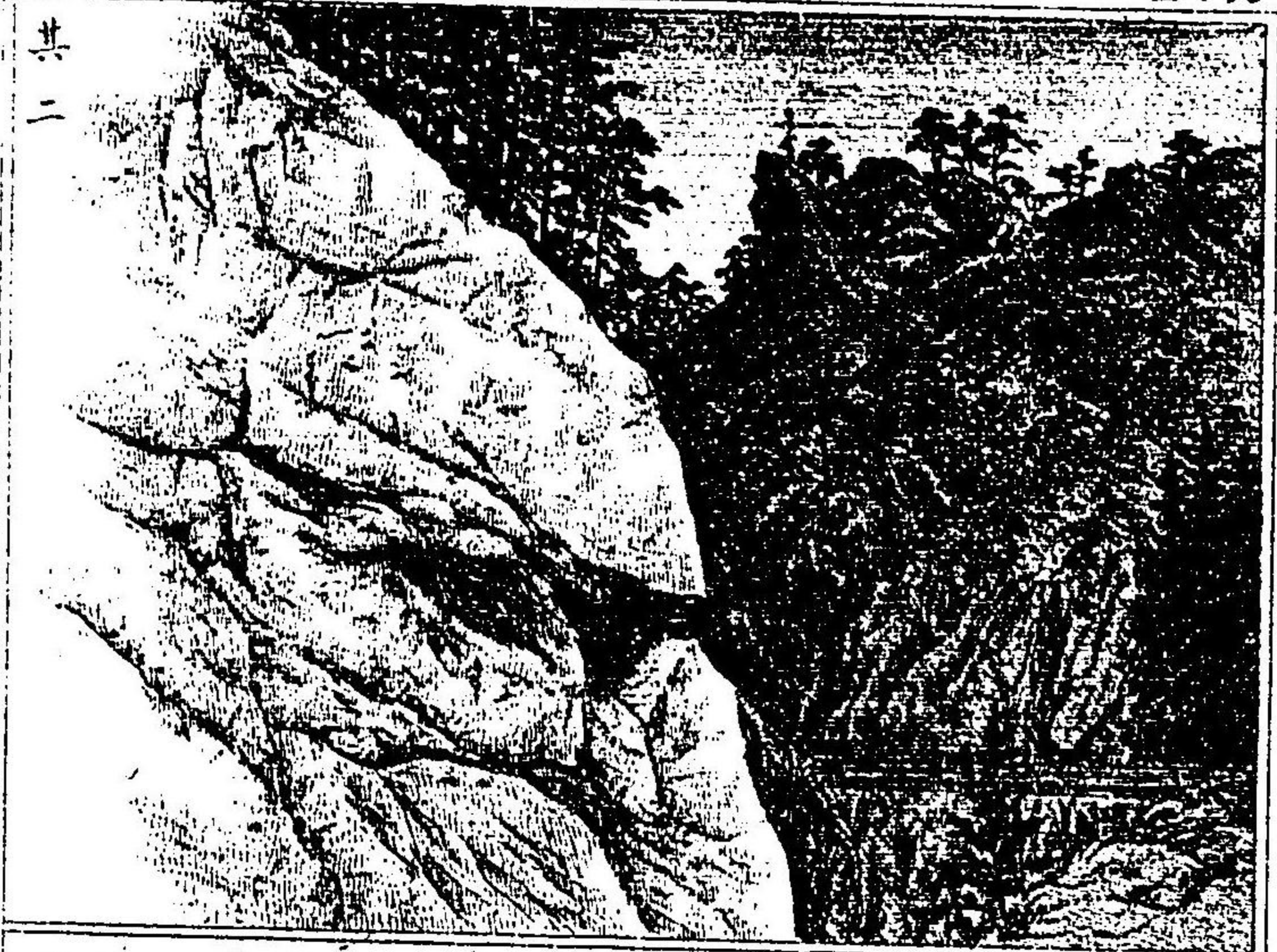
え政歌ん



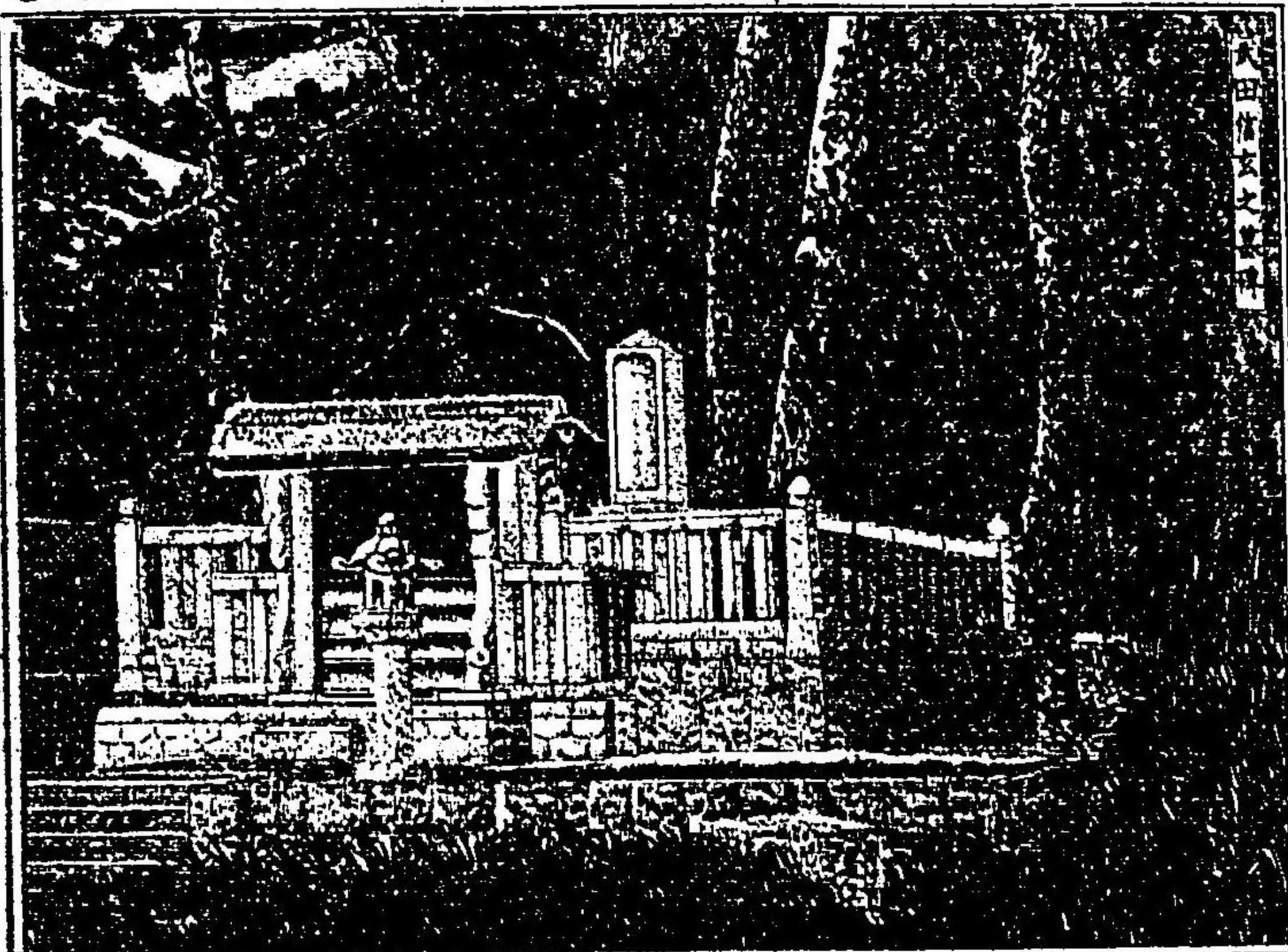
靈異なる清浄にして 寂寞幽趣蕭然たり
 山僧幸ひ一茅を設け 終日妙典を論究し
 終夜要文を誦讀す 如何ぞ驚峯を劣へき
 十二世日意伽藍之記に 堂塔樓閣于院備ふる
 昔日延山荆棘を開き 峻嶽を踏攀せしも
 碧落雲霧障なく 仰て鼻端を照きたり
 天を相去る遠からば 降し視れば浩々杳靄と
 豆相吳越をむらさき 駭相齊末を分ちて
 中に房の長岫を觀る 房の地ハ宗祖の舊地
 遠望潏然と淚を濕き 一字を建て孝東院とい
 今の奥院是なり
 投身湯鑊極群毛終向雲山深所逃宗祖九年



毎歲盛夏の候浴客ハ七八百人の多きに至
 鉾澤より韭崎へ三里 韭崎より山路西壹里に
 妙法寺あり茲に蛭石法論石ハ人口に膾炙す
 韭崎より北河岸に巨巖奇石連續して
 幽雅風景の壯觀あり故に七里岩の名は呼ぶ
 茲に新府の城墟在り
 御嶽ハ本州の名勝より甲府の北三重餘里在り
 荒川の清流ハ沙び河中に白色の大石あり
 處々に翠松を戴き巨巖の高さ拾七八丈
 岩窟天然の隧道を爲し仙瀑其高さ十餘丈
 山中風光の明秀なる有名の画人と雖ども
 三舎を避るの思あり
 金禪神社御嶽神と云日本武尊少産名神



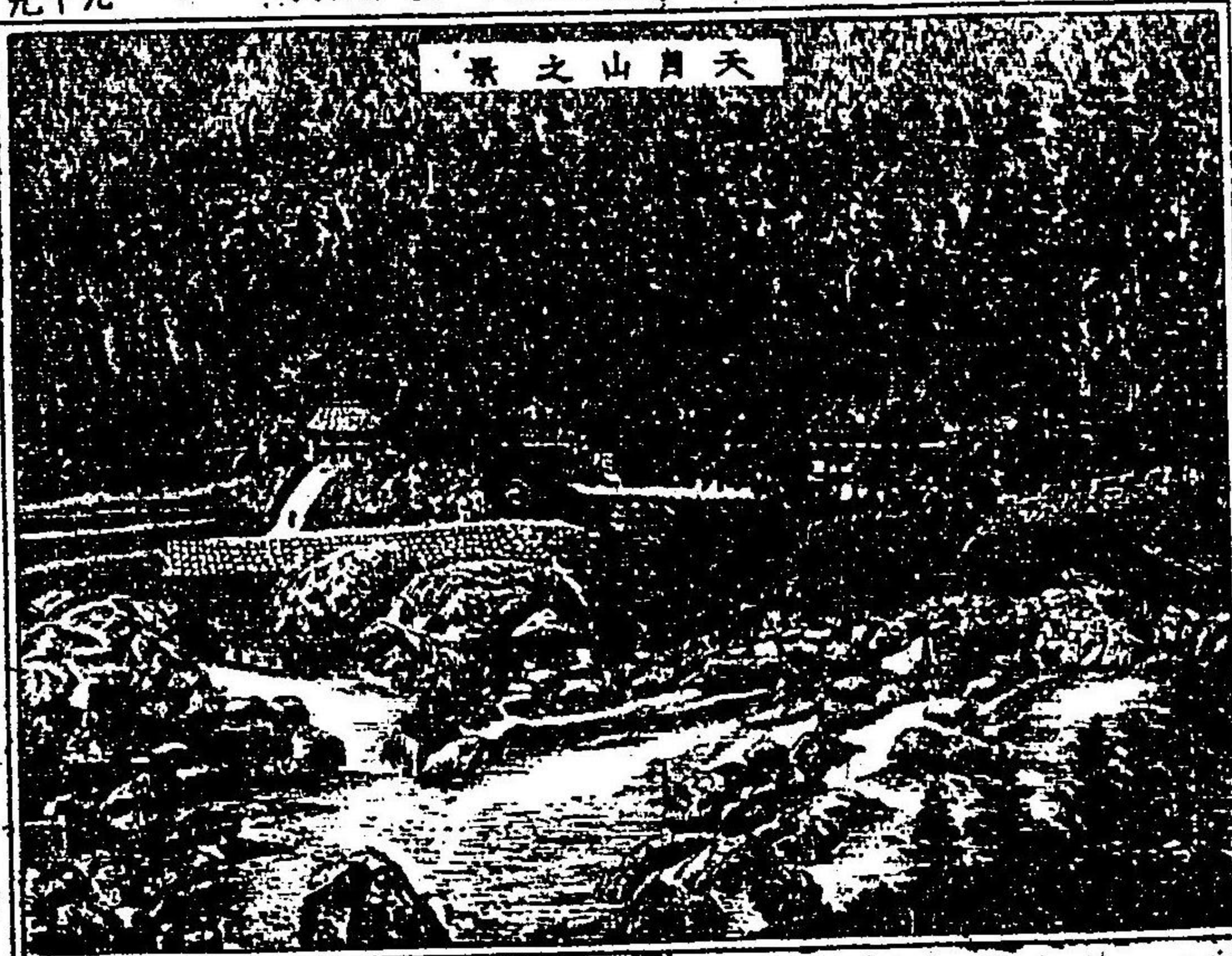
其二
 岩は沿て屏風岩まこと天神瀑或は小豆岩等
 奇石巨巖の壯觀あり
 鉾澤駅は甲府を距る四里駿河往復の要路
 東は富士川ハ瀕面し西は岡西墨々時ち
 商家旅舎軒を列べ舟楫便利の地にして
 州内の産物致草り郡中の一都會なり
 奈良田温泉は有名地鉄沢を距る西方四里
 平林村てふ處より阪路險阻にして五里
 湯島温泉場又到る茲に發夫あり荷を賣ひ
 險阻を登ること速なり
 温泉は岩間より湧出て熱湯にして三所あり
 一を御殿湯と謂ひ二を箱の湯と云ふ
 三を中の湯と呼ぶ温度は華氏百二十度



東端を里垣村と云東京へ出る要路あり
西の端、飯沼と謂信濃木曾路へ達し
南端を稲門村といふ駿河の通路あり
北端を古府中村と武田信玄故墟あり
信玄の墳墓ハ山梨の市中を距こと十三町
往々碑文を探る人あり此公ハ天正元年に死す
嗣子勝頼不肖して始め進時ノ北新府に
城郭を建築せしが天正九年に焼燼し
身ハ大目山に討死す
此地を出立て金魚川は我越て壱里計り
石和川鴨飼山に到る遠妙寺に勅作の墳あり
此より東原や勝沼を通過して道程三里餘
一向の葡萄園各村ハ専ら洋酒を造醸す



素戔嗚尊大己貴神合祀して神古たり
此山中水晶を産す目下東京上野博物館
陳列の壁玉直徑五寸當山より之の出品なり
山梨ハ舊甲府と稱ふ人口壹萬五千五百餘
城墟ハ三圍の郭にして武田信玄の建築あり
縣廳を錦町に置く其建築ハ内務所の
構造を模擬したり師範學校或ハ病院
其他公立ノ屬する煉火石屋美麗なり
此地山間なりと雖も百貨の品物輻輳して
人民日用品に至る迄敢て他邦を仰ぐと云
製絲場ハ慶々ト在り昔西洋風の建築にて
蒸氣機械を運轉を齒より絲を採ること
左右各十二座構たり



天月山之景

大月橋は明治十八年新設に架け其長さ六拾壹間其高さ九間二層に釣架を東京の吾妻橋に比較せし堅固美麗の鉄橋なり是より行程壹里三町猿橋の驛に着き猿橋は驛の中央として巖崖高さ二拾尋巨材を岩角に堆積し毎層外に出ること尺計を愈累積して遂に相合を猿猴の臂拱く如し甲府は距離拾二里餘東京通路の咽喉と古来内國の三奇あり所謂周防の錦帯橋木曾の棧道此橋を云驛中商家旅舎多し絹布販賣農林兼ね郵便局や学校の設あり土地頗る繁昌なり余輩旅行の都合して大月橋は立戻して



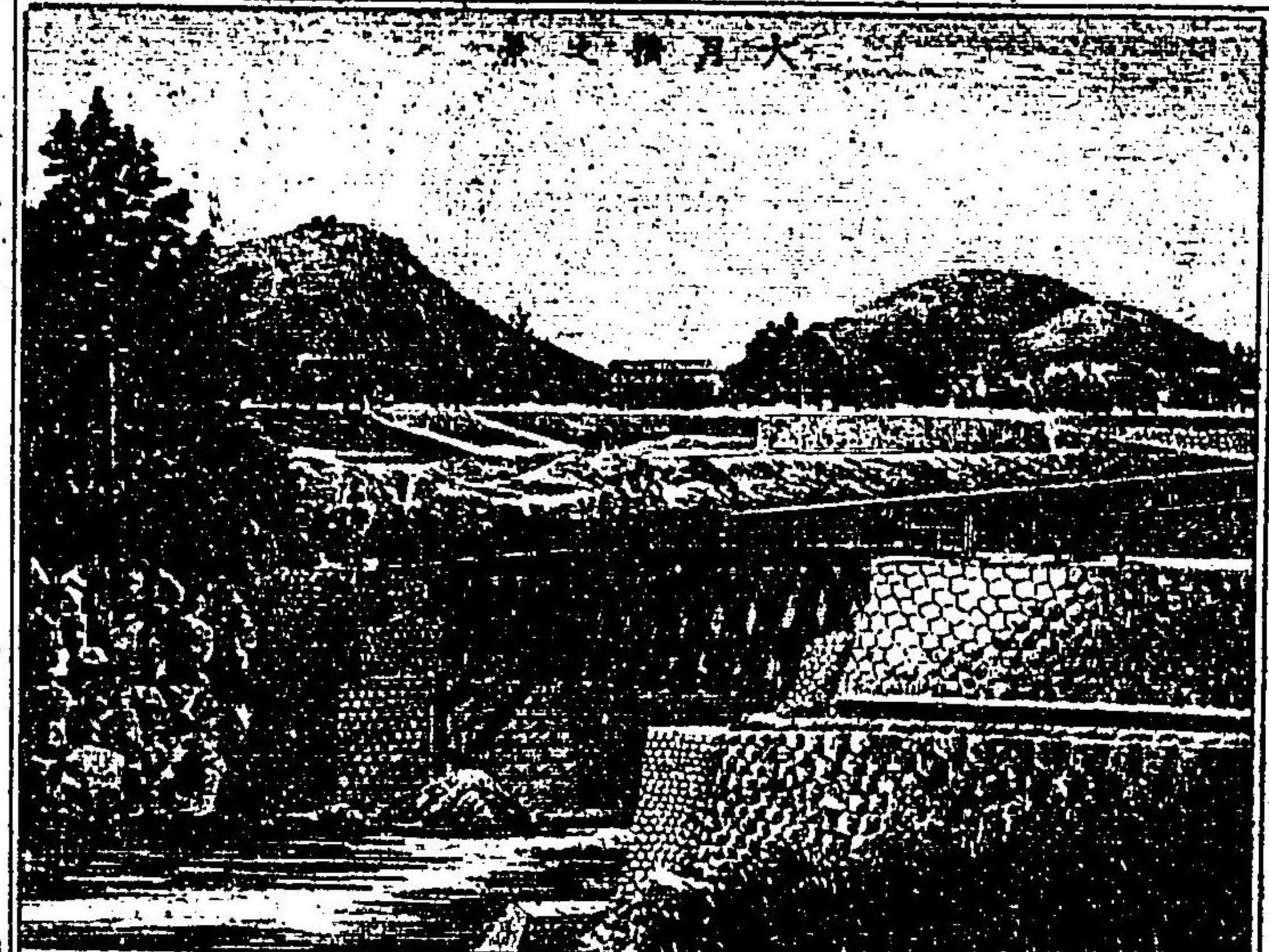
石和川の景

篠子峠に到る其行路險阻高低車馬通せし高嶺として歩行困難を盛興に乗進みたり山頂に到り下乗ふに暑中と雖も冷伐寒天目山や岩殿山も左方に近く眺望し是より下り坂路に向ひ初鷹の里や花咲村郡峰隱躍勢如龍鳥道雲間鉄通橋山去後霸圖滅間殺山河徒自雄 岡鹿門 しのきい淮うさめて名けんあ山中れ 初丁の里 季鷹 此處を即内と總稱を路頭とて凡て桑田なり各村養蠶は従事して専ら織機を業業に茲産する物品も真綿生綿琥珀織皆生絹黒八丈絹縹子紹や絁縞布遠く他方に販賣たり

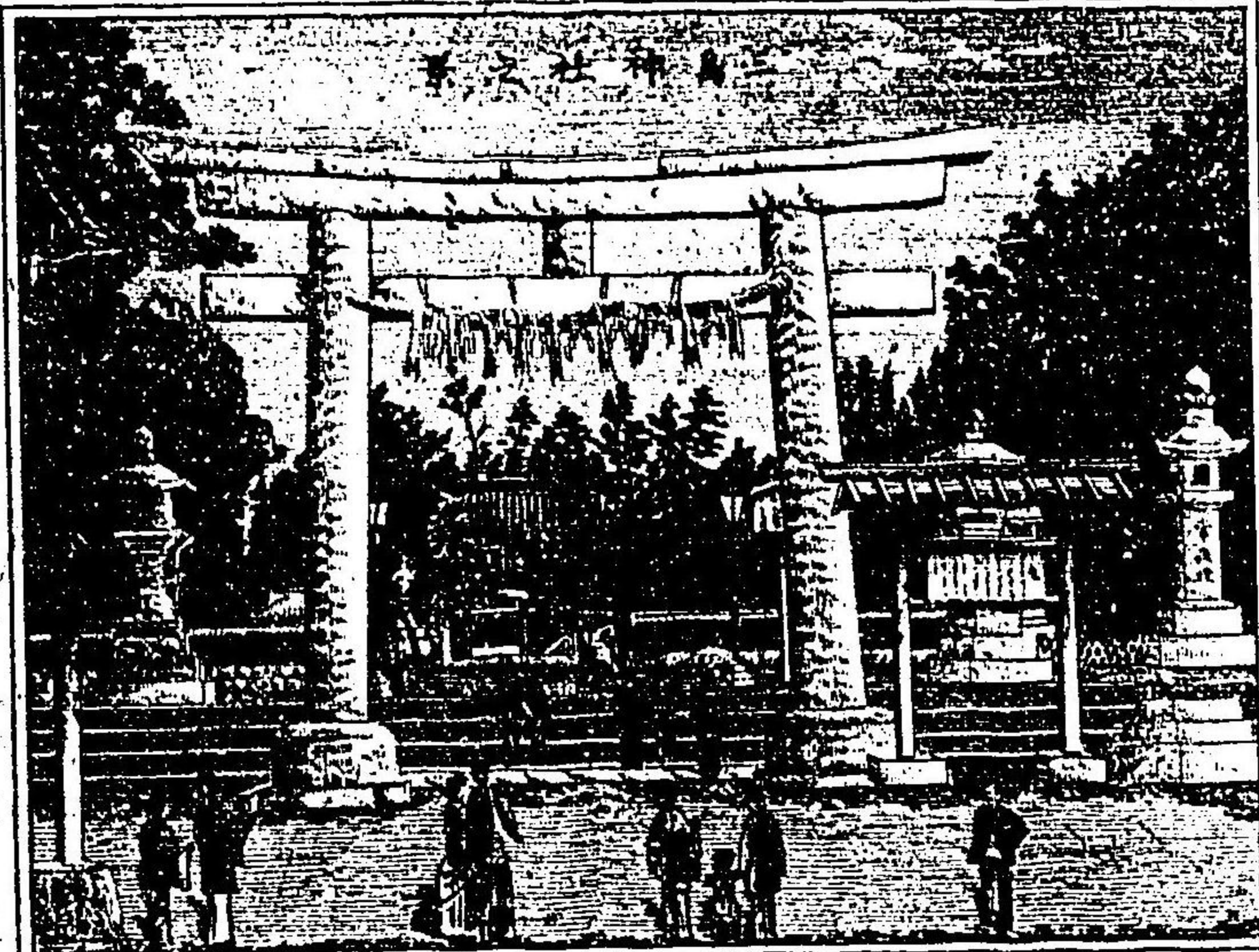


水晶 硯石 磁石 硝石 馬鈴薯 芋麻 葡萄 烟草 藍 白米 五味子 黃連 半夏
 甘州 松 榧 胡桃 柿 栗 梨 肉桂 松茸 繭 蘇和紙 蜂密 年魚 猪膽 真綿
 生絲 木綿織 縹子 紹 皆生絹 黑八丈絹 琥珀織 傘結 線子 太布 紬 縫織布

井鹽 阿片 芥子
 甲斐國驛路
 相模路 甲府 二里 石和 栗原
 勝沼 駒飼 篠子 初狩 花咲
 大橋 平後橋 鳥澤 犬目 野
 田尼 鶴川 上野原 相模關野
 武藏秩父路 甲府 小原村
 金川村 四里
 武藏橋本組
 同青梅路 甲府 小原村 五里



朝日川を打渡り行くと、二里拾五町谷村に到る
 谷村ハ少都會一して、其廣袤拾六町あり
 商業盛ニ依合テ、山間ニハ繁花あり
 是より桂川を打渡り、行程走里二十餘町
 田原の瀑を通過して、二里餘上吉田に到る
 此地富士登山の人、毎歲盛夏茲ニ雜沓
 自是扶桑第一山群、雲列彩雲間、尊其瞻
 視儼然立似坐九重朝百嶽、大槻清崇
 見ゆ人々、なほ、さき世限り、おまの宮よりけしき
 山中湖の西岸に沿ひ、萬龍段を越て駿河國
 須走より諸村を経て伊豆國三嶋驛に至る
 甲斐國物産



伊豆國之部
 此國の北部、駿相の
 東西南の三面を洋海
 南北拾志里其地勢ハ
 海中に突出え其形ハ
 山脈ハ海中に起伏して
 其大興ハ七島および
 小笠原の諸島あり
 水州四郡小分配す
 賀茂 また 名邑ハ
 人口を凡て拾四萬九千零餘人なり
 民俗ハ質樸にして 概もね薪炭および
 漁獵を業と為したり

兩國に翠巒連絡
 東西の廣袤七里餘
 相模より南走して
 粗半島の姿を為し
 百餘の群島羅列
 八丈島又南洋遠く
 洋海中に基布たり
 君澤 田方 那賀
 三島 下田 等なり



上小田原村 五里 丹波山村 三武藏留浦村
 駿河路 甲府 八里 敷澤 三切石町 八日市
 場 七下 山 三三 相又村 七二 南部 三三 萬
 澤 澤 駿河 六原
 同東路 甲府 一里 石和 八上 黒駒 一里 藤
 之木 三三 川口 三三 上吉田 四山 中六町 駿
 河須走村
 相模平山往還 初狩 三三 谷村 一里 小沼
 村 二上 吉田 三三 山中 二里 駿河須走村
 信濃路 甲府 三三 三三 三三 三三 三三 教
 來石 五里 信濃 萬木
 同佐久路 甲府 三三 三三 三三 三三 三三
 若神子村 二里 長澤村 三三 信濃 平澤村



泉質硫黄気味多し宜し児湯は泉質温和にて
 老人小童或は大病後殊々痔漏婦人諸病
 就中帶下症は効あり石湯は温度稍高く
 疝痕打撲等宜し宮湯或は真湯相同じ
 皆溪間より湧出して山間の幽趣は閑雅なり
 旅舎九つ溪流は沿ひ岸崖は倚て建築す
 戸敷熱海は比すれば稍々劣れり浴客も少し
 修善寺は禪宗にて僧空海の開基なり
 建久三年梶原景時が精銳の爲に襲ひ来て
 範頼汝は自殺召す其後まことに北條時政が
 頼家を此寺に幽閉し終に浴室に關殺す
 墳墓は今尚存したり
 同郡に温泉教所あり土肥に温泉三所あり



三島驛ハ郡の小都會 市坊ハ東西十八町
 商家旅舎軒をならべ 常に段販の地なり
 三島神社ハ官幣大社 大山祇神を祭たり
 境地ハ廣寛古樹多く 喬木鬱蒼社を擁し
 社殿ハ壯麗巍然たり 泉池に鴛鴦水禽
 游泳するの詠あり
 是より箱根驛に到る 道程ハ三里廿八町
 順路なれども我輩も 旅行の都合小由り
 更に南は路を岐し 修善寺の温泉に到り
 此の道程ハ五里なり
 修善寺温泉五所あり 獨鈷湯ハ河中に涌き
 至て熱く浴去難き故に 槽を分ち此を猪め
 温度適巨に調度為し 浴客の意に適たり

全 景



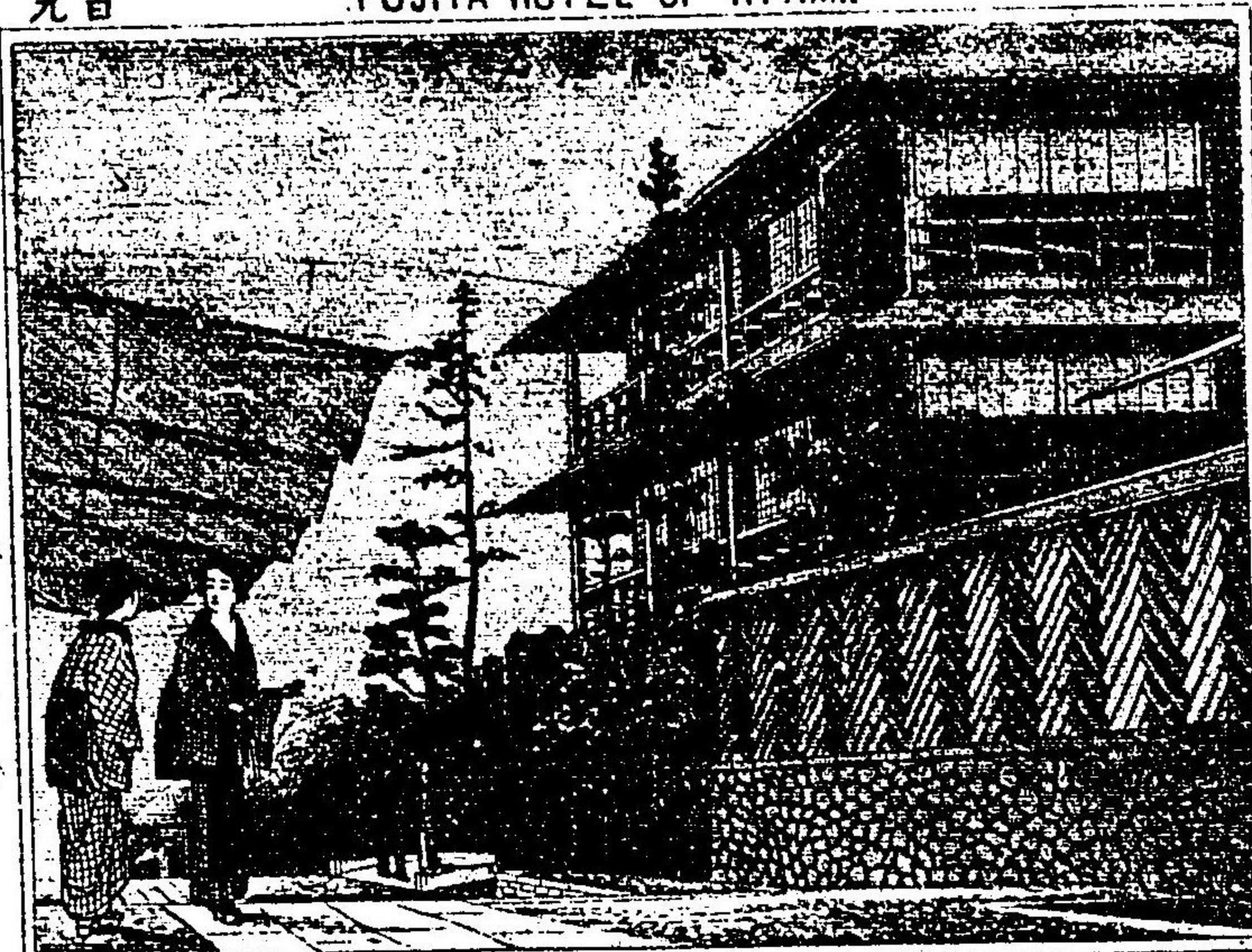
熱海温泉場は尤も著名なるものにして
 此地西ノ山を負ひ、東部は海ノ瀕面し
 客室は山際よりして海岸ニ臨んで建築し
 街衢は凡て石を敷き、駿雨至れば巷上ニ
 寸塵あるを視ず、旅舎は軒を並列し
 温泉涌出は四所ニ在り、第一を大湯と云ふ、第二
 河原湯、第三助太良湯、第四は平元右門湯なり
 泉質は塩酸曹達及び加爾基、苦土、酸化鉄
 第一肺病、痿痺、慢性脚氣、疝積、月経の不順
 子宮病ニ特效あり、
 大湯噴出は海ニ瀕し、海潮の進退ニ従ひて
 沸騰の蒸発すること一晝夜ニ三回ニ及び
 其噴発の鳴響は死も雷霆の如なり

卷之二

熱 海



古那温泉の其質は、岩硫二氣を合藏し
 腫瘍症ニ特效あり、烟毛及び上級原や
 湯島等は田方郡なり、
 本州は港灣最と号く、西岸は戸田、小田、田港
 田子や妻良港在り、南岸は長津呂港
 石廊崎ニ燈臺あり、下田港は繁華の地
 港内ニ雕鶴峙時、神子元島ニ燈臺あり
 東岸は外浦港や須崎、網代の湊在り
 修善寺を出て、並山、平井や軽井沢を経て
 熱海特ニ到る、順路尤も田子浦を瞰下し
 右の諸山は芝生、又富士峰を遠見、為し
 阪路の勞も忘れなり、此道程は八里なり
 三島よりすれば五里半

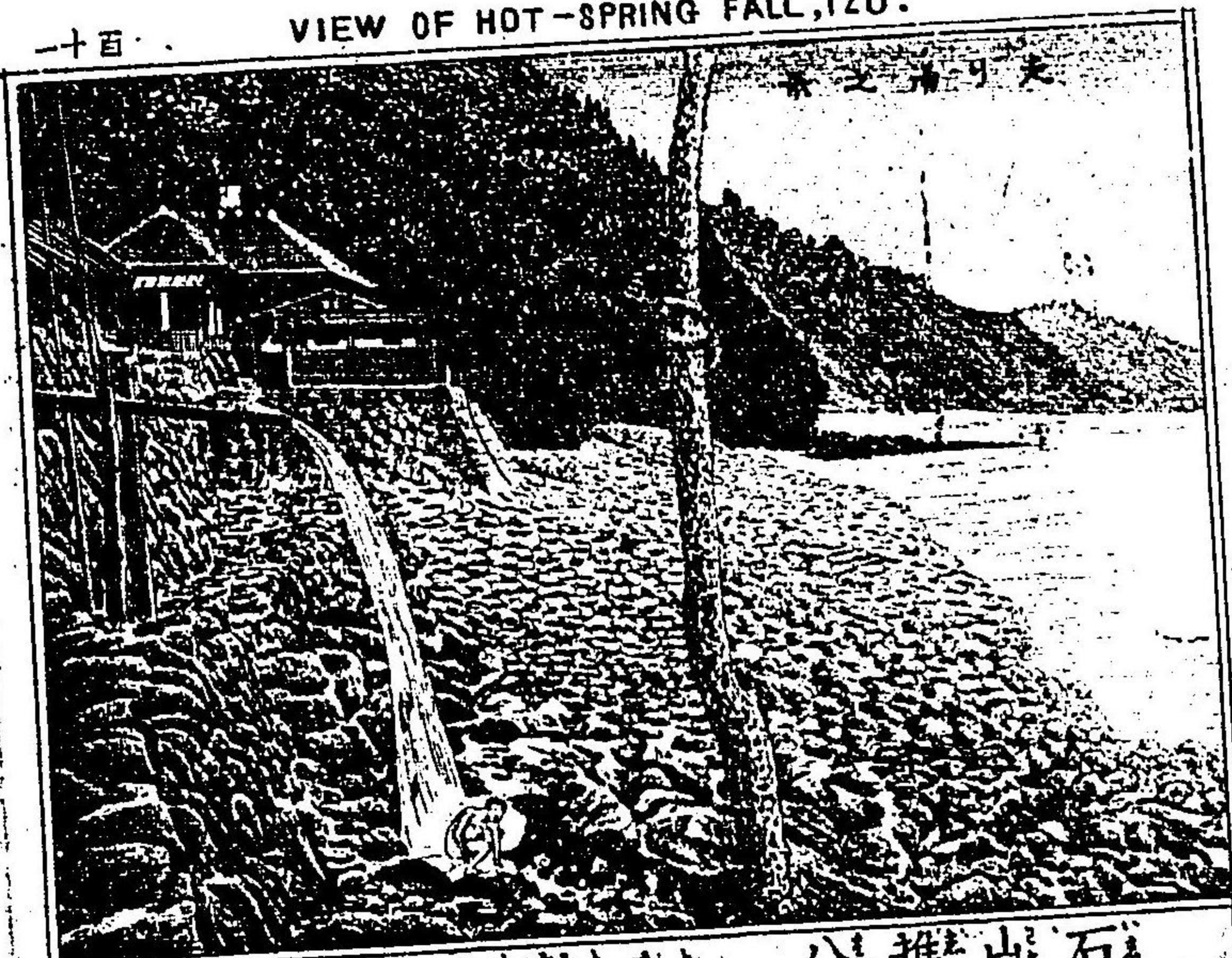


中の一島煙を噴あり恰も大艦の針路を迷り
 下田港に向ふに似り天祥は黄昏ならんとす
 盃を衝て月を迎たり。
 小樓呼喚小仙兼浴罷欄前例拳杯因病得間
 殊不遇况吾無病得間來 近江人 小野湖山
 風露滿蒼蒼涼振衣開扉小繩床先鴉而起
 先入浴此是温泉第一方 鹿野成齋
 頃まより伊豆海のさきより先は松原温泉を考和
 是より伊豆山に到る道程十八町風景宜し
 伊豆山神社は縣社にて軒窓突智を祭祀す
 石階躋ること三町壯麗にして巍然たり
 走湯瀑は山麓に在り巖洞に滴き音を架す
 其迅速なる矢の如し一所は浴室の構に在り



至熱物を瀹す可し湯戸廿七貫を架し
 毎戸浴室に導きて此を内湯と唱へつ
 浴客の隨意に調度す故に遊客常は多く
 旅舎の響應殷勤に就中藤屋樋口金井等
 客室の構造壯麗又園裡の栽培離亭まで
 西洋風を効ひたり余輩致は数日入浴す
 時將に盛暑なれど偶清風徐に來り
 水波起らず樓上酒を命じ欄に倚り
 海上遙に眺望す万里一波查として
 際限なく釣漁舟は波を逐て乍ち低く
 乍ち高く烟波に没し七島は波濤に浮み
 山水霞ぐと相映じ遠き者は淡くして
 逃るが如く近き者は濃くして媚るが如し

VIEW OF HOT-SPRING FALL, IZU. 一十百



物産

石 砥石 白石脂 温石 白土 七色土

山菜 柴胡 天門冬 藤蓐 麻柄 俗小市皮

推茸 石花菜 魚介 乾魚 鯉節 打鮑

八丈綱 藤布 雁皮紙 色吉紙 挽物

伊豆國驛路

東海道 三島十三里二 駿河沼津

熱海路 三島三十 大場村九里 熱海村

下田路 蘆山十七 北條村一里 大仁村十八里 本立

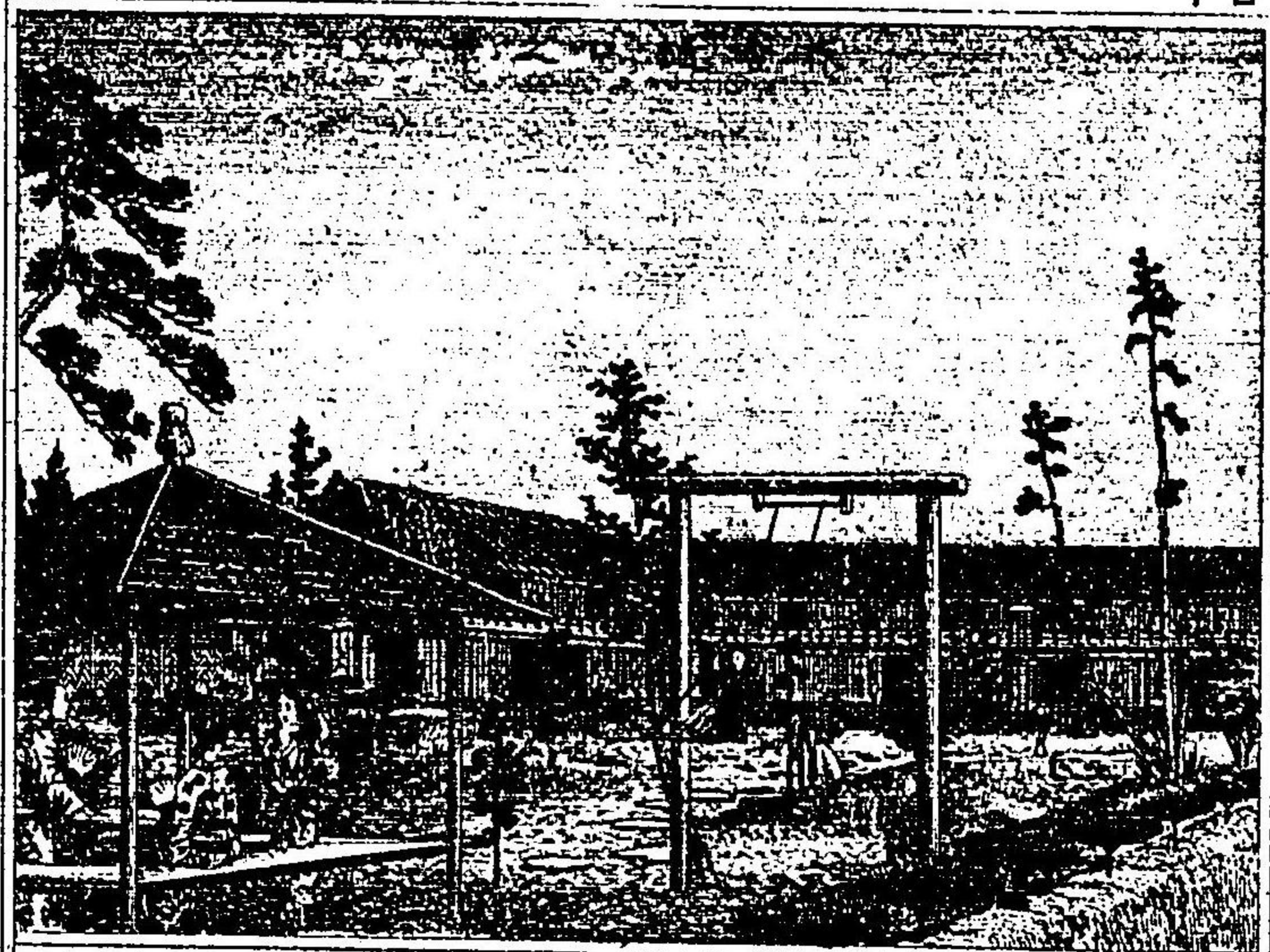
野村 野原村 梨木村 下田港

同沿海路 伊豆山村 熱海十二里 網代村一里

宇佐美村 和村 三里 八幡野村 三里 稻

取村 白濱村 三十一里 下田港

HIGUCHI HOTEL OF ATAMI. 十百



泉質は硫鉄を含たり、頭痛、腰痛、おみ
打撲、風濕、奇効あり、浴客常々絶事なし
此他温泉は松原や和田湯野や北湯野
河内蓮臺寺に在り、下智茂郡に二所あり
此より吉原に到る里途中、實平の城墟
頼朝が杉木隠の古跡、江浦に到る行程二里
茶亭の海望絶佳なり、石橋山に到る六十三町
竹典衝雨度、尋常懐古、荒茫空、氣間老樹、霞火
何處是春鳩、飛起石橋山 長三洲

真田與市の噴墓あり、早川の橋を渡れば
小田原駅熱海よりの道程は五里三十三丁
此駅より鉄道馬車、箱根湯本に着し
筆を止む故、三巻は箱根湯本に書切

明治廿二年一月十三日印刷
一月十四日出版
一月廿七日發行

版權所有

版權登錄

著者

出版者

發賣所

全全

定價金三拾錢

大阪府平民

上田

文

齋

大阪府下西區西長堀三丁目一號地

大阪府平民

青木

恒三

郎

大阪府下南區安堂寺橋通四丁目一號地

京都府平民

長谷川

末吉

大阪府下南區安堂寺橋通四丁目一號地

高橋

堂本

店

大阪府下南區安堂寺橋通四丁目一號地

高橋

堂支

店

東京日本橋區若松町一番地

高橋

堂分

店

勢及四日市港堅町

